川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成十八年一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻九四四号

日川協加盟

同人特集・私の一句

No. 944

一月号

『川柳塔』九五〇号記念誌上川柳大会のご案内

川柳塔社では『川柳塔』九五〇号を記念して誌上川柳大会を左記の要領により実施いたします。同人、誌友にかかわらず広く皆様のご応募をお待ちしております。

題・選者（各題2句）

「途中」（田中新一（番傘）　西出楓楽（川柳塔）　共選）

「カード」（平山繁夫（時の川柳）　高瀬霜石（川柳塔）　共選）

「ひびく」（福島直球（ふあうすと）　小島蘭幸（川柳塔）　共選）

「魚」（今川乱魚（番傘）　政岡日枝子（川柳塔）　共選）

締め切り　四月二十五日

発表　『川柳塔』七月号誌上。同人、誌友以外の参加者には発表誌送付

投句料　一〇〇〇円（定額小為替）

賞　各選者秀句に呈賞

用紙　『川柳塔』に添付、他にご希望の方は川柳塔事務所へご請求下さい。

投句先　〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六―二〇二
川柳塔社誌上大会係
電話〇六―六六二九―六九一四

自費出版　川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町９番４号
TEL (06) 6372－1178
FAX (06) 6372－1196
E-mail : bikenart@wonder.ocn.ne.jp

謹賀新年

河内天笑

挨拶はオウムに似たり春の街　白柳

昭和四十四年（酉年）に川柳塔社初代編集長(故)清水白柳氏から頂いた年賀状の句です。お正月の街角で挨拶を交わしている姿に出会うと、すぐこの句を思い浮かべるくらい強烈に私を刺激した作品です。昭和四十五年十一月十二日に心筋梗塞で亡くなられるまでの僅か三年余りの間に白柳先生には多くを教わりました。

一、常に善意で人に接する
一、丁寧に優しく指導する

などです。

先生が亡くなられたあと皆が「私が一番優しくしてもらった」「私と一番親しくしていただいた」と異口同音のよう言うのです。実は私も「一番親しく教えていただいた」一人でした。当時、脱サラ七年～十年（32才～35才）の私は商売がやっと軌道に乗り出した頃で、競争社会とは全く異なる温かい川柳界の人々に癒されました。特に自己流で五七五の世界に飛び込んだ私に、川柳の指針を与えて下さったのが先生で、例えば小句会での披講に際して没になった句の中から何句かを選び、何故没にしたかを説明されたことで、私にとって「川柳とは何ぞや」の大部分を教わりました。

初めて参加した句会では「握る」の題で、私の没句「ティーアップみんな握った顔になり」を引いて「これは多分ゴルフ場で、チョコレートか何かを賭けた折の事を詠んだのだと思われますが、ゴルフをせん人にはさっぱり分からんので、『一般性に欠けた作品』として処理され、たいてい没になります」とか、また別の会で同想句の共倒れが出た時など「たまたまこの会では同想没ですが、全国の川柳の会で季節柄、「祭り」「西瓜」「花火」などの題が多く出題されています。人間の考える事はよう似ていますので同じ作品がどんどん出ます。没になったらまたよその会で出しはったらよろしい」。など簡潔に方針を教えて下さったことを今有難く思い出しています。

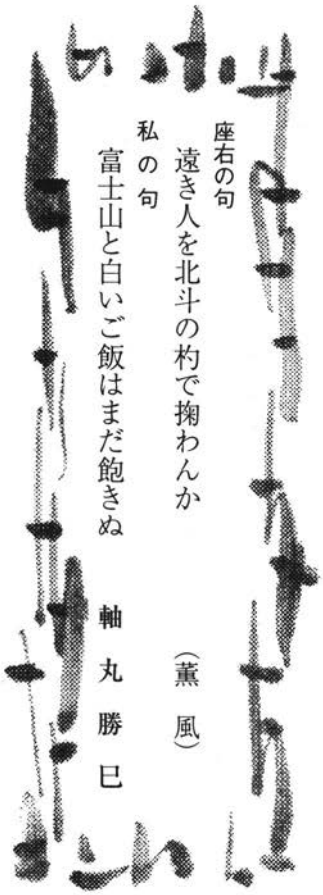
指を折りますと今年は白柳先生の三十七回忌です。十一月の合祀祭ではうんと御礼を言うつもりです。白柳先生に竹原川柳会の十五周年大会に連れて行って貰いましたが、今年八月には、たけはら川柳会五十周年の記念大会が催されます。

川柳塔誌九百五十号記念誌上大会の募集が始まりました。こぞってご参加下さいますようお願い申し上げます。

○

風邪引かず転ばずお酒飲めるよう　天笑

これが私の年頭句です。昨年につづき今年も賀状を失礼致します。ご容赦のほどをお願いします。ことしも元気で川柳出来ますよう、体に気をつけてがんばって下さい。



座右の句
遠き人を北斗の杓で掬わんか　（薫風）

私の句
富士山と白いご飯はまだ飽きぬ　軸丸勝巳

川柳塔　一月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「岩船寺　土鈴戌」

■巻頭言　謹賀新年……河内天笑…（1）
追　慕……小島蘭幸…（2）
川柳塔（同人吟）……河内天笑選…（4）
川柳塔の川柳讃歌(13)……木津川　計…（54）
自選集……（55）
水煙抄……板尾岳人選…（59）
私の一句〈同人特集〉……（82）
愛染帖……新家完司選…（95）
誹風柳多留一一篇研究　5……（98）
檸檬抄「呼　ぶ」……仁部四郎・藤田泰子共選…（100）

追　慕

小島蘭幸

のんびり屋で何をやっても長続きしなかった私ですが、十五歳から始めた川柳だけは五十七歳の今日まで続いています。今日まで続けてこられたのは、先輩柳人、先生、師の優しい一言や、慈眼、温顔があったからだと思います。

静かに目を閉じて来し方を振り返ってみますと鮮やかに一つ一つのシーンが浮かんで来ます。その一つ一つのシーンを思い出すままに書いてみました。

川柳を始めて間もない頃、いがぐり頭の私達四人を前に約二時間、とても真面目に〝川柳とは何か〟を話して下さった石原伯峯先生。

山内静水会長と一緒に初めて川柳大会に出席した私に、「どこから来られましたか」「今日何句抜けましたか」「頑張りなさいよ」と優しく声をかけて下さった、広島川柳会会長の熊谷蓮生さん。

毒舌の俗さんとみんなに親しまれていた岡田俗菩薩さんは、呉の句会で蘭幸の句が一番いいと言って下さいました。川柳を始めてまだ二・三年の私にです。それはもっともっと川柳を勉強しなさいよ、と言われているようでもありました。私にはいつも仏の俗さんでした。

「犬」……桒原道夫選…(102)
一路集「暦」……山中康子選…(102)
「変わる」……大橋鐘造選…(103)
初歩教室「願い」……三宅保州…(104)
秀句鑑賞「同人吟」……牛尾緑良…(106)
「水煙抄」……居谷真理子…(108)
■句集鑑賞『森』(池森子句集)……政岡日枝子…(109)
■句集紹介『百花園一』(福島万年句集)……小島蘭幸…(114)
十二月本社句会……(110)
各地柳壇(佳句地十選/津守なぎさ)……(115)
高野山合祀法要……(129)
柳界展望……(169)
一月各地句会案内……(170)
■編集後記(ひとこと/喜田准一)……楓楽・朱夏…(172)

座右の句
杉木立いま満月をさし上げる　(天笑)

私の句
幸せは次の頁に待っている　山本宏至

「蘭幸さん、呉で何かあったらいつでも言うて来なさい、いつでも相談にのりますよ」と言って下さった中津泰人さん。

路郎忌句会で、「蘭幸さんは女性だとばかり思ってました、やさしい句を作らはるんで」と声をかけて下さった傍島静馬さん。

初めて本社句会に一人で出席した私に、「蘭幸さん、遠方から来ていただいたのに、今日は選者のお願いが出来ません」と申し訳なさそうに言われた清水白柳先生。

路郎忌句会で恐る恐る色紙と筆を差し出す私に、ニッコリと色紙を書いてくださった後藤梅志さん。

かも川柳大会で静水会長の入選句にニヤリと笑って頷かれた川上三太郎先生。

呉の大会の帰り、ラフな格好で出席した私に「蘭幸さん、いつ選者に指名されてもいいように大会にはネクタイをして行くように」と声をかけて下さった田中好啓さん。

投句を休んでいた私に、蘭幸さん私の選に投句してください、待ってますと長い長い手紙を書いて下さった西尾栞先生。

きゃらぼく忘年句会の前夜祭の席で酔書薫風と色紙を書いて下さった橘高薫風先生。

次々と鮮やかに思い出のシーンが浮かんでくるのですが、紙数が尽きたようです。この続きはまたの機会に…。好きです川柳人！

川柳塔

河内天笑選

竹原市　小島蘭幸

俎の音は長女か二女か　春
日曜日　長女も二女も妻もいる
花束を抱いた夢など見ていたか
団塊の世代がどっと来る祭り
亡父が立っている傷だらけの柱
震度3大増税がやがて来る

三田市　北野哲男

任しとけ言った夫に任される
リモコンを儂の背中に向けている
風呂上がり本当の歳が映ってる
謝謝とサンキュー　メルシー　パスポート
ひったくるように取り込む両替機
熟すまでキウイ供えて手を合わす

富山市　島ひかる

幸せを遠くで祈る初詣で
福寿草　古木の松を引き立てる
笑い声する家が好き福の神
計画を立てると湧いてくる元気
三丁目の夕日息子に奨められ
一本の道で迷ってばかりいる

豊中市　藤井則彦

野鳥にも覗かれそうなお慶び
六法にない罪犯すスズメバチ
バーゲンの朝から妻は腕まくり
取れたてのカボチャとちょっと睨めっこ
孫自慢聞くふりをして喜ばす
追悼をされてるときは人格者

八尾市　髙杉千歩

一族の最高齢や戌の春
おせち見て粥すすってる三箇日
シナリオを書き直してるお正月
介護1素直で無邪気装うて
寂しさの底で魔法の杖さがす
地に還る落葉にそっと願いごと

東京都　岸野　あやめ

氏神様へ盲導犬も初詣で
子の家へ美味いお雑煮食べに行く
駄菓子屋の小母ちゃんいじめっ子を叱る
露の世に仏壇という重きもの
削除キー浮気のツケをポンと消す
祖母ちゃんもおつき合いある十二月

米子市　青戸田　鶴

明日から立直ろうと山仰ぐ
口ずさむ心経に朝明けてくる
有頂天に釘打ったのは仏さま
とびらの向こう地球の悲鳴聞こえるよ
よく食べて悲しみからはのがれよう
なに事もなくて暮れるとほっとする

東かがわ市　神保　坊太郎

町内に無いものはない店が出来
変わり身のはやい男の勇み足
勿体ない勿体ないに陽が当たる
神さまに凭れ切ってる絵馬を吊る
なれそめを言わぬと話はじまらぬ
秋深し隣は遊んで食える人

藤井寺市　太田　扶美代

声かける間もなくコスモスが散った
生け垣を通して秋の町を見る
釜飯の中はすっかり秋景色
恋愛はするものでない堕ちるもの
もの想いわたしの中に棲む誰か
忙しい一日だけどよく笑う

黒石市　相馬　一花

焼き芋に白衣も走る寒の入り
大玉に狙い定めるリンゴ泥
最初から男子トイレに行く熟女
微笑みの裏で戦う水面下
天下り好きでたまらぬキャリア組
変人と言われるほどのお人好し

和泉市　中川　楓

たまゆらの別れを惜しむ寒い駅
毒ぬけた夫婦にいつか秋の章
誓文払ゼロを数えるダイヤの値
褒められて厚物菊を剪ることに
冬布団陽差しゆっくり吸ってくれ
無駄な物あってゆったり出来る部屋

宇部市　平田　実男

日曜も祭日もない救急車
美人にはとても良く効く美人の湯
まだ燃える火種若さの秘訣かも
多数決核より怖いこともする
点滴に勝る子の顔妻の顔
ことわれと言っております妻の目が

和歌山市　木本朱夏

ネクロポリスの死者の声聴く星月夜（トルコ再訪）
気球あがるカッパドキアの夢舞台
驟雨きてマリアの家の軒を借る
トロイ幻想　木馬にひびく鬨の声
残照はブルーモスクのタイルにも
切手売る少女にじっと見つめられ

豊中市　安藤寿美子

犬嫌い猫嫌いでも戌の年
読み初めにえらぶ薫風句文集
いつものと言えば酒屋が持ってくる
松茸は買わぬ産地が気にくわぬ
捨て植えの菊咲きました仏さま
秋灯下うそ寒いこと聞かされる

美作市　大石あすなろ

柿の皮くるくるむいて秋深む
お取り込みらしく電話が素っ気ない
回れ右　思い残しがないように
スランプを抜けたか急に腹がへる
渋滞の車はみんなふる里へ
相合傘それから波が立ち始め

和歌山市　桜井千秀

埋もれ火もやがてやがての夢を追う
耳澄ませても話濁ってくるばかり
強行突破振り向く余力ないままに
理不尽な答え尤もらしく言う
愛と憎からんで石榴爆ぜてくる
臑の傷いたわりながら年が明け

藤井寺市　鴨谷瑠美子

心地よく揺れて駅弁食べている
好きになり一方的に熱上げる
この身まだジャズに陶酔したりして
生たまご持っているので走れない
間違えた事を他人が覚えてた
喜んでくれればうんと頑張れる

和歌山市　上地登美代

こんどこそこうなるまいと反省記
紙いっぱいに愛という字を書いてみる
四股踏んでお出掛けします肩パッド
曾孫抱くそんな夢みて頑張れる
天職と思えば弾む野良仕事
あれよそれよと化石語通じ合う夫婦

さいたま市　星野育子

歩道橋元気な人は下走る
限定と言われ思わずサイフ出す
味見ずに色に魅せられりんご買う
メールでは何ども言えるありがとう
回り道した分だけの友がいる
遣り繰りの算段できぬお金持ち

松山市　宮尾　みのり

道の駅も山もみかんの色となる
真っ白に干し太陽を折り畳む
巡り合った縁紡いで老いの坂
四季巡る恨みつらみは浄化させ
突きつめてみれば私も下ごころ
結局はスローな妻に指図され

豊中市　水野　黒兎

ビルの街子に忘れえぬ里となる
秘密だが洩れ出ることも期待する
日本の砂丘にラクダ似合わない
雪払い地蔵の笑顔取り戻す
村人のことば吸い取り積もる雪
自宅地図学校よりも大きめに

吹田市　瀬戸　まさよ

そのままにしてよ落葉を踏みたいの
いろいろのパン食べましたやはり米
五　六歳若く言われてなお不満
秋深しさあ物思い始めましょう
美人はきはき女性議員に乾杯だ
真っすぐで正直過ぎる人きらい

枚方市　寺川　弘一

ブランドのパジャマで過ごす日曜日
レシピにはどんな味かは書いてない
宅配便いつも我が家を通過する
定年後貧乏揺すり止まってる
ストレスも酔わせてくれる屋台酒
さやさやとお金を使う人が好き

西予市　黒田　茂代

コンパスで描いた今夜のお月様
白刃の風が芒を薙ぎ倒す
穴入り前に日向ぼっこをしてる蛇
胡弓の音あれは芒のすすり泣き
ひっそりと風の形に花野暮れ
大自然の宝に埋もれ過疎に生き

西宮市　西口　いわゑ

いわし雲なつかしい顔思い出す
元気かとそっとのぞきに来るすずめ
流行よりやはり私流にする
蕾たちの希望どおりに咲かせたい
何げない顔で火花を散らし合う
天高し今を生きろと言う如し

鳥取県　新家　完司

秋田より美人が多い僕の町
勝ち組はベンツ負け組はチャリンコ
図書館に欲しいサウナとマッサージ
しけた面するから蜂が寄ってくる
苦労した人はどなたも先生だ
転がって曲がってやっと十二月

老妻に言い負かされて空しい日
無視されて老いの沽券を狂わされ
死ねばすぐ捨てられるゴミうんと溜め
眠れぬ夜指圧でツボを押してみる
賀状書き今年も筆が持てました

岡山市　井上柳五郎

居酒屋に誘う男の下心
どの子もこの子もみんなローンの網渡り
欲望の河を泳いでいる人魚
学割で恋の電車に乗るニキビ
シナリオは二人で描く披露宴

倉敷市　井上富子

切り貼りの障子破った子が笑う
残り物食べては思うダイエット
月見ても親子で違う夢を持つ
本人より信用される保険証
手をひいて歩いた孫が杖になる

倉敷市　撰喜子

愚痴るまい思えど口惜し手の痺れ
騙されていると知りつつ買う薬
遠い日の昭和史何故か懐かしい
住み慣れた町見違える霧の朝
一晩にキュウリの伸びる生命力

真庭市　国米きくゑ

小包の金釘流は父の筆
茶柱の縁起信じて背を伸ばす
老夫婦案山子祭りの握り飯
今風の案山子祭りに癒される
紅葉狩りこれが極楽浄土かも

真庭市　福嶋智恵子

一人遊びだあれも笑わなくなった
感謝などした事のない子に育て
他人の飯食った苦労はまぶしいよ
美容院の帰り多弁な妻になる
おばあさん試着室から出てこない

美作市　小林妻子

触れないで小さな枝も私です
母の言葉の一つひとつに愛の鍵
もう一人の私おしゃれが好きらしい
アドリブで来た人生に悔いはない
割り切れぬ答の中にある情け

美作市　山本玉恵

御近所と比べて決める寄付の金
入学に光る一歩のスニーカー
前向きに背伸びしながら生きている
この指輪母と苦楽を共に生き
切れ味が違う亡父の研いだ鎌

岡山県　福原悦子

竹原市　岩本笑子

切り干し大根がうまい冬ですね
葉をたたむきっと命乞いだろう
陽の残るうちにカラスも帰ります
破顔一笑　時々テレビ消すがいい
前向きと善処で一年過ぎました

竹原市　時広一路

裸木の無口のんびり春を待つ
こんにちは言うロボットの無表情
万歩計にお暇あげてと僕の膝
パソコンも出来ぬ古さで生きている
どの雲に僕のストレス乗せようか

竹原市　正畑半覚

源流は無色透明だった川
川という天の涙にある願い
まごころで向かえば川が歌いだす
ただ下る川の気持ちを考える
故郷の川で裸のおつきあい

竹原市　森井菁居

突き放す心は鬼になっている
事なかれ主義に徹して楽になる
約束を当てにしていたのがうかつ
元も子も無くしてしまった欲の皮
さすがだな嘘をつかない炊飯器

竹原市　石原淑子

天も地も人も輝く新たなり
新年も夫真ん中に回る倖
譲り合い労り合うて舞う落葉
駆け引きの嫌いな質で白い旗
残飯の行方を想う飢え思う

東広島市　福島万年

住みついた猫が俺には知らん顔
愛してるなんて言わないお母さん
子の夢を見て胸騒ぎ白むまで
踏切りが私の街をぶっちぎる
大変だ破れ松茸一万円

美祢市　安平次弘道

試供品妻はいつでも生き上手
風に伏し地に伏しやがて夢に伏し
あいまいな毒が訴状に塗ってある
過去抱いているから愚かさが見えぬ
パレットに味方の彩がひからびる

熊本市　永田俊子

街灯が平和な夜明け待っている
大臣拝命私はうつつ蝉の殻
工事した汗が見ている渡り初め
枝豆がビールと聞いてる裏話
老いて思う待ち時間のロスタイム

熊本県　高野宵草

嵌めて覚め外して入れ歯眠くなる
几帳面な妻にルーズさカバーされ
追憶は亡母に不孝の悔いばかり
正確に回る地球が速すぎる
マンネリで今朝も薬を飲み忘れ

熊本県　岩切康子

菊人形戦国男女のものがたり
誤解とけ平常心で世話をする
猿の芸拍手送って喜ばす
思い出し悔しい奇声独り言
雑踏を避けてゆっくり歩くリハ

唐津市　久保正剣

病人の機嫌で飯が運ばれる
老漁夫の暦違わぬ蛍烏賊
チャルメラが鳴るとオデンが旨くなる
まだ弥陀の誘いにのれぬ作句欲
古里の秋を絵にする赤トンボ

唐津市　樋口輝夫

選挙戦握手された手すぐ洗い
明日のため尻尾ゆっくり休ませる
仮面など被っちゃおれぬ喜寿の坂
まっさらの帽子忘れて来たホテル
診察券いっぱい貯めている財布

唐津市　山口高明

本懐を遂げたおとこの貌や良し
口ほどで無いと分かって当てにせず
安産の体型だよと褒め上手
娘には言うなと岳父出してくれ
僕だって般若心経ぐらい読む

唐津市　宗水笑

うぬぼれがここまで来れたエネルギー
後継ぎがなくて鉈鍬納屋で錆び
ヒミコかとまごうヤングの首かざり
錠剤を零して母の四つん這い
ジーパンの破れ売ってるおしゃれ店

唐津市　坂本蜂朗

拍手して祝辞を早く終わらせる
予期しない道を往く子に妥協する
親譲りアウトドアなら目が光る
愛らしい恋に色つけたがる親
イレブンの孫持つ母は偉大なり

唐津市　市丸晴翠

未知の老いノックもなしに入り込む
癌告知血圧計の乱高下
肝臓の謀反に禁酒無念なり
ボロボロになって縋った母の胸
ガソリンの高値自転車納屋を出る

唐津市　井上勝視

口にせず互いを見てる老い二人
老夫婦子さえ他人と覚悟決め
夢も見ず敵も作らず畑を打つ
一冬にしみじみ齢を知らされる
流れゆくわくら葉思う除夜の鐘

東かがわ市　原賢

神様に生命預けて吸う煙草
戸惑いを見せると二の矢飛んで来る
職退いて雑巾しぼれるようになり
幾山も越えて人間らしくなる
目立たないとこで打ってる父の釘

東かがわ市　川崎ひかり

離婚など無いと夫は信じてる
欲の皮十二単にまとってる
あちらたてこちらもたてて干からびる
私の批判は他人がしてくれる
男親気持ちばかりが空回り

東かがわ市　池内かおり

お点前の仕草になって溶く卵
患者からまずは試してみる薬
手に入れた時から次が欲しくなる
血を分けた証拠に同じ丸い鼻
一言が心のひだにしみとおる

東かがわ市　伊勢八重子

人生の錨下ろして同居する
電源を外してそぞろ菊日和
無一文になって人情透けて見え
百度石心の刺を置きに来る
終章は自分流にと身構える

東かがわ市　成重放任

血の巡りおそいは俺に似たものか
歯を取られ歯科医を恨み粥すする
一時間待って治療は二一三分
手を焼いたあの娘も今は二児の母
手ぐすねを引いて獲物を待っている

東かがわ市　清川玲子

少子化に産院寒い風が吹く
石仏の眉の辺りに母偲ぶ
かあさんを偲べば白い割ぽう着
栄華なる太古を偲ぶ絹の道
欲心捨てると靴が軽くなる

高知市　北川竹萌

防災完了時化の予報も気がかるい
花が好き鉢の植え替え日が暮れる
行動も二キロ範囲と決めている
鏡川撒餌に競う鴨と鯉
詩歌のねた求めて今日も暮れにけり

高知市　小川　てるみ

カッとなる心へ欲しい緩和剤
諦観も妥協も老いの一里塚
悪役に徹しきれずにする偽善
うき雲のひとつが亡父の顔に似る
玉手箱あけて六十路のクラス会

高知県　小澤　幸泉

生きるにはつらい私に孫ができ
何はともあれ生んで生まれておめでとう
妻の絵に夫の夢が抜けている
負け組のうずき政治にかき消され
昼の街まだまだ今日がつかめない

高知県　赤川　菊野

世が世なら平家武将のお姫様
夢のせて雲はどこかへ行ったきり
尽してもつくし足りない人思う
ジーンズを穿いて八十路を闊歩する
まだ欲があって神様仏様

松山市　丹下　美津子

いただいた恩師の賀状保存箱
故里は噂も出来ぬみな身内
この世では自然の猛威歯が立たぬ
来年はまた金のいるいい電話
菊日和つい誘われて小半日

松山市　髙橋　宏臣

ジャンケンポン負けた男の独り言
あやとりのうまい貴方に踊らされ
メダカにも意地の小骨はちゃんとある
どんぐりの仲間で揺れるやじろべえ
節くれた指人生の機微を知り

松山市　古手川　光

夢を描く余白が狭くなるばかり
猫舌に恐い鍋焼きうどん出る
サスペンス妻の予感が外れない
昔の政治家はプアアンドピュア
犬の名も差出人にある賀状

大洲市　中居　善信

襟立てて酔うて候暮れの町
ずばり言う敵も味方も山といる
お役人の詭弁へ腹が煮えている
携帯で写す何でもない仕種
残念なことは親父に似すぎてる

砂川市　大橋　政良

羽化というボタンは神の手で押され
裸婦の絵に引き寄せられる絵のこころ
終点の椅子から僕もたそがれる
風の戯画影絵が見せるラブシーン
どたん場に来て手のひらを返される

弘前市　髙瀬霜石

振り向けば確かにあった曲がり角
手のひらで小さな狼煙上げている
古漬けの味エリートにわからない
生傷が絶えぬ青春交差点
青空を鞄に詰めて朝を出る

弘前市　福士慕情

スーパーのチラシで決まる晩ごはん
俎板に疵つけたのは鮭のアラ
お握りとタクアンこれもいけている
空腹を訴えている鯉のくち
善人の集まり不味い酒になる

弘前市　櫻庭順風

わくわくと陸羯南の詩碑の道
りんご畑を俯瞰している峠道
岩木山と対峙し安堵する石碑
対話には見えるお山はあずましい
山中に石碑を上げたしたたかさ

弘前市　須郷井蛙

お互いに棘を抜き合うコップ酒
茸汁　山の話で花が咲く
お客ゼロ林美美子を見て耐える
美容院出るとメシベの彩となる
定年後土の匂いが友となり

弘前市　相馬銀波

肩の荷が下りて一人の旅仕度
ナツメロが浅いねむりを誘う酒
気後れのする挨拶に咳ひとつ
冷えきった足を炬燵の奥津軽
春までは除雪予定の農閑期

弘前市　今愁女

天災に人災地球焦げ臭い
欧州のメイン　パリーは足止めだ
串刺しの焼き魚恋し年の暮れ
サラダ好き膾はきらい現代っ子
牛蒡炒め匂いただよう大晦日

弘前市　岡本花匠

除夜の鐘気を引きしめて雪も舞い
初日の出内助と拝む有り難さ
雑煮食べ未練たっぷり生き残る
生たまご夢へつなげる力添え
岩木山無垢の白妙神さびる

弘前市　高橋岳水

一人では心もとないから群れる
嘘言わぬ鏡に見詰められている
心地よい観光バスの揺れ加減
縄のれん男の背なは隙だらけ
負けたなと思う握手を求められ

底辺でしかと学んだ人の道
惜しまれてのれんをおろす夫婦店
今日よりももっといい日にしたい明日
電池きれ物忘れする老夫婦
母の日は娘とお墓参りする

十和田市　阿部　進

まだ生きる今年も生きる暦剥ぐ
地球が回ってる僕は呑んでいる
笹舟は波を受けても沈まない
たっぷりと入る銚子で倒れない
口惜しさを暖簾に吐いている日暮れ

平川市　小寺花峯

娘のくれる牽制球で呆け防止
誰に似たのか曽孫一号芸達者
初孫に娘はメロメロで見ちゃ居れぬ
パキスタン想えば重くなるお箸
ひと月病んで三キロスリム万万歳

武蔵野市　亀井円女

温泉にどっぷりつかる農閑期
募金には素知らぬふりの小金持ち
アルバムの剥した写真推理する
過去封じ前だけ見よと天の声
ぜいたくは肌着だけです絹にする

日高市　根岸方子

年の戸をあける一声ワンと聞く
拉致交渉帰った人も知恵貸して
厳罰で箍を締めてく自民党
幕張を野球のまちにしたロッテ
長生きも程々にせいと税脅す

佐倉市　岡井やすお

元旦の凧が飛躍を予感させ
じっくりとおしゃべりを聞くボランティア
会いたいの思いに趣味が一つ増え
母さんもたまにはごねてみたくなる
目が合うと花ドロボーが微笑んだ

八王子市　播本充子

優しさが伝わるようにかなで書く
太陽に干せば甘さが増してくる
いくつかの壁にぶつかり今日がある
露天風呂期待通りに雪が降る
苦労した人から届くいい便り

東京都　清原悦子

駆け足の刻追いつけぬまま師走
秋のベンチふたりは別れモードです
いたずらな風に枯葉がまたワルツ
日射しゆるゆるり散歩の影法師
これ以上翔ぶには魔女の箒いる

東京都　小川賀世子

横浜市　小野句多留

権力を嵩に懸けてる絶頂期
カルチャーの人畜無害の席にいる
通販に頼り足から老いていく
豪華船貧乏性の万歩計
安ければなんでも買うと群れの中

横浜市　菊地政勝

脳味噌が黴びて名前が出てこない
振り袖が泣く大胆な歩き方
シナリオの通りに行かぬ定年後
鑑定書ない指輪だが愛がある
ビール掛け地球の裏で喘ぐ飢え

静岡県　薗田獏沓

兄弟が仲良く遊ぶ秋の夕
婆ちゃんの居眠り誰も咎めない
居眠りのふりで噂をキャッチする
雑踏に自分の影を紛らわす
降り立てば過去蘇る無人駅

愛知県　早川盛夫

呑んで寝てこれが自由というものか
たかが酒たかが女で身を崩し
手がふたつ足が二本の有り難さ
元気よく登り必死に下りる山
来るから出す出すから来る年賀状

可児市　板山まみ子

異常なし医師の言葉で腹が減り
とりあえず庭の紅葉ですするお茶
再会の白髪とシワに流れた日
忙しく暮らす日々こそゆとり持ち
肩凝らぬほどにこだわり持ちつづけ

大津市　中宗明

ほどほどに譲歩しあって円満に
口下手で弁明できず罪かぶる
ほどほどが嫌いと見える几帳面
主義主張なくやってるダイエット
流行に乗って真似するダイエット

京都市　高島啓子

雪止まぬ日はゆっくりと煮るポトフ
網の目で濾されて茶柱が立たぬ
利き腕でしっかり締める瓶の蓋
インフルエンザ鶏は連帯責任に
本屋出てずっしり重い大根買う

京都市　都倉求芽

吠えそうな犬見当らぬ年賀状
地平線を見渡す贅沢な住まい
泣き声は短音階しか出ぬらしい
年ごとに大雑把になる四捨五入
正月も妻は透析ひとりの膳

亀岡市　井上森生

七十は豊か知識も経験も
手作りの賀状はキーを叩くだけ
ローソクの残り時間は気にしない
諦めか悟りか眉間で天の声
超スローウォーク全ツボを呼び覚ます

長岡京市　山田葉子

喜びが爆発してる息遣い
妻の夢子に注文が多すぎる
妻リード家の平和が保たれる
揺すられるたびに絆が固くなる
宇宙人孫がそうかも知れないぞ

八幡市　結城君子

誰も見ぬうちに桔梗はあくびした
ほっといてうつむいて咲く萩の花
菊はみな転職先を考える
ストレスを底にためてる秋の七草
コスモスも揺れるだけではもうあかん

大阪市　西出楓楽

初詣で氏神さんと檀那寺
月旅行ゼロが余りに多すぎる
期するものあり二つ目の電子辞書
ストレスが無いのもつまらないだろう
ビールから熱燗にして夜が深む

大阪市　前たもつ

草津の湯七年会のバスツアー
コリャ草津お湯の中にも花が咲く
夕焼けを遠く真下に白根山
名の如く霧に包まれ霧が峰
足湯する隣のギャルは眩しすぎ

大阪市　神夏磯典子

シクラメン暗い話は寄せつけぬ
蔭の役羽織の紐と靴の紐
追伸に固いこころがほぐれ出す
野菜室満たし充実しています
終点は十年延ばす事にする

大阪市　榎本舞夢

仲間からパワーもらって生きている
忍びよる歳には勝てぬ物忘れ
モンローになるわけでない美容院
思い出も安く買われたバザー品
秋風に風船の舞う御堂筋

大阪市　伊藤博仁

三食に間食もして母乳噴く
母乳でるだけで手軽なピクニック
球根が芽で合図する土作り
ドングリに童謡つけて頭撫で
貼り替えた障子が透かす陽が温い

大阪市　奥村五月

窓ぎわで悟りひらくが遅すぎる
切れた時使うナイフを持っている
懲罰はないが戸籍にバツ三つ
認知症避けるためにと五七五
エーイもう叱られついで終電車

大阪市　川原章久

くじ当る店を探して暮れの街
ネクタイで鬼が借金取りにくる
法守るやさしいことが難しい
夜店から茶の間の主になる金魚
患者にはナース誰にもお大事に

大阪市　川久保睦子

トラ優勝ひときわうれしいクリスマス
咳ひとつ弱者のふりをしてみよう
野心抱く日からぎくしゃくする笑顔
大根がおいしいだけで冬が好き
手鏡に入りきれない笑顔です

大阪市　板東倫子

今年こそ性善説を信じたい
孤立する大正生れの律義者
いい人はお金を貸してくれる人
飛び越せるつもりの石に足とられ
笑ってる場合じゃないよテロしきり

大阪市　小糸昭子

寒い夜のおでん懐かし父と酒
ざぶざぶと公金使い国滅ぶ
落ちてゆく夕日赤から黒くなる
渋柿がこんなに甘くなる自然
伸びて行く会社　社長が若くなる

大阪市　玉置英子

声出して新聞を読む昼独り
子を頼ること増え老いを思い知る
おいしくて腹八分目むつかしい
絹を生む桑が人にもいいらしい
安くても余分は買わぬ台所

大阪市　井丸昌紀

知恵の輪に根気のなさを笑われる
偉くなり急に無口になった友
テレビしか聞いたことない除夜の鐘
ふわふわの布団のせいで不眠症
友の面被って罠が口を開く

大阪市　岡本久峰

保険証真っさら神に感謝する
積年の同志を切って捨てる鬼
小泉の政治に温み感じない
角サンと握手した日の温かさ
動乱の日日振り返ってる秋日和

大阪市　大川桃花

地とはいえ場所わきまえてほしい声
ばあちゃん子お茶は渋目にしてと言う
女の目服の綻び見逃さず
原因は歳か病かこの目まい
自負してた少数派にも寄せる波

大阪市　津守柳伸

ボランティアしたい卒寿の上まむし
鼻毛抜く小春日和も忙中閑
鏡餅一年寝たよどうしよう
紅葉狩り追い打ちかけてくる師走
忘年会終りフイルム空だった

大阪市　津守なぎさ

移りゆく車窓大山悠然と
山陰路旅情に浸る柿すだれ
紅葉にまけじと映える針葉樹
散りもせず名残りのススキ見てあきず
健康にいつも感謝の句会場

大阪市　松尾柳右子

団らんの健康感謝美酒に酔う
鬼ごっこ思い出させるJリーグ
日替りのメニュー客足にらめっこ
コンビニにおふくろの味たんとあり
今日の服天気予報で変ります

大阪市　町田達子

祥月の仏に詣る京の寺
思い出をあれこれ追うて墓掃除
帰路の足賀茂の河原で一休み
鳩も烏も仲よく餌をついばんで
小魚が水辺に躍るのどけさよ

大阪市　津村志華子

青い空生きるヒントに溢れてる
傘寿にも楽しい夢を盛るファイト
好き勝手言うて許せる友がいる
鼻唄も疲れも浮かぶ終い風呂
隠しごと出来ない父のお人好し

大阪市　清水絹子

花鋏だけでは無理な生花展
ヘルペスの頑固に覇気も飲まれそう
明日あると思えば出来ぬ風呂掃除
歯科へ行く日の朝御飯二人前
四季通じ元気頼りの豆昆布

大阪市　小谷集一

訥弁の息子を嫁が援護する
薄味の料理に込める妻の愛
まだ妻に見せたことない背の傷
いい人と言われ続けた味気なさ
売ってきた喧嘩買わないのも勇気

大阪市　本間　満津子

もう一つ胃袋ほしい秋の舌
小春日和のつるべ落しの陽に慌て
鶏事変ひとごとでなし飛んでくる
五百人乗せ空飛ぶなんて気味悪い
淋しいな喧嘩相手が居ないのは

大阪市　渡部　さと美

カニツアーカニにも増してうまいめし
菊人形最後を惜しむ長い列
追いかけて念を入れとく早合点
花柄の腹巻買うてウォームビズ
今はもうない銀行のタオル出す

大阪市　安達　はじめ

菊香り心静かに渋茶たて
がやがやと喋り回って母達者
若づくり娘のお古着るわたし
新しい家風は嫁がきて作る
逆らわずただうなずいて従わず

大阪市　小泉　ひさ乃

幸せを掴む両手はみんな持ち
三世代がやがや揃うお正月
その言葉信じて噂などは無視
七転び八起き目は子の手を借りる
望みある部下に上司の熱い喝

大阪市　星野　きらり

栗剥いて昔話の秋夜長
コンサート余韻の冷めぬままのお茶
神様がくれた褒美の楽隠居
極楽であの人とするおままごと
お早うさんお休みなさいまた明日

大阪市　熊代　菜月

百均で少し贅沢した気分
かき鍋に夫婦の箸がゆずり合い
赤丸の予定で埋まる年のくれ
体調を気遣いながら夫婦旅
ウツ捨てて明日はジャンプしてみよう

大阪市　西川　更紗

見栄捨てて年金暮し板につき
鈍行でお土産代を浮かす旅
ほのぼのと可愛ゆく老いる知恵を練る
冗談と本音が交じるクラス会
土壇場でチャンスを掴む風を待つ

大阪市　榎本　日の出

手の平でにぎりつぶしていたセリフ
幸せにすると言わない民営化
参拝もわたくしならば許される
つまずいて見るまで足は気がつかぬ
贅沢な悩みですねとあしらわれ

恥知らず実りの秋をごっそりと
非情なる株操作組むヒルズ族
黄砂降るやはり中国近い国
携帯が何処まで変る鬼ごっこ
ききなれた鼾静かにふと案じ

大阪市　中村叡子

木枯しに恋を語って暖をとり
休肝日いっぱい食べて早寝する
出張が済み旅人に変わります
倦怠期貧しさゆえに通りすぎ
赤ペンで書くラッキーな日の日記

大阪市　鶴田遠野

好きだった太郎ちゃん今もいい男
恋心今カラオケで唄うだけ
一日一善やさしいことばつれあいに
芯になる人一ぬけた二ぬけた
浅からぬ縁や優しく介護しよ

大阪市　古今堂蕉子

戌年に猫漱石を再挑戦
こころざし埃をはたく年の暮れ
プロポーズした頃思う初春の酒
ああ春闘死語の谷間を彷徨いぬ
食文化何はともあれ米の飯

大阪市　川端一歩

百歳が二万余名のお正月
スタイルは良いが心が曲ってる
冬のバラ軽はずみには咲いてない
宇宙への駅がそろそろ要る気配
回転の鈍い頭をはずしたい

大阪市　岩崎公誠

靖国が近所付き合い悪くする
去年今年スローライフが性に合う
改革の呪文が効いた節目年
手始めに政党助成カットする
基地はみな日本に移す腹づもり

大阪市　近藤正

酌み交わすわけもあれこれ松の内
海老と蟹味わうだけの軽い旅
流行の色もまだまだ着こなせる
ほどほどの域で折れ合う思いやり
控え目な美徳を見せて咲く椿

池田市　栗田久子

犬のセイにして立寄るコップ酒
負け犬で帰る夕日を背に受ける
畑仕事ソロバンはじかぬ事にする
不揃いの孫に光っている個性
ダイヤなど合わぬ指だが幸せだ

和泉市　横山捷也

神仏にすがる余生もまた楽し
持て余す体躯飽食まだ続く
コップ酒これも人生高笑い
コンビニの便利さ主婦の足を向け
二人三脚よくぞここまで夫婦草

和泉市　西岡洛酔

披露宴まで犯すテロ先が見え
報酬カット辞めろコールへ打つ先手
メジャーリーグでお辞儀させ合うジャパン力
英世いるだけの寂しい日の財布
ローテクでとんと困らず生きてます

泉佐野市　山本蛙城

近頃の歌は手拍子すら合わず
枝豆をつまみジョッキは見てるだけ
振り返る女々しさ叱る影法師
知恵袋逆さに振っている急場
人にまだ話せぬ恋を書く日記

茨木市　藤井正雄

この子等に戦なきよう七五三
想像を越えるニュースに狼狽える
湯豆腐を毎晩食べて飽きもせず
蟹ちらり横目で今日はさんま買う
さりげない助言に気持軽くなり

大阪狭山市　矢野梓

笑う顔老いも若きも愛らしい
母子家庭恙ないかと定期便
吉報を絵文字並べて打ってくる
雑巾を縫うためだけのミシンかな
編隊のヘリコプターに胸騒ぎ

柏原市　永浜加津子

朝三時津軽の地底行く列車
時々は割り勘負けの酒も飲む
トラが散りスポーツ欄に冬が来る
お隣の葬式ピーポー三日前
妻の留守やっぱり俺は先に逝こ

交野市　森本弘風

特攻の戦艦大和名を残す
戦時中たき火の歌が消されてた
日本に栄冠の夢待つ五輪
父の背な凜と伸びてる寒稽古
耳栓でニュースストップ別世界

交野市　山川日出子

屠蘇の膳少し言葉を改める
姿見のぼくは丸ごとおじいさん
帽の鍔立てて私を聳やかす
窓際の猫が名画のように座す
おこられる楽な姿勢に座り替え

交野市　田岡九好

河内長野市　村上直樹

牛丼は食いたし狂うのも恐し
近ごろは妻に手加減されている
ええやんか妻の一喝山動く
浮き沈み息を合わせて彼岸まで
生き様のジャッジ閻魔にご一任

河内長野市　坂上淳司

干し柿の暖簾がカメラ待っている
秋の陽に酔っぱらってる吊し柿
好きな方向いて揺れてる吊し柿
煩悩を宥めつつ聞く除夜の鐘
めでたさも微妙なところ古希の春

河内長野市　山岡冨美子

九十九折り登ると見えた春の駅
歳月を味方につけた笑い皺
ひとときを少女に戻す師の便り
漱石の猫がうろつく古本屋
煩悩を捨てると軽いごみ袋

河内長野市　水谷正子

祝います竹の園生のご繁栄
一億は記憶にないと猿芝居
うろうろと歩いただけの初デート
大胆なカードを切ってつきを呼ぶ
口惜しいがロッテ日の丸株を上げ

河内長野市　井上喜酔

晩秋の名残りを惜しむ山が燃え
本当の話が怖い心電図
仲人も酒の力がいるらしい
隙を見て割り込むネット仕掛人
四連敗洗い清めるタイガース

河内長野市　植村喜代

秋や秋　頬撫でる風もみんな秋
秋晴れに秋より優し風はない
秋の月見事に丸く吸込まれ
支払ってからでは遅い品定め
デパートは楽しい夢もあるところ

岸和田市　長谷川呂万

誕生日転機に禁酒決めました
時差の旅終りにしよう旅装解く
リストラに自由と不安入り混じる
結果見て意見を述べる専門家
メーキャップの仕上げ電車に乗ってから

岸和田市　井伊東吉

六度目の戌年迎う年男
庭先に点る家庭のルミナリエ
次期政権向けて政界動く春
アボカドが意外とマッチする和食
しませんか川柳冊子大好評

岸和田市　岩佐　ダン吉

手と足の句碑前にして動けない
虫集くいま九条を読んでいる
迷子にはなるまい僕の旗を持つ
半分の痛み受けると友が言う
九条はピエロなんかじゃありません

岸和田市　土橋　房枝

昔のこと語る祖父母は生きいきと
独り居の目出度きことも一人分
デパートの明るさ財布開かせる
流行語次々生まれおいつけず
改革の仕上げが恐い新世紀

岸和田市　亀井　皎月

夏暑いしんどい困る太り過ぎ
停年後妻に移った主導権
八十路来て頻尿たたる会話の場
黄昏れた頭へややこし話する
俺よりも先に逝くなと無理を言う

岸和田市　雪本　珠子

ひとときの至福味わうカフェテラス
携帯にあなたの笑顔焼きつける
独り者街の灯りに誘われる
タイミングうまく掴めず恋逃がす
今日もまた泣いて笑って日が暮れる

岸和田市　原　さよ子

専門を生かして励むボランティア
転び癖笑われながら達者です
趣味多忙家事の手抜きがうまくなる
長生きで曽孫の初着夢も縫う
老い三人昔話の和やかさ

岸和田市　森元　ふみよ

流行るらし介護ロボット一つ欲し
年重ねそれでも初恋いとおしい
二羽三羽鴉が屋根で狙ってる
ダンス熱昂じて免許取るはめに
流行でも襤褸のジーンズ許せない

堺市　神原　文

戸を繰れば松きらきらと初景色
いつまでも年を取らない流れ星
顔の波隠しきれない若づくり
今年から素直に聞こう娘の意見
散り際へ足すひと色を努力する

堺市　近藤　豊子

だいこんもゆずも夫も秋刀魚まつ
街の灯を見おろしながらさんま焼く
熊野灘　木の間にみつつさんま鮓
嫁がせて秋刀魚の味のほろにがさ
四季咲きのバラへ秋の日が暮れる

黄身白身ふわふわ卵母の味
友情が少しもつれて時雨きく
四代を生きて白寿の薄化粧
棚ボタの赤絨緞の踏み心地
転た寝の夢覚めやらぬ雲の上

堺市　山本半銭

手を合わせ亡母思いつつ初日の出
退屈でコタツの妻の手を握る
雪女泣いていないか温暖化
再婚の色鮮やかな年賀状
黙ってても酒の出てくる三箇日

堺市　加島由一

飲み過ぎた顔が車窓に大写し
思いやる心で手厳しい批評
やぼ用があってと誘い断られ
道草をして人情の機微を知る
へまばかりしてて人気のある男

堺市　村上玄也

思い切り尻尾ふります戌のとし
転びつつ夢を拾って立ち上がる
喘いでた昔を忘れ有頂天
助けられ万倍したい恩返し
平和だな空かけて来るロゼ・ワイン

堺市　西村りつえ

孫がわりダックスフント連れ帰る
Jワンのピッチを走る夢を持ち
生きている証に人助けを一つ
見納めの菊人形へ車椅子
宝物展へ平和な日本人集う

堺市　源田八千代

せせらぎがハモっていますわらべ唄
自転車で怪我をしてからただ歩く
また同じ道で迷っているわたし
おだやかな声で辛辣なる言葉
阿呆役ならばわたしは地のまんま

堺市　宮本かりん

汁おかず御飯の順に食べてほし
なんぼとも聞かず男はカード出す
ガン保険のCMに攻め立てられている
父さんの喜ぶツボは存じてる
喜んだふりをするのは難しい

堺市　志田千代

何不足ない顔しとく三箇日
絹莢のみどり重箱粋にする
お節たらふく後浅漬けを出す配慮
おばちゃんパワー今年も磨きかけまっせ
浅はかに握手したのが発火点

堺市　矢倉五月

車椅子の母にやさしい昼の月
人間の驕り自然が屁でとばす
アメリカにも岸壁の母いるという
火に油注ぐつもりで知恵を貸す
無責任な話題ではずむ立ち話

堺市　柿花和夫

改心はひどく頭を打った今
うつの日は酒に呑まれてみたりする
哀愁がリンゴを齧る歯に残り
別れから殺風景な刻がたつ
好きなもの妻のえくぼもそのひとつ

堺市　和田つづや

失敗の数だけ歳は取っている
思いきり笑いカルチャーこころ晴れ
いつまでも若いつもりがすぐ忘れ
わたくしが裸になれる友が居り
もう孫が居てもいい歳だと笑い

堺市　齋藤さくら

手渡しの回覧板がよくしゃべる
三猿の知恵も時には無責任
唇を噛んであなたの横に居る
軽口の重さ胃の腑へのしかかる
パソコンが苦手ペンだこよく太る

堺市　石堂潤子

今年また孫が増えます嬉しいな
スイトピーもカサブランカも春を待ち
風邪引かぬようによく食べよく動く
心にはドアロックすることもある
迷惑な話聞いてる渡り鳥

堺市　河内月子

晴天に一際目立つ赤いばら
見向かれぬ小さい花がいとおしい
健康で今年も越せたありがとう
自転車が重くなったとけちをつけ
足跡を消してはいない里があり

堺市　國見蘭香

妻の愚痴またかといつも聞き流す
披露宴いつもと違う妻と行く
お行儀が悪いといつも叱られる
歳よりは若いといつも褒めておく
振り向けばいつも私に添うて妻

吹田市　穴吹尚士

初詣で鹿に手ぶらを見抜かれる
春日参道　床屋が家族づれでくる
世の中を時間で梱包するテレビ
紅白に年越す用がまだ二三
蟹解体　女を脱がす手つきなり

吹田市　早川棲世

吹田市　山本希久子

初旅は笑い袋を道連れに
お節料理こまかく刻む老母の膳
木枯しの声で干柿甘くなる
六Bで書くとわかりやすい意見
無欲という大きなのぞみ持っている

吹田市　太田昭

七難八苦なめて女難にまだ遭わず
軍隊ラッパ吹かれ御霊は眠られず
一獲千金狙う男が列につく
野次馬が居るから喧嘩止められず
嘘のない絆をそっと確かめる

吹田市　須磨活恵

昇る陽に両手を合わすウオーキング
つき合えば人にそれぞれ良さがあり
無駄骨を冷たく嗤う冬の月
同情は決してしない冬の月
泣き面へ冷たく冴える冬の月

吹田市　野下之男

お隣は言わせておけと九段坂
汗かかぬ金が世間を騒がせる
バス停へ走らない日が遂に来た
赤ワイン薬と言えば納得し
ペンギンに覗き見されて目を外らす

吹田市　大谷篤子

後ろから笑わせながらついてくる
深海魚生まれかわれど海の底
花時計命ゆっくり流れてる
モンタンの流れる店でひと休み
優しさに触れた一日満たされる

吹田市　岩屋美明

まだ何か言いたりないか喉仏
客扱い上手い老舗の白い足袋
暖房の話はしない永平寺
美しい文字でけじめをつけてくる
悪い癖女の歳を聞きたがる

吹田市　木下敏子

晩学の助っ人いつも電子辞書
転んでも何か掴んで立ち上がる
忘れん坊歳を取るのも忘れとく
澄みきった朝の酸素で脳洗う
犬描いて今年も無事と書く賀状

四條畷市　吉岡修

貧しくても髭はすくすく伸びてくる
投げ込んだ波紋見ている赤い舌
策練ってみても税金追ってくる
スピード計つけて徹子のおしゃべり度
百態の化けものを飼うのも心

大東市　南原正和

新茶の香巣立ちゆく子が瑞々し
若女将立てる女将の気風見る
待合室薬の数で座が解ける
果てるともたった一人の人となら
飽満の時代に育ち溺れる子

高石市　浅野房子

虫食いの大樹で当てになど出来ぬ
気紛れな愛に妻の座ゆれてきた
留守番に勿体ないな菊日和
包丁がよく切れるのも文化なり
先輩に無視後輩になめられる

高槻市　執行稲子

まずい事したなとペット眼を伏せる
宮大工願いを込めた隠し釘
出不精に喝入れに来る友の居て
おっとりと花友禅のよく似合い
車両ミスやたら多いな旅止める

高槻市　井上照子

握手する相手も腹をみてるだろ
反抗期全身耳にさりげなく
強がったあとは孤独がきっとくる
せんべいをボリボリいわす歯を入れる
琴の音が聞えて来そう丸い月

高槻市　西谷治三郎

便利さに人の心を忘れがち
独酌で飲み放題で妻が留守
街歩くビラもティッシュもくれぬ歳
老人会切ない恋の歌うたう
放課後も遊ぶ余裕のない子供

高槻市　左右田泰雄

うっとりと夢の続きをたぐりよせ
不作法を気づいていないわし掴み
ささやかな二人の幸を抱きしめる
おだてられ手の鳴る方へついてゆく
一つ屋根葬き合って三世代

高槻市　富田美義

還暦の日本に背骨あるのかな
日本酒がしみじみ粋な言葉生む
N響の響きが師走告げにくる
左遷地に家族呼び寄せ墓地も買う
魂のぶつかる人に逢い多忙

高槻市　乙倉武史

一年の早さを託つ年賀状
健康は宝　犬年恙なく
地球病む特効薬のない悩み
人事じゃないぞテロの世温暖化
増える死語情緒消えゆく日本語

高槻市　傍島克治

同情はするが助けてあげません
そろそろきたか昨日のおかず記憶なし
悪いことばかりじゃないよガンバリな
諦めの悪さ辛抱強く見え
許したが心の内は煮えかえる

高槻市　生田義一

散歩道微笑み交わす友も減り
古写真あの日あの時よみがえる
うかつな句妻の頭に角が生え
誰に似た孫の凝り性頼もしい
肩を組み校歌高らか同窓会

高槻市　瀧本きよし

不景気が潰したそごう甦る
子を虐待している主が犬を飼う
元気かい母から子らへ届く肉
古希過ぎて保つ若さの紅をひく
下駄の音聞きたくなって買いに行く

豊中市　吉田あずき

秋日和　今日あるいのち有難し
まっ先に秋を知ってる足の裏
月光へ女が白く浮き上る
決心を妻が茶化して反古にする
お互いに尻尾を出して笑い合う

豊中市　山門タミ

車椅子ジッと見つめる乳母車
ショボショボと寸尺で縫うチャンチャンコ
生き残り名簿ひろって年賀状
筆無精電話ではずむ一時間
まぼろしか空を渡って祭り笛

豊中市　江見見清

着地成功静かに拳握りしめ
わたくしはどこに居るのと地図ひろげ
フルムーンだけは一緒に出かけよう
立ったけどなんで立ったか考える
親族も友もふる里から消えた

豊中市　岸田知香子

皇居出て庶民の仲間清子様
永年の功績たたえ賞映える
出歩けぬ我が身いやされ窓の外
リハビリで言葉かわして友になり
同病をあわれむ友が増える老い

富田林市　中井アキ

輝いて欲しくて君の影になる
少子化に広場は欠伸しています
お多福の誰も知らない泣き黒子
若さとは違うセンスで愛してる
今夜こそ仮面外して逢いにゆく

富田林市　中崎深雪

正月が来るから隅も掃除する
黒豆の機嫌とりつつガラス拭き
とりあえず家族そろって晦日そば
美しくお節も詰めて終い風呂
被災地の正月いかに木枯らしよ

富田林市　稲川惠勇

おいぼれているが火種は消してない
揉み消しの酒だとことん飲んでやる
冗談が楷書の父に通じない
敷かれてる亭主も社ではうるさ型
プレゼントおまけの品と言いそびれ

富田林市　池森子

噂話も入れて帰った紙バッグ
亡父の峰はるかに越えた竹トンボ
芒野に秋の答えが置いてある
流しては明日の夢が語れない
自問自答がつづく秋の答案紙

富田林市　片岡智恵子

主流からそれて遠くを見るゆとり
裏の裏解けないままの人の綾
寅さんの鞄の中味見ずじまい
几帳面すぎて孤独が深くなる
満たされて心の飢餓の見え隠れ

富田林市　藤田泰子

お経より賛美歌　私仏教徒
気楽ですだあれも来ないお正月
疑いが晴れて笑いが止まらない
言い訳はしないすっかり忘れてた
正論を吐いただけです天の邪鬼

富田林市　大橋鐘造

盃に面影浮かし独り酒
割勘の酒が本音を喋らせる
耳二つあって善悪聞き分ける
熱のある内に纏めておく話
甘酸っぱい香りをさげて娘の帰省

寝屋川市　森茜

好き勝手言っても憎めない軽さ
二番手の知性に静かなる闘志
恥じることばかりが溜まる胸の底
酒好きのともだちだけに合うリズム
物置の蜘蛛なかなかの芸術家

寝屋川市　平松かすみ

おめでとう平均寿命突破する（夫）
お出かけは自由気侭に電車好き
明治生まれ居なく国旗が揚がらない
コマーシャル通りに効けばみな美人
羽衣があれば月まで無料です

寝屋川市　籠島恵子

お互いに観察人間とカラス
夏がクールビズなら冬は着込もうか
森があるきっとお寺か神社だろ
トンネルを抜けると月を見失い
間もなくの声に居眠りから覚める

寝屋川市　江口　度

牛肉を嫌がる祖母でまだ達者
住宅に拒まれているアスベスト
イエスノーはっきりと言い信じられ
うしろから靴音怪しいなと思う
選り分けてゴミを捨てている文化

寝屋川市　坂上高栄

台風の目つぶし科学いかんとも
沖縄は一寸ゆずって原子力空母
近づいた言っても火星　ん千万キロ
ほどほどの雨がうれしい植木鉢
改憲で歴史大きく動きだす

寝屋川市　太田とし子

犬が嗅ぐ栄えた頃の街の店
繋がれた犬はとぼけた顔をする
遠吠えの犬が教えた夜の道
犬のおしっこ電信柱ショートする
ワンワンと吠えて今年も頑張ろう

寝屋川市　冨山ルイ子

怒鳴られるこわさで声がかけられぬ
あしばやに顔こわばらせ横通る
来客の心になってする準備
おいもさんほっこり出来た落葉焚き
とにもかくにも優しさあふれみなファン

羽曳野市　酒井一壺

癖のない男にあった変な癖
守るより攻める心を忘れない
役立たぬ人間でしたすみません
得心の半分分けが決まらない
なんとなくふたりでいるとよく眠れ

羽曳野市　安芸田泰子

古里がはち切れそうな宅配便
裸木になって銀杏がほっとする
耳鳴りは捨てた故郷のまつり笛
戸を叩く風の音にも身構える
土壇場は咄嗟の嘘で切り抜ける

羽曳野市　徳山みつこ

オゲンキデスカと嫁日本茶を入れてくれ
パンプキン街は童話に包まれる
家々を訪ねお菓子をどっさりこ
子離れはまだか私は孫より子
ともかくも五年日記が折り返し

羽曳野市　三好専平

絶景もコンクリートが埋めつくし
浪速節聞いて豚マン買いに行き
口先の平和を足が邪魔をする
株だって踊るアホーに見るアホー
あっさりとした懐石にある野心

羽曳野市　吉川寿美

差し登る初日に箍を締め直す
福寿草画布いっぱいに初春の幸
一寸先読めぬが新春のスーツ購う
友の訃が胸に染み込む雨しとど（柳友登美子の死　2句）
句帳手に旅だつ友の白脚絆

阪南市　森村美花

秋空に歩きましょうと誘われる
わいわいもいいがひとりの時も好き
結局は貴女次第という鏡
根野菜キノコ海藻食べてます
本物の夫婦となっている介護

東大阪市　指宿千枝子

ゆるゆるゆる流れる日びに逆らわず
のんびりも油断もよしの日びにする
いただきますごちそうさまに五万回
冗談でも悪い例えは困ります
手を上げて横断してるおばあさん

東大阪市　西村哲夫

来客へお礼を申す掃除でき
唇を寄せてくれるはミーとポチ
末席の料理手つかず注ぐ役目
お作法はどうあれ菓子の旨いこと
腹立ちでピシャンと閉めた戸の悲鳴

東大阪市　北村賢子

孫の服干す手もぬくい三箇日
再会へとび出しそうになる鼓動
コスモスのたおやかに揺れ強い芯
まごころに触れてしみじみ湧く涙
胎動へしみじみ母になる自覚

東大阪市　笠井欣子

早々とホカロン貼ってウォームビズ
人様に見せない絵筆握ってる
溝とけて交わす言葉が響き合う
軽かった布団が重い歳となり
花時計常習の友また破る

東大阪市　安永春

大丈夫そんな強がり言うてます
無理はせず泳ぐメリット　デメリット
ばあちゃんもお好み焼で大ジョッキ
老いぬれば恋人となる二人連れ
天皇旗掲げて馬車は緩やかに

東大阪市　谷口　義

乙な人乙な返事をして帰る
秋が来るいつものように秋が来る
共白髪辛抱したという事だ
推敲を重ねて言わぬことにする
その中に胃腸の弱い鬼もいる

枚方市　丹後屋　肇

長話泣き出す外はないバギー
声変わりする子が距離を置いてくる
艶のある毛並ふぐりをはばからず
ネオン街くるんでしまう十三夜
ナツメロを聴いております虫の宿

枚方市　二宮山久

幸せは貴女まかせの妻の舟
幸せをかみしめ生きる六十路坂
年金の暮しもなれた妻の味
不器用に生きて世間をせまくする
低血糖それでも酒はやめられぬ

枚方市　荘司弘之

うまい酒飲める仲間とボランティア
日向ぼこペットの昼寝眺めてる
速射砲小言出てくる妻見事
童謡の意味を聞かれて口ごもる
定年後妻の小言でダイエット

枚方市　森本節子

行先は知らされず着く善峰寺
樹齢六百年遊龍の松の流れ
庭隅でつわ蕗ひっそり秋を告げ
嫁かぬ娘の着物虫干し秋日和
秋の幸きのこ素材のイタリアン

枚方市　宮川珠笑

クラクション制限速度を叱ってる
検査づけまだ病名が定まらず
同室の退院送りふて寝する
年金の額を水増すクラス会
再発は少しぐらいの酒のせい

枚方市　安達忠央

呱呱の声喜ぶ顔に包まれる
待っていた上司転勤日本晴れ
慰めて注いでもくれる妻は伏し
失敗が母の温さに救われる
抜かれても気にせず亀は亀の道

枚方市　海老池洋

２００６年よろし頼みま戎さん
男子より女子のゴルフを見るテレビ
被害地の視察新品作業服
詰め込んだ知識が知恵にならぬまま
悲しい時悲しく響く寺の鐘

尼崎市　長浜美籠

強がりを言える間はまだ若い
分相応　歳相応にきた暦
ただいまの声が明日への起爆剤
輝いてました熟女のフラダンス
マンネリの打開ウインドショッピング

尼崎市　林　昭三

出雲路の神話伝説神無月
宝くじ下一桁の電車賃
お世辞もこみで四五歳若く言う
言い訳は今年仕舞のゴルフとか
仏前に祖母と並んだもみじの手

尼崎市　軸丸勝巳

百年を閉じるひらかた菊人形
源平の歴史絵巻に菊薫る
着せ替えの菊師の技に足を止め
もったいない死語引き戻すマータイさん
紅葉坂　堪能させる七曲り

伊丹市　山崎君子

長寿村やっぱり温い風が吹く
見ざる聞かざるやっぱり言えぬ今日のこと
大往生眠るが如く九十六歳
逝くまでは呆けず楽しく老眼鏡
今日立冬寒さこらえる花時計

川西市　西内朋月

喜んで飲むばかりとも限らない
手の届くとこに何でもある茶の間
水あげて朝の位牌に叱られる
焼くまでは消えてくれない手術あと
たまにしか乗らぬ車の車検月

川西市　米原雪子

試されているとは知らず軽く請け
失敗談自慢ばなしのようになり
いい返事だったらしくて目が笑う
合格へ家族揃って絵馬を書き
目分量祖母は変らぬ味を出す

三田市　久保田千代

五歳児と出来ぬ約束してしまう
ただ咲いてただ散っていく花はいい
百円玉ぽんと投げ入れ手を合わす
その時の出逢いが人を変えていく
恥部隠す嘘から見えた花の芯

西宮市　門谷たず子

夫の忌　山がゆっくり紅葉する
秋にはあきの思い出がある万華鏡
思うまいおもうまいとて見る月よ
逝く秋やひとり芝居を演じきる
秋から冬へポインセチアの赤沈む

西宮市　山本義子

お正月もひとりの風呂で唄ってる
騙された顔して生きる戌の年
マンション暮し雪見酒ともなりませず
笑う種蒔いてたっぷり水をやる
寒さには強いわたしで恙なし

西宮市　秋元てる

お年寄りのきばる姿に活貰う
面食いの息子もやはり敷かれてる
亡母の手帳幼い私達の日々
バランスが取れたら夫婦紅葉坂
いい国だニートふわふわ飢え知らぬ

西宮市　緒方美津子

売り出しのチラシに走る主婦の顔
厨事　夫にとられ住みにくい
手土産に用事一ぱい詰めてくる
勝つほどにけわしい顔になる力士
天高くまたM寸の遠ざかる

西宮市　牧渕富喜子

まだ生きていたのかピョンときりぎりす
箸洗うこんな手つきも母に似る
気がかりを一まず置いてパズル解く
くもの巣は青空を背に今日立冬
毛玉取る猿の形になってくる

西宮市　井上松煙

ミニスカート闊歩している年の暮れ
仕合わせに今年も賀状書いている
喜びはぐっと一杯妻と飲む
ライバルの筋を褒めてる勝ちゲーム
喜びを聞いてもらって倍になり

西宮市　菊池トミヱ

古本はやっぱり捨てず本棚に
唐辛子どれもやっぱり辛いなあ
秋晴れの沈む夕日に郷思う
今日も晴れ良い日であれと朝を掃く
萩桔梗すすき白菊秋やさし

西宮市　亀岡哲子

月が好き陽が好き坂の上に住む
手狭でも一部屋に寄る笑い声
いじめっ子もなつかしポプラ古校舎
秋晴れの雲ひと刷毛に夢乗せる
今ならばまだリフォームのきく地球

西宮市　坪井孝一

豊かさも時に絆の邪魔をする
やあやあで名前が出ない同窓会
飽食で子供の体力低下する
紛れでも当る馬券が落とし穴
未知だから初恋淡く美しい

姫路市　古川奮水

Bカップ互いに揺れて専用車
知恵浅い河童の皿が冷えてくる
借金を食いつぶす虫高く買う
世話焼きの一言が過ぎ会汚す
スクラムで合唱忘年会閉める

兵庫県　大谷幸次郎

退院だ退院ですよ凱旋だ
上品なお顔ばかりで捗らぬ
幸せを他人と較べる愚かしさ
病床でつくり笑いに囲まれる
親馬鹿と他人を笑って居られまい

奈良市　米田恭昌

半分は僕のせいだよ老母の皺
リストラという捨て石に社は栄え
大卒の極楽とんぼというニート
交番の前で佇む認知症
大役に心丈夫な妻がいる

奈良市　天正千梢

長い道のり待ち針ははなさない
納豆の糸の粘りも切れました
窓口をひろげるための旅に出る
一宿一飯身にあまる贅をうけ
負けるならきれいに負けよ夕茜

生駒市　飛永ふりこ

戊年の夢を無心に手繰り寄せ
床の間に僕の年だとコロ座る
同窓と心置きなく海の幸
歳重ね短所いとしくなってくる
紅のバラが浄土へ攫われる

香芝市　大内朝子

心ひとつに故人を偲ぶ合祀祭（高野山にて）
なんとなく霊気を浴びる奥の院
線香の煙に巻かれて浄化する
俗世からしばし逃れて奥の院
み仏のおそばでほっとする心

橿原市　安土理恵

図太い影わたしの魂だねきっと
歳だからと逃げてばかりもいられない
牙抜けて狼はもう口説かない
奔放な魂だれか捕まえて
ヌカミソを混ぜておいてとパスポート

橿原市　居谷真理子

住み慣れて飲み友達を拾う町
埋み火に吐息がかかるほどの距離
傷なめる姿は月にさえ見せず
たっぷりと実る他人の畑だが
上品な人と肩凝る鍋を食べ

大和郡山市　坊農柳弘

ほんのりと匂う松飾りのお洒落
鶴飛来冬の寝床を確かめに
掛けそばとチャンポンめんの晦日そば
ともすれば独り善がりの初詣で
串柿の誉れ鏡餅にでんと

奈良県　渡辺富子

まっさらな暦へときめき期待する
おせちにも韓流料理混ぜる妻
しがらみを上手に越えるブーメラン
わけありのふたりの影が揺れ動く
愛憎を詰め込む壺が浅すぎる

和歌山市　福本英子

押印の欄があるから押しました
気がつけば私もやはり薬漬け
昨日から同じ話の繰り返し
明日という便利な言葉利用する
胴上げ三度日本一は外国人

和歌山市　榎原公子

饒舌に秋を語ろう柿すだれ
木枯らしに又三郎が下りて来る
誘われて急ぎ揃える鍋の種
一年がスタコラサッサ追って来る
十指から愛の泉が湧いて来る

和歌山市　松原寿子

胸底に真っすぐ辿る道がある
伝わってほしい心が煮えたぎる
爆発をさせた主張にある重み
割り箸で愚痴のひとつを裏返す
イベントへ母ノーギャラで飛び回る

和歌山市　古久保和子

車窓から知らない人に手を振って
公衆電話めっきり減って寒い街
下着には見えぬ下着で目の保養
靴下を脱ぐと緩んでくる五体
ハンドルを持つと人格変わります

和歌山市　田中みね

いい知らせ聞いてくださいお月様
胡麻すりもそこまで言うと喜劇だな
もうお気が済んだでしょうか自己弁護
激痛とはこれかアキレス腱ねじる（ケガをして　2句）
何でも言えよ夫やさしい丸二日

和歌山市　楠見章子

若い子が皆アイドルに見えてくる
生きよ生きよとパプリカの大きい黄
温ぬくのご飯さんまと大根と
疑いが晴れてぽっかり月が出る
ばあちゃんが会うたび若くなってきた

藤井寺市　楠　昭子

さりげなく合格発表待つ疲れ
釣り合いの取れた夫婦がもう別れ
黙秘権なぜか女の強気見る
温かい手紙だよ手で書いてある
肩書きがとれてそれから生き生きと

藤井寺市　鈴木いさお

毎日をきちんと生きるしんどさよ
四捨五入すれば何とかマルの夫
もう古稀かまだまだ古稀か自問する
通帳へ入れる楽しさ出す辛さ
愛しさが募ると憎くなってくる

藤井寺市　髙田美代子

一本と雖も松茸の値段
十二月肩の力は抜いておこ
冬の海やたらと波の音がする
世界中の天気予報をなにげなく
転んだら踏んで行く人避ける人

藤井寺市　若松雅枝

老い二人生きる幸せ語り合う
孫が来て今日のお鍋は豪華版
父さんの土産は何時も小鯛すし
下駄箱に亡母の草履がひっそりと
夫病んで気配り足りぬ身を悔やむ

藤井寺市　中島志洋

寒がりがテレビで拝む初詣で
未だ米寿枯れてたまるか若作り
お代わりの欲しい雑煮の味を誉め
お年玉　子から貰って孫に分け
金婚の夫婦で干支は犬と猿

箕面市　出口セツ子

頼られているからパワー湧いてくる
責任があるから口が重くなる
狂いもせず叫びもせずに生きている
リサイクルしたい夫が今日も居る
クリスマスソングに焦る余命表

守口市　井上桂作

漢字制限鴎外の本読めぬ人
考えを変えてみますと体躱す
言い切った後で不安が現実に
ボケ防止川柳詠めと教えられ
束縛もされて楽しい歳となり

八尾市　長谷川春蘭

裏山の思い出くれた栗のいが
思い出に何時も母あり栗の飯
先ず嗅いで見て松茸を買いにけり
菊育て日日足るを知る老い一人
秋深む孤独の自由つかれ気味

空いている氏神様へ初詣で
新しい年賀の客は嫁の友
正月にもうヘルパーさんが来てくれる
妻の留守金庫の鍵が見当らぬ
小さかった母は銀河の小さい星

八尾市　宮崎シマ子

もてなしの手料理　器浅すぎる
売れてます売れていますと眼にさわる
笑いジワ一本いつも和の中に
風向きを変える或る日の女客
必要なおひととなってから多忙

八尾市　宮西弥生

ちょっと来いには全身でぶち当る
眉に唾妻がやさしく呼んでいる
CMで一息ついたサスペンス
孫自慢話相手に孫子なし
さりげない会釈に女にじみ出る

八尾市　山本宏至

ビタミンの補給ウインドショッピング
健診のたびに増えてる黄信号
庭の菊平凡な日々満たされる
散り時を知って銀杏は風になる
教師力試されている参観日

八尾市　生嶋ますみ

亀さんの甲羅も並ぶ寺参り
釣り竿の先へトンボのちょんとのり
ほほ笑むと何だか肩の軽うなり
茶柱をひとりにっこり覗いてる
いい女しているらしい娘の噂

八尾市　吉村一風

ウォームビズ首に手拭い巻いておく
かくれてる病気ぽちぽち顔をだす
効くはずのない美人の湯こっそりと
大好きな秋がウエスト太くする
もう少し歩くと古稀の駅に着く

八尾市　村上ミツ子

トンネルが走り易いね霧の朝
喜寿傘寿髪の毛だけはよく伸びる
内心を映す鏡が曇り出す
孫に見る若さが遠い日の自分
事故ってから掃除回数減る車

大阪市　野田栄呼

お年玉孫がお勤め二つ減り
お茶席のマナー日本は美しい
カップ麺じっと三分耐えている
寅さんの失恋四十八連発
笠智衆佇ってただけで笠智衆

大阪府　籾山隆盛

大阪府　米澤俶子

ほどほどという物差しが厄介だ
主婦業を解かれる時は呆けている
恋という魔法でお肌ピッカピカ
丸暗記出来る自信はとうに無い
充電がまだきく余生ありがたい

大阪府　前田ゆい

初光　昭和三代つつがなし
子も孫も犬も揃って御来光
あの方もお達者らしい安堵する
ひょっとして私も行ける月旅行
しまったと後悔しきり医者嫌い

大阪府　林力子

ネクタイを結び戦士の出来上がり
ご免ねのかわりにそっとお酒注ぎ
包丁さばき　さすが身震いさせられる
だんじりを見る母さんも酢の匂い
太鼓止みだんじり小屋に丸い月

大阪府　澤田和重

通帳を抱くと安心して眠れ
のほほんと生きて余生を楽しもう
矢印がトイレ案内してくれる
正直な鏡で化けるのに苦労
またグチを言うてしまった自己嫌悪

大阪府　桑田ゆきの

耳貸して貸されて和む日向ぼこ
雨の日のパレード跡に散る落葉
法話聞きおかげの井戸に澄んだ顔
秋の山空缶拾うボランティア
ペアルック木ノ実見せ合う恋の路

神戸市　山口美穂

仏壇へ留守をたのんで旅に出る
要る要らぬ捨てがたい物またしまう
お歳ですねと老医師の眼が笑う
鏡に映ったわたし年輪と思いたい
暗証番号変えれば指が反抗し

神戸市　伊勢田毅

増税を次の総理が思案する
日本一あっけらかんと虎逃がす
小春日のラフでひょっこり蛇に会う
年末と年始は鍋の会続く
団塊の世代年金攻めてくる

神戸市　木村貴代子

探し物やっぱりあった元の場所
もう着れぬシャツもズボンもしまい込む
効かないと思っても飲むやせるお茶
パソコンが新しい悪作り出す
吊し柿この一年を日に曝す

句読点打ってリズムを調える
泥だらけで遊ぶ幼児の頼もしさ
青空がわたしの嘘を封じ込む
酒一合明日の元気を連れてくる
一番の友はやっぱり配偶者

神戸市　山口光久

肉筆で私の元気発信す
今日一日精一杯に生きる日々
正直に言えばどれほど楽だろう
弱音はき　また強くなるアスリート
日本の四季春秋抜けて夏冬に

神戸市　池田善守

おばさんのケイタイの指弾んでる
余生なお癖毛根性なおらない
少子化が心配される百年後
主導権がっちり握る山の神
日本語の乱れテレビをにらみつけ

相生市　中塚礎石

変らない朝　元旦として明ける
フェアプレー堂々とした負けっぷり
軋んでも大丈夫まだ走れます
あれこれと浅い眠りの夜が明ける
初恋は先生という男の子

芦屋市　黒田能子

野心棄て正月の風読んでみる
明日を信じているから歩き続けよう
健康な日々が極楽だと思う
やんちゃして笑う曽孫の眼が光る
ナースの声が爽やかでよい目覚め

尼崎市　春城武庫坊

似たもん夫婦秋の夜長をペン走る
花の命と向き合うている八十媼
湿布剤を頼りにしてるきのうきょう
不義理ばかりの古い日記につき当る
つらつらと大正は佳し菊の花

尼崎市　春城年代

スタートは何時も元気な日記帳
自画像がそっくり過ぎてやや不満
迂闊にはしゃべれぬ風が聞いている
押しピンへ知覚が残る足の裏
漠然と夢の続きを追う余生

尼崎市　田辺鹿太

虫の音と灯火親しむ広辞苑
熟女にも薄むらさきの恋ごころ
意地悪な男は影を置いてゆく
裏目に出たもろもろあってこの笑顔
仏の顔になって参道降りて来る

尼崎市　松下比ろ志

鳥取市　夏目一粋

にんげんも木も根を張ると逞しい
にんげんは嫌いでも一人だけ好き
金色に光る奥歯よありがとう
万能な人の部品を探してる
ひと日ずつ元気に過ごすだけでよい

鳥取市　鈴木一弘

母さんが梯子をかけてくれた屋根
美人とは言えぬが中身美しい
空論が机の上で踊りだす
負けて飲み勝っておぼれるネオン川
一泊の準備海外旅行なみ

鳥取市　下田茂登子

以心伝心その悪口は届いてる
目的があるから夫の留守狙う
老いるたび猜疑心だけ強くなり
夫婦愛戻る風ならもっと吹け
愚図られて大きくなった知恵袋

鳥取市　加藤茶人

倖せはついついつなぎたくなる手
みのさんが言った健康食を買う
妻の座でまだまだ欲しい金と愛
この歌ももうナツメロか　えっギャップ
国民の罪は改憲派に流れ

鳥取市　宮脇道子

笑うのは薬　恋は唇疼きます
凜として老いを生き抜く工夫する
老いの孤独リュックの重さ骨に染む
芋で育ち老いて干芋美味く食べ
宅配便不幸が続き派手にくる

鳥取市　上田俊路

平年作で肩の荷下りている田圃
蔓残しおけばまたなる薩摩芋
婆さんが入院　独り残される
爺独りコンビニ頼り生きていく
独り居て淋しい酒の味を知る

鳥取市　田村邦昭

愛を書く指にはきっと嘘がない
古里に歴史を語る家がある
免許証不安ばかりの親をのせ
雑音が過ぎて本音が聞きにくい
台風が来なけりゃ秋はもっと好き

鳥取市　有沢せつ子

新年へまず健康に感謝する
ばあちゃんのおかず栄養ばかり言う
散歩して頭の中を入れ替える
エアコンを冷から暖に早変り
運動も兼ねて歩道の落葉掃く

鳥取市　録沢風花

好天が続くと不安募りだす
仏間にはほっと安らぐ風がある
リフォームをしてキッチンの手が弾む
飽食のカラスに増える体脂肪
すれ違うだけでどきどきした昔

鳥取市　徳田ひろこ

ミニカーで足りる私の守備範囲
花活かす器の役を買ってでる
成人病ふやし続けているクルマ
梟の守ってくれている庵
手のひらに数えきれない波がある

鳥取市　福田登美

嬉しいとそっと親切したくなる
幸せの尺度自分の胸にある
深入りはしない　されないおつき合い
曖昧で通す女の処世術
貧しさも笑って耐える老いになる

鳥取市　永原昌鼓

向かい風少しはあって湧くファイト
さわやかな　あの青空に嘘はない
娘の胸と化粧気を揉む父の性
正体が見えず気を揉むすりガラス
シナリオにほとほと遠い僕の旅

鳥取市　西村黙光

天高し体重計が狂い出す
姿見に姿勢正せと諭される
風邪引いて酒のうがいは禁じられ
木の葉舞う秋の谷間の七変化
渓谷へ風化はしない木の裸

鳥取市　奥谷彩子

若いっていいな白い歯が眩しい
城守る自覚あふれる父の背な
義理終えて白足袋をぬぎ熱いお茶
落葉踏む冬の足音聴きながら
枯野行く一人芝居の幕降ろす

鳥取市　福島庸二

聞き耳を立てると余計聞こえない
マイカーに依存しすぎて弱る足
予報ずれプランどおりに皆安堵
マジックのとりもつ縁で輪を広げ
土壇場になってエンジンかかる癖

倉吉市　山中康子

戌年に犬をますますもち上げる
生きていくさあこれからが勝負どこ
すえ膳の感謝がみのる回復期
がむしゃらにここ十年を走ってた
駆けて来たレール八十路で折りかえす

倉吉市　猪川由美子

切り換えが下手でストレスよく溜まる
入閣を拒否する御仁たまに居る
理由つけ自分に褒美買うてやる
美徳だが謙遜のみじゃ乗り遅れ
女帝容認　雅子妃負担更に増え

倉吉市　松本よしえ

温暖化神の怒りかハリケーン
紅葉の山に人工雪降らす
主義主張となえて荒れる水の星
どうしたの人さし指が腫れてるね
モーターショー　アシスタントの脚線美

倉吉市　野口節子

さじ投げた時から運が向いて来た
カルシウム不足か妻のヒステリー
誠実に生きてストレス溜めている
レッテルを貼られ正座が崩せない
割勘で飲む喉越しの好いお酒

倉吉市　米田幸子

縦のもの横にもしないお邪魔虫
潮満ちてやがて彼女も脱皮する
らくらくと人の情けに胡坐かく
母さんは星になったと子に教え
子沢山　不安の種を抱え込む

倉吉市　最上和枝

神のわざ同じ指紋の無いドラマ
七人の敵と対峙の太い指
箸置きが器の横で自己主張
手塩皿おふくろの味染みている
ゆっくりと介護の道を車椅子

倉吉市　牧野芳光

鼻の穴じっくり見ると嫌になる
人情を小出ししながら生きている
自転車の両輪に似る共稼ぎ
後悔の音して手紙底に落ち
いつ死ぬかわからないから歯を磨く

倉吉市　山本玲子

リストラに渡る世間は崖っ縁
富有柿　霜に出合ってなお甘い
窯出しが終り器の明と暗
小さな夢叶えばあしたまた望む
1DK掃除に僅か二十分

米子市　政岡日枝子

あなたきらきら疚しいことを隠してる
先生のロングヘアーに憧れる
朝獲れの野菜が母の声で来る
午前から午後へと進むにぎり飯
愛車とは一身同体なんだから

米子市　林　瑞枝

稜線に神さま宿る孝霊山
ボランティア気さくに笑顔交わす仲
樹のてっぺん森の主役となる鳶
朝の陽にいのち頂く窓を開け
望郷の夜空に星を見るゆとり

米子市　白根ふみ

紅葉を目に焼きつける伯耆富士
花日和小さな愚痴はつぶされる
くるくると軽いいのちになる落葉
落葉さくさく浄土のみちは遠くない
知らない木生えて地球の片隅に

米子市　澤田千春

我儘を許さぬ海の貌がある
さまざまな笑いの種を蒔いておく
大笑いしてはストレスはねとばす
鍵穴の向こうで回る万華鏡
息ぬきをする穴一つあけておく

米子市　野坂なみ

第一印象まずは微笑が決め手かな
よちよちへもう先取りの三輪車
自由バンザイ食べ物までも化粧して
骨折を支えてくれる釘である
飽食と飢えの落差は縮まない

米子市　光井玲子

夫婦箸そろえておこう子の帰省
赤ちゃんの笑顔に勝るものはない
野原では私のこころさらけ出す
食べず嫌いはあるがまあまあ健康だ
さざ波は私の中でたっている

米子市　木村春枝

自動ドア急に開いて客となり
豊作が指の間をこぼれ落ち
プライバシー車に積んでデートする
臘に釘も一本打って置く
野党かな叩いた釘が左向く

米子市　中井ゆき

食べるぞとかまきり斧で威嚇する
ショパンだなノック忘れてきいている
かるいはし魚は背骨だけになる
食うだけがたのしみなんてまだいわぬ
食べるのが好きで元気で幸せで

米子市　門脇晶子

指先のシグナル朝の魚市場
江島大橋出来てシジミがおどり出す
茅葺きの家に団体つめかける
風ふくとおしゃべりやまぬ風車
錆びついた釘は抜けない意地をもつ

和歌山市　堀畑靖子

正社員並みの責任負わされる
問題はないといっても被ばく量
ガタピシと二人に戻り老いた家
私の可愛い天使から電話
ゴロゴロにガミガミあきもせず夫婦

和歌山市　喜田准一

謙遜へ相槍打ってから不穏
嬉しくて上げたテンション下がらない
都合良い方に解釈して気楽
場違いに口を挟んで軋み出す
肩の凝ることは嫌いなムツゴロウ

和歌山市　玉置当代

佳い話決まり心が晴れてくる
横断歩道押してあげましょ車椅子
養虫と同じわたしも世間見ず
せんない事これも言わずに済むならば
産むが易し話して解けた蟠り

和歌山市　武本碧

ユーモアを潤滑剤にして元気
真心という涼風に逢う至福
寒天でスリムな秋を謳歌する
横波を受けて勇気が思案する
ストレスが吃水線を越えたがる

和歌山市　細川稚代

富有柿と柿の葉ずしを道づれに
丹精の友の富有柿かみしめる
母さんに内緒よ孫とたこやき屋
乗りついで阪神パレードかけてゆく
孫が言うアニキがボクに手を振った

和歌山市　松尾和香

気まぐれの人生包む現在地
雀の子朝な夕なの自己主張
人生の修羅を流した里の川
五感みな癒す旅路の自然体
還らない時空を越えて生きてゆく

和歌山市　宮本三喜夫

激戦区しこり残してけりがつく
夢破れ政界あとに職探し
議員さん登院気分如何です
決意述べる小泉さんに期待する
デパートも北と南で競い合う

和歌山市　山口三千子

蝙蝠が出そう温泉玄武洞（勝浦ホテル浦島へ）
波頭眺めて浸る亡帰洞
ライトアップ夜の橋杭岩をみる
杖借りて青岸渡寺へ足のばす
那智の滝背にして娘等とハイチーズ

始発駅　本年もよろしく願います
友からの便りが届く菊日和
あり余る時間があって何も出来ず
飼主の顔に似てきたブルドッグ
番犬にロボット犬を飼うつもり

和歌山市　福井桂香

三箇日期間限定免罪符
そんな昔のことは忘れた昨日など
そんな先のことは約束できぬ明日
また一つ爆弾落ちましたカルテ
猫が待っているので私帰ります

海南市　三宅保州

筆圧に強い気性が覗いてる
柿持参したら鮮魚という恵み
女三人仲良くしてくのは魔法
カラオケで楽しい疲れ持ち返る
歌下手をパフォーマンスで乗り越える

海南市　堂上泰女

海ほおずき鳴らし故郷へ浸りきる
想い出に縋って歩く寡婦の道
出しゃばって孫を叱った悔いがある
背のびしながら生きてきた愚かさよ
愛想笑いと愛想笑いがすれ違い

鳥取市　近藤佳子

答弁の歯切れのよさにだまされる
代行のタクシー覗く神楽月（陰暦11月）
棒鱈の首にネクタイして詣で
手秤で蟹決めかねている婦人
馬鹿騒ぎ好きで南京玉簾

鳥取市　武田帆雀

丙戌きっといいことやって来る
玄関へ犬の絵一句飾られる
賀状でもポチが賀状に加えられ
番犬になれぬ犬だが捨てられぬ
尻尾振る犬にはなれぬ意地がある

鳥取市　春木圭一郎

再築の噂城址の山紅葉
葉を払い樹齢七十柿たわわ
受話器とる間違い電話かプッと切れ
保険屋の損することの無いはなし
人殺す年少記録加速する

鳥取市　林露杖

田舎道すれ違いには笑み交わす
きっぱりと汚れた金にゃ手を染めぬ
燕にも門限があり扉がピシャリ
バスツアー美人ガイドのうまい嘘
聞くほどにホルモン料理元気出ぬ

鳥取市　杉本孝男

鳥取市　美田旋風

新年に迎えたくない年の数
気の弱い男後から付いて来る
肩書きが消えても名刺出したがる
冗談もホラも混じえて輪が和む
若者を育てて欲しいおじいさん

鳥取市　西川和子

旅三日家のこたつが懐かしい
夢多く器に無理をさせている
ファックスを送ってすぐに用が足り
絵手紙に季節の香り滲み出る
衰えを言い訳にして輪を乱す

鳥取市　山本益子

御天道様生きるファイトを有り難う
秋の空酸素不足に風くれる
ガンらしい短い手紙再度読む
地産地消　宴の膳に自慢出る
里帰り親子の溝に平和くる

鳥取市　垰寛子

ややこしい系図をバネに生きぬいた
もの忘れ度計ってくれぬ検診日
杖も手すりもなくてドッコイショで登る
鏡よ鏡も少しマシに見せてくれ
孫どものけんか聞こえてないことに

鳥取市　田中憧子

家を継ぐ苦しい事も喜びも
ご自慢の吹き抜けだけどクモの巣が
平熱に体温計は無視される
玄関で帰るコールをおもい出す
センス無いファッションチェックしてる人

鳥取市　平尾菜美

ぽっくり病姑ホイホイと寺まいり
警報が響きプライド沈み勝ち
山動く気配私も腰うかす
木魚へと座り雨音遠ざける
貧乏が良かった昔噛み締める

鳥取市　吉田弘子

手を合わすたびに母さん生き返る
温暖化約束破る四季の花
痛む足犬が催促する散歩
熟年離婚ドラマの妻につい味方
目を手術眩しいほどの別世界

鳥取市　中村金祥

初春の東雲仰ぎ顔洗う
ひと言が心の隙を埋めてくれ
初孫の前じゃ頑固もあやがない
総スカン食ってダルマになっている
もめ事を上手く丸めて仕舞い風呂

鳥取市　岸本宏章

叱り方知らないママがよく怒る
努力家は楽々できたように言い
血圧に悪いものほど好きになる
あの苦いゴーヤの意地に負けそうだ
責任の重さに見合う顔になる

鳥取市　岸本孝子

焼いもが大好物の下戸の夫
百薬の長が毒だと損な人
ご褒美のようにもらった顔の皺
上品な言葉に舌がもつれだす
幸せの尺度時どき狂いだす

鳥取市　土橋睦子

部屋中にあかりをつけて書く年賀
招かれて米一俵を積んで行く
熱血の兄も君が代には弱い
たっぷりと飲んで陽気に笑う夫
カラオケで威勢をつけて二次会へ

鳥取市　土橋はるお

時化の夜はじっと我慢の酒を飲む
さっきから空を見上げて呼んでいる
借金もようやく済んで年越せる
独特の字体の手紙開けて読む
よう飲むと眩しがられりゃ飲みにくい

鳥取市　冨山檳榔樹

産湯から干支七回りまだ老いず
慈善鍋　浄財集め歳暮れる
ニューファッション胸と背中の艶やかさ
背のやいと黒豆撒いた画布模様
政治改革　暮らし善し悪し疑問あり

鳥取市　植田一京

元気よい孫にばあちゃん疲れちゃい
苦い水のんで大人になりました
餅五つ食べた昔が懐かしい
帯を巻くときめき女だけのもの
大砂丘こころ無色にして散歩

鳥取市　倉益一瑶

わたくしの鐘もならなくなりました
どんぐりの名簿に上も下もない
反省を促す灸の跡がある
大笑いしたら尻尾が出てしまい
若者よ命を武器にするなかれ

鳥取市　福西茶子

コロコロと幸せそうによく笑う
部屋五つ犬と住むには広すぎる
人になるために脱皮を繰り返す
乗客のいない私の縄電車
素直過ぎ大器の相はないらしい

鳥取県　石谷　美恵子

正直な帽子で何も出てこない
こんなとき嘘のつけない人で好き
テレパシーちっとも受けぬ野暮なひと
好きなひと胸におんなは色褪せぬ
人並みの幸せ欲しい薄い耳

鳥取県　谷口　次男

今年こそ笑え笑えと伯耆富士
深刻な会話を示す背の角度
柿の実がミネラル提げて牡蠣訪ね
知恵袋受けて授けて好々爺
新年や風車が風を送る町

鳥取県　鳥羽　直市

ふたり連れ何時の間にやら傘寿坂
人の和を考えいつも悩んでる
気がかりな事が頭で眠ってる
バーゲンの散らしを読んで昼となる
こっそりと買ってたくじが見当らぬ

鳥取県　鳥羽　玲子

老い深く益々お餅好きになり
手造りの器ひずみもあってよい
熱帯魚　家族の音の中に住む
先祖様ぴったりついて来てくれる
車椅子になると決めての家なおす

鳥取県　太田　幸枝

久しぶり笑いの花が咲く同期
普請する前に大工に釘を打つ
人力車観光客にようている
嫁が来て食器の棚も若がえる
琴三味線　音色十指が聞きほれる

鳥取県　深田　倶久

高々と拳突き上げまかしとき
平等法　女性議員の言うコイツ
七人家族　車六台過疎すすむ
子供がこども生む世に生かされる
戦せぬ誓いの国に殺人鬼

鳥取県　佐伯　やえ

柿のれん豊かにゆれて秋がゆく
息子定年うれしい注連をはりました
ぶじによりそい曾孫を抱いてお正月
仏さままた生きがいがふえました
踏まれてもここだけに咲く花がある

鳥取県　盛田　夢路

支え合い人間らしくなる命
口にせぬ傷が胸にも二つ三つ
花一輪いのち大事に咲いている
どうどう巡り政界ドラマ見苦しい
せかせかと時がわたしをおいて行く

鳥取県　竹信照彦

妻よりも早い死に方して見せる
ぎっくり腰その瞬間に腰が抜け
芋掘りの途中で畑放り投げ
手入れせぬいちご畑の恨み節
海山も池も畑も僕を待つ

鳥取県　山下節子

とんびに生れ鷹になろうともがいてる
父さんがリリーフ母の味出ない
おお恐い子供叱るも気をつかい
ひたひたの湯ぶねに今日を締めくくる
ひたひたとロボット人の職奪う

鳥取県　蔵本悦子

わがままも秋はやさしく受け入れる
皮下脂肪たっぷり着けて冬を待つ
芸術の秋お化粧を濃いくする
菊日和まだまだ秋を主張する
色気では先輩よりも勝っている

鳥取県　澤裕子

賑やかに活気を連れて孫がくる
ひたひたと少子高齢化が迫る
音もなく四季は彩り変えてゆく
謎すこし持って夫婦も仲が良い
ほどほどに呆けて世間の波に乗る

鳥取県　山本正光

心配な事が多くて呆けられぬ
価値観が似ていて心通じ合う
バスツアー後部座席は宴会場
旅先で歳を忘れて飲んでいる
旅行好き足腰達者今のうち

松江市　三島淞丘

一本の釘がわたしを許さない
正直に映す鏡で味気ない
屑籠の中で推敲まだつづく
満月に監視されてる妻の留守
裸樹の悲鳴ひゅるひゅる耳を射る

松江市　川本畔

犯人が堂堂と来る真正面
疑えば枝の分かれにある迷い
パソコンでずばり犯人検索す
蹴飛ばした男の愚痴か吊ぶらり
舞い終えた蝶は静かに横たわる

松江市　安食友子

グラス手に忘れられないあのフロア
ひょいひょいもこわごわもある獣道
実益が伴ってないバッシング
音痴でも見上げてごらん歌ってる
アル中におかされかけた或るショック

松江市　小川注湖

炊飯器単身赴任僕の武器
湖岸電車　昔の歴史知っている
よいではないか外人力士強いから
反省が出来て人生豊かなり
いろいろな人生乗せた終電車

松江市　佐野木みえ

新宿は人人ひとの泳ぐとこ
空港に降りて出口が見つからぬ
干し柿が目に鮮やかに茜色
ここだけの話は橋を渡り行く
歯の治療あの音だけはごめんだね

松江市　松本知恵子

白鳥の飛来に合わす冬支度
秋晴れに主婦の仕事がたんとある
ドライフラワー種宿すまま千日紅
がむしゃらな女の指が太くなり
三世代　手抜き料理もお手のもの

松江市　津川紫晃

まだ夢があるぞとでかい辞書を繰る
散る花のひとひら毎にあるドラマ
灯を消して今日一日を巻き戻す
プライドが百円バスへ頭下げ
細腕で支える妻の力こぶ

出雲市　岸桂子

善人でいたくて嘘を一つまぜ
消ゴムで消せぬコピーに誤字がある
あれこれと弾んで朝のしじみ汁
飾らない言葉の裏にある温み
風化したむかし話にある火種

出雲市　森茂美

ほんとうの秋が来たらし今日の雨
亀虫よ許せお前は敵なのだ
九条が古証文になりそうだ
戦争の足音じわり寄る気配
ど忘れを自慢しあって進む老い

出雲市　石倉芙佐子

ジョーカーの使い所に迷っている
今からが本番雪国の寒さ
モンペに長靴ああ十八歳のお正月
紫の花がきれいな四人の病室
夜見ると結構こわいお人形

出雲市　富田蘭水

久遠の愛宝くじより難しい
めがね替え心も一新思うたに
時流れくるくる変わる友達が
生かす事知らぬお金を貯めつづけ
信という一字が私たすけてる

出雲市　園山　多賀子

共犯になるかもしれぬ乱れ髪
老いて子に従う台詞で黄昏れる
シルエットだけが私に味方する
てふてふにこだわり続け卒寿とや
望月が煌々として雁渡る

出雲市　小玉　満江

にっこりと明日天気になあれ
斐伊川を跨いで野焼き山に消え
秋日和薄茶頂く奥座敷
鉄板でたこ焼き踊る文化祭
割り箸を洗って第二のリサイクル

出雲市　吉岡　きみえ

百薬の長で長生きするつもり
肴など何でもいいと冷やでぐい
人肌の燗ですちびりやる至福
杖ついてころばぬ用心しています
雑草を一日いじめたよい疲れ

出雲市　小豆澤　歌子

枯葉舞う命の限り舞い終えて
着飾った山もやがては眠くなる
素裸湯舟で溶かす蟠り
雑音の中で掬ったいい話
誕生日ふっと我が手を撫でてみる

出雲市　多々納　テル子

少子化に箸増えるらしお隣さん
紅葉のままで散りたいこの命
迷惑をかけてこの世を生きている
玄関を蔓梅擬き秋にする
忙しい一日だった祭り笛

出雲市　久谷　まこと

振り向けば影もやっぱり腰曲げて
干渉をされぬと仕事身が入らぬ
利口者言いたい事も呑みこんで
明日からの再出発だそばの味
気楽さで一人暮らしの屠蘇祝う

出雲市　多久和　敬子

つまずいた私を笑う昼の月
一冊の絵本　本気で読んでいる
愚痴捨てて私の袋軽くなる
孫の声聞いて二人の風和む
だんだんと小さくなった知恵袋

出雲市　伊藤　玲子

計画の甘さに泣いた秋の空
からからと笑う私の蹴った石
バスタブの自分の唄に酔ってます
雑音の真ん中辺にある本音
公平で残酷じゃんけんのけじめ

出雲市　持田多輝子

麻酔から覚めて死線を越えた朝
プライドも見栄も生きてる絆です
思い出は心のひだにたたみこむ
手さぐりの自己責任で生きてゆく
横車押して墓穴を掘る破目に

出雲市　小白金房子

初もうで榊に宿る神の声
いい新春だ並んで貰うおとし玉
犬の日を祝う腹帯新春を買う
山門の仁王むかえる初明かり
蕗のとう十二単で新春を待つ

出雲市　佐藤治代

朝の経あげてみんなの幸願う
また芋かそうよそうかと日が暮れる
肉じゃがの中に喜ぶ顔が浮く
楽しかった日思い出しては笑ってる
二十年先の事まで考えぬ

雲南市　毛利幸

低気圧　女房の顔に雲が湧く
海と山抱かれるところ水平線
祝い酒盃踊って朱に染まる
ぶらぶらと歩いて分る風の味
くよくよとしても明日が掴めない

島根県　伊藤寿美

ベートーベン　マラソン朝になる第九
よい歳をして小走る癖が直らない
二の舞は踏まぬつもりで居るわたし
フルムーンらしい夫婦を見る独り
原点にヒロシマがある郁夫の絵

謹賀新年

サークル檸檬

浅井太大奥片久田鶴長西西西早前山山山吉
野丸田塚田岡田中田浜口出村川　本口本田
房昌扶節みつ恵智千正遠美いわ楓哲棲たも希光義あず
子紀美代子子子子代坊野籠ゑ楽夫世つ子久子き
保

川柳塔のぞみ 2月句会

日時　**2月28日**（火）13時から
場所　人形町区民館（地下鉄人形町A1出口）
宿題　「海老」「甘い」「ローカル」以上2句
「自由吟」1句
欠席投句　2月25日必着　播本充子宛
〒193—0832 八王子市散田町2—31—3

川柳塔の川柳讃歌 ⑬

木津川　計

まっすぐな道を選んで飽きがくる

和田　つづや

まっすぐな道は確かに単調で飽きがきます。第一距離感が長いので、僕も自宅から駅までのコースは自転車で右に折れ、左に曲ってを繰り返して進みます。

人生行路も紆余曲折ではないか、つづやさんは美空ひばりの「川の流れのように」を聴いて一層そう思われたに違いありません。

〈振り返ればはるか遠く故郷が見える／でこぼこ道や曲りくねった道／地図さえないそれもまた人生……。

その通りです。人生にはカーナビもなければ羅針盤もないのです。失敗を重ね、軌道修正を図りながら、ともかく辿りついた旅路の果てであります。なのにわたしはまっすぐな道ばかり歩いている。つまらない、というつづやさんの贅沢な不満です。

この句を僕がなぜ採ったかを申せば、飽きのこない苦難の道こそ望むところだったのにというつづやさんの悔いと、「まっすぐな道」を選んで歩く、飽きもしない人への感嘆がないまぜになった、平易にみえて二重の意味を持つ複雑な句に仕上がったからなのです。

「まっすぐな道」は平坦で単調です。が、平坦でなく単調でない、忍耐多き茨の「まっすぐな道」もあるのです。でなければ、この道一筋の達人は生まれようもありません。「単調な道を選んで飽きがくる」は駄句ですが、「まっすぐな道」としたばかりに、つづやさんの多分意図せざる問題含みの句になりました。選ぶことばの大切さを教えてくれました。

感動を忘れ茶漬を食べている

植田　一京

年をとると感受性に乏しくなります。若い人の文化が理解できず、かつて馴れ親しんだ懐かしの映画や文学にばかり赴きます。「叔父さんは紅葉露伴以後読まず」（当百）で、僕も「蹴りたい背中」や「蛇にピアス」など読む気が全く起りません。

感動を忘れる年になると食欲も淡泊になり、中華料理の脂っこさを受けつけません。すでに古稀の僕がそうで、ざるそばに一品料理にお茶漬けが日常になりましたから、栄養失調でもう倒れそうであります。

小津安二郎の「お茶漬けの味」は、海外へ単身赴任する夫と共に夜中にお茶漬けを食べる妻でしたが、初めて親密感を抱くのです。老夫婦の日常もそんなものでしょうが、薫風さんは違いました。「老いらくに禊の恋もありぬべし」。うーん。一京さん、茶漬けはやめて、ステーキ、ステーキ。

深呼吸二度し柳誌の封を切る

有沢　せつ子

思わず身が引き締まったのです。投句した檸檬抄、一路集に選ばれているかどうか。なによりも同人吟のどこに位置づけられているのか。せつ子さんの祈る思いが伝わってき、感銘を受けたのです。いくつかの選考にかかわる僕でもあります。心せねばの思いを新たにさせられたのです。せつ子さん、その深呼吸をいつもいたしてください。

そこで敢えて申し上げます。「深呼吸二度し柳誌の封を切る」のは僕でもあります。今号は三回読み返しました。およそ二十日間、折あらば隙あらば鞄から取り出し読み直しても三句にしか惹かれなかったのです。

来年も次の気分で担当させていただきます。

川柳塔佳吟の山であれかしと　計

（立命館大学教授・『上方芸能』誌代表）

自選集

童謡を唄うととれる肩の凝り
足湯10分で心もほっかほか
バス降りる石のかけらに気をつけて
その日まで飲めますようにお賽銭
防空壕堀って三億円隠す

河内天笑

少年の森でとんぼは脱皮する
りんご挽ぐいつも感謝の姿して
菊の香がふわり漂う里の文
竜胆の藍に引かれてははを恋う
ふるさとを綴ってばかりいる余生

斉藤姦

七回りまためぐりきた戌の年
愛犬が小首かしげている賀状
老兵は消えず九条守り抜く
恥ずかしい人間だけど僕は僕
普通ってなんて幸せなんやろう

田中正坊

連敗のニュースに妻の乱気流
吃水線越えて気になる多数決
ポケットの夢がしぼんできた挽歌
五七五追えばするりとかわされる
我武者羅に流した汗が美しい

玉置重人

戌歳が明けて新たな力湧く
家訓など昔話の2DK
不器用な指が一本謀反する
お皿にも料理自慢の顔がある
少子化の波で回らぬ風車

恒松町紅

ばあちゃんの味のおせちで春が来る
納得の道ぽつぽつと行く歩幅
例えばの話で終る宝くじ
おはようのニュース地球の裏を見る
老眼鏡　仏の道が見えはじめ

遠山可住

花が散る学んだことは忘れるな
負けてから六十年も生きのびる
恩返しできない春の寺まいり
年輪をひとつ重ねる難しさ
高齢化　少子化　四海波静か

土橋螢

前文へ三百余万の屍越え
なお育て英知としての第一条
九条の真意を民は忘れない
改憲へ二五条はゆるがない
国民の義務も憲法説いている

仁部四郎

樹氷キラキラ冬の焦点定まらぬ
腐葉土も落葉の輪廻なのだろう
女人高野　風の重さを抱きしめる
目貼りして吹雪の音に耐えている
進化論森の梢が信じない

波多野　五楽庵

ウイグルの歌と踊りに酔っている（トルファン）
いろいろの型で残る砂の城
果物と野菜がならぶ青空市
地がゆれる初体験の砂あらし
カーレズの水が生命のぶどう畑

芳地狸村

ふる里にぬくい訛りが生きている
好きな酒出て来て仮面はずしてる
SLが動く人気の機関車館
私も機関士してたSLよ
もう一度走って見たいSLよ

宮口笛生

枯野にて春の気配を感じとる
影追って春をくすぐる風に逢う
絵草紙をひたすら手繰り思考ゼロ
沈黙を信条として性は善
安堵感　今日の私が転げ落ち

森下愛論

思いっきり波打際で鳴らす笛
人間は私ひとりの場所で吹く
精いっぱい吹く長調も短調も
渚で吹けばいつかは届く父の沖
息継いでフィナーレまでは通したい

八木千代

大輪の花の驕りは許せそう
セザンヌの美女ははにかみ見せてない
自立する女未練を捨ててくる
床ずれもさせぬ介護に母こまめ
匠の汗にそびえる塔の夢がある

八十田洞庵

病室のバラよ私は癌ですか
矢を磨く内に人生終りそう
要介護　僕も天使も羽根が折れ
罪ひとつ雪よ隠してくれますか
うっぷんが五体で溶けるまで笑う

両川洋々

雑学に明るい癖に世に疎く
形だけにこだわる自分のうすい影
自己過信の隙間冷たい風が抜け
煽てられ本心揺らいでいた不覚
経験の甘さしみじみ掌を見つめ

阿萬萬的

シュレッダーの中まで魔の手覗き込む
警察の先手をまわるサギの知恵
我が家には我が家の味のチシャなます
足湯して紅葉見て来たピクニック
立ちション禁止塀に鳥居が画いてある

石川侃流洞

初春の棚田見下ろす白い雲（奥飛鳥）
店先に蛸が迎えに来てくれる（魚の棚）
特攻隊ホタルに化身して帰り（知覧特攻記念館）
噴火する峰に隆盛胸を張り（桜島）
薩摩の士出合いがしらに出合えそう（知覧屋敷）

板尾岳人

初仕事　川柳さんへ恩返し
空はまっ青　胸の底から湧く勇気
しばらくは流されてみる　それも良し
少しだけ枠をはみ出すのも楽し
鵙の贄やさしさだけで生きられぬ

奥田みつ子

他人事と水に流せと無理を言う
見る人で夢が広がる抽象画
しなやかな柳に思う処世術
ポケットの穴に気付かぬのが不覚
さりげない言葉に本音潜ませる

河井庸佑

戯れの風の誘いに乗ってみる
疑問符の続き探しに途中下車
罠のある道ばかり選るへそ曲がり
新しい絵の具揃えて春を待つ
浮草の人生だけど悔いはない

川島諷云児

とこしえに流れも清い五十鈴川
七彩の風を待ってるお正月
高らかに凱歌を挙げて漁船帰る
岩風呂に菩薩の首が浮いている
何時までも仲良し辻の六地蔵

木村あきら

ゆっくりと病室の窓明ける冬
見舞客の笑顔にほっとする
同室の患者の寝息が荒々し
差し入れのお菓子が溜まる苦しい日
熱の差引き隣の患者寝苦しい

黒川紫香

血脈の通うふるさと蒼い天
悔い悪愧獅子身中の虫を飼う
団結を乱す輩の心病む
白魚の指とスパークしてみたい
旅へ出て塔を見上げる迷い鳩

小西雄々

他愛ないミスを二人で笑い合う
命とははかないものよ訃報聞く
急逝の友わたしより若いはず
ご飯だよ猫ものそのそ顔を出す
さあ来たな八十路の坂ののぼり口

小林由多香

原稿募集

――薫風名誉主幹を偲ぶ――

平成十八年四月二十四日、一周忌を迎える薫風名誉主幹をあらためて四月号で偲びたいと思います。先生の思い出、エピソードなど同人のご応募をお待ちしています。

締め切り　2月10日　本社事務所宛

本文400字詰原稿用紙1枚半～2枚（600字～800字）タイトルは別につけて下さい。

ただし原稿の採否、添削は編集部に一任して下さい。

編集部

第30回 全日本川柳2006年岩手大会

日時　6月11日（日）午前10時開場

会場　花巻温泉ホテル千秋閣　TEL0198―37―2150

宿題　第一部（事前投句）

一般部門　4月15日締切

「星　座」西潟賢一郎 選　「コイン」黒沢かかし 選
「地　酒」本田　智彦 選　「高　原」松岡恵美子 選

ジュニア部門（小・中学生）2月28日締切

「手作り」宮村　典子 選　「童　話」宇部　功 選
「自由吟」岡崎　守 選

2×16㎝の句箋1枚に一句宛記入・各題2句・無記名、封筒の裏面に住所・氏名明記、投句料千円（定額小為替・現金書留）を同封。ジュニア部門は投句料無料

投句先　〒530―0041 大阪市北区天神橋二丁目北1―11―905
㈳全日本川柳協会 宛
TEL06―6352―2210

宿題　第二部（当日投句、11時10分締切）

「もてなす」ふじむらみどり選
「鬼」森中恵美子 選　「匠」大野　風柳 選
各題2句、句箋当日配布

第二次選者　礒野いさむ・植木　利衛・塩見　草映
福岡　竜雄・米島　暁子

会費　四千円（昼食、記念品含む）

表彰　文部科学大臣奨励賞ほか
㈳全日本川柳協会大会委員長　礒野いさむ
全日本川柳岩手大会実行委員長　佐藤　岳俊

◎前夜祭・宿泊・観光は次号に案内　4月15日締切

板尾岳人選

聞かなくていい事までも拾う耳
沈む日に今日の手抜きを見透かされ
どの道もやっぱりきつい坂があり
逆転を狙うバットがまだ振れず
晩学の脳へ潤滑油のビール
今更と思いながらも日焼け止め

愛知県　八木　百合子

バカ言って笑っていたい松の内
地獄絵と間違えそうな地球です
焦っても日に一度しか朝は来ぬ
失敗も味わいながら夢を見る
春風に笑いころげるわたぼこり
歩かねば命の水が枯れてくる

倉吉市　前田　三津子

騙されておこう優しい嘘だから
やさしい名だから好きですおじぎ草
美しい人うつくしい嘘をつく

大阪市　升成　好

切れぎれに妻の小言に耳を貸す
人も犬も群れると序列つけたがり
母さんを味方に父の許し乞う

和歌山市　柏原　夕胡

それぞれの卵が秘めている野心
ひと恋し都会の夜に紛れ込む
しとやかな顔で夜中に牙を研ぐ
シュレッダーにわたしをかけてみたくなる
潮満ちて引いてあなたが遠くなる
荒れ狂う海へ嫉妬を投げ入れる

神戸市　両川　無限

満腹になると脱ぎたくなる仮面
均等法男を主役から降ろす
女は弱い　その錯覚を悔いている
同じ酒なのにまずい日おいしい日
日本語をどんどん変えていくメール
真っ直ぐに伸びる芽摘んでいませんか

世渡りが上手になってから独り
浮雲に乗って余生をたしかめる
ビールよりうまい登山の瀧の水
七坂を越えた人生木の葉舞う
郷里の思い出懐かし里神楽

岡山県　矢谷冨士野

行きずりの指きり嘘と知る小指
親切が仇となってる勇み足
満開の笑顔がとどく七五三
秋ナスが嫁から届く老いの膳
味方にもアキレス腱はかくしとく

宇部市　高山清子

年金で楽な隠居を夢で見る
趣味の輪で雑学習う人間味
亡き母の甘酒恋しい秋の風
常備薬に理屈並べて呑みつづけ
年金の使う使わぬ趣味次第

府中市　岩本雅代

句読点打って古希まで登り詰め
百均でひとりの部屋の飾りつけ
手をつなぐことの知らない夫でいる
全身へ初春の吐息が満ちて来る
生きて来た重みを計りにかけてみる

広島県　馬場利子

休耕田泡立草に乗っ取られ
鳩笛がほろほろ亡母を恋しがる
いらだちも心落ち着く深呼吸
年月が溶かしてくれたわだかまり
もう少し女でいたく眉を引く

今治市　野村清美

向かい風受ける覚悟の意地を抱く
瓢瓢と風と歩いて来た挽歌
ワイングラス相手が欲しい氷雨降る
目に見えぬ糸を信じて生きている
ほほえめばうれしい言葉かえる朝

今治市　塩路よしみ

七福の神に願いの初詣り
どっしりと根を張ってきた夫婦松
仲良しになれるか祖母へ竹の杖
点滴にかけて明日を待ちわびる
拾円をひろい神様までとどけ

東かがわ市　向山治延

長い人生だったなあとはまだ言わぬ
長生きに恋も必要だと言うが
老春の真っ只中と言うておこ
惚け話ノンフィクションになる怖さ
券売機にせせら笑いをされる老い

高知県　桑名孝雄

待つばかり妻が抱いてる不発弾
巡りあい花は届かぬ位置で咲く
かさこそと落葉が秋の話する
丁寧な言葉に少し距離をおく
一言を呑んで同居を丸くする

高知県　百田　幸

火の鳥になろう平凡すぎる日々
単純な脳が失敗繰り返す
歯車の軋みはずばり言いすぎる
ライバルの資格は持たぬミニトマト
残念を口には出さぬ意地がある

大洲市　花岡順子

百薬の長の薬害二日酔い
騙されてやろう苦境へ思い遣り
とれ立ての噂の好きなイヤリング
どんぐりの仲間です順不同です
のんびりと行こう人生アミダくじ

札幌市　三浦強一

親切のつもりとつもり噛み合わぬ
ほほえみへ氷が解けたことを知る
かくれんぼしたままでいる時がある
落すものまだありそうなダイエット
棚の上に置いた自分を忘れちゃう

茨城県　葛西　清

大鳥居くぐると新春の風になる
のりだした画像に父の砂被り
非凡さの男に熱い血が流れ
ねむらない街だいくさのない平和
ことしこそ今年に賭ける駄馬の夢

日立市　加藤権悟

選択肢抱えたままで除夜の鐘
晩学は教える方も小出しする
見習いの主夫撥ね返す味の壁
風邪引かぬ自慢どこかへ置き忘れ
見たいのか見たくないのか訃報欄

昭島市　野口　忠

翔びたくて年々派手を着る女
胃袋の底が抜けたか天高し
着るものが人の器を変えて見せ
朝一番お抹茶立てて活を入れ
主婦として早い日暮れに急かされる

東京都　長谷川康子

晩学が眠る残り火燃えさせる
柿熟れて俳聖の詩鐘運ぶ
物忘れ再読の書新鮮さ
残暑また紅葉の時期誤まらせ
野沢菜に故郷の紅葉甦る

横浜市　布山嘉信

横浜市　巌田　かず枝

裾野まで富士が見えたよ嬉しい日
甘い物買ったつもりの募金箱
ストレスは私の事を好きらしい
癌検に臨みお腹の大掃除
フランスの国旗が赤く染まってる

横浜市　長島　亜希子

寝てる時だけが静かな女旅
温泉の体重計は好意的
秋刀魚豊漁　ボケ対策はこれでいく
焼いて煮て今日は秋刀魚をどうしょう
どこよりも草が伸びてたうちの墓

佐渡市　高野　不二

金がないから詐欺にはかからない
セールスはテレビ仕込みで追い返し
貰いもの使い切れないボールペン
想像のうちが楽しい宝くじ
ネクタイをしたい日なのにクールビズ

高岡市　青井　はつえ

相槌を打って波風起こさない
車来ぬだけど信号守ってる
忘れても取りにいかない破れ傘
うまい話乗りたいけれど金はなし
眠られぬ悩みをお茶のせいにする

岐阜市　平野　あずま

公平にわが家にも射す初日の出
三世帯和洋の混じる祝い膳
年始めピアスの巫女が神楽舞う
プリントの腕前誇る年賀状
真っ白の日記に夢を遊ばせる

岐阜県　鶴留　百合

自転車へこんなにあった登り坂
勉学の意欲今夜も靴をはき
空腹が少し嬉しいダイエット
買い足しへつるべ落としがせかす足
一葉のもみじあの日を包み込み

犬山市　関本　かつ子

上品で高価で箸が物足らず
焼芋の匂いもくるり新聞紙
山頂のパノラマ見てる握り飯
無礼講のはずだった朝の顔
吊橋の揺れも忘れて見るもみじ

浜松市　杉浦　えむ

あのひとに似た仏像だお賽銭
イニシアルにすると日記が火照りだす
憎しみを洗う驟雨に打たれたい
虫ピンを外すと風化する記憶
地の底の孤独をなめてきた清水

混沌の世に徒花が咲き乱れ
秋澄んで心も澄んでもみじ寺
芳しい秋の香まとう菊人形
原色の夢見た頃の走馬灯
高齢を自慢する人笑顔よし

京都市　清水英旺

冬ごしらえ早く早くと風が押す
嫁ぐ娘にあれもこれもと母心
ふるさとの空気も詰めて柿届く
パスポート出番ないまま主婦をする
芋粥の湯気のむこうで亡母が笑む

京都市　三宅満子

罪一等減じ今宵は皿洗い
罪な嘘ついて今夜は眠られず
夢追って足下の石に蹴躓く
結婚で罪滅ぼしをしたつもり
もみ消したはずの火種が喋りだす

大阪市　伏見雅明

福娘寒さ元気に笹売りを
年玉をもらって中味思案する
寒行事うたれ滝受け邪気払い
いい人生その一言で菊の酒
しめ縄とネオンを付けて観覧車

大阪市　吉川弘泰

名を知らないが冬の日を咲いてくれ
右向けに左を向いた頃の橄
大阪赴任ありがとうからおおきにな
用心棒のように携帯持って出る
そこはこうだと鉛筆に笑われる

大阪市　尾崎黄紅

靴を脱ぐ土の温もり触れたくて
身の丈の暮しも楽し日々多忙
奥の手はまさかの時の安全牌
満ち足りた人の欠伸を見てしまう
受け止めぬ心へ溶けぬ角砂糖

大阪市　三浦千津子

都合よく嫁に使われ平和です
辛口の友達ひとり居て楽し
時々は頭をカラにして歩く
嘘のない青空まずは深呼吸
冴えぬ日のお茶は濃い目と決めている

大阪市　中井崩

晩秋に女はひとつ歳をとる
源平が仲よく薫る菊人形
終章の粧い凛と木々静か
ピリオドを打つ銀杏の落ちる音
戻れぬと知ってゆっくり渡る橋

大阪市　森田明子

寄り添いて今日の歓び分ち合う
寄り添いて潤む目と目を労わりぬ
寄り添いて亡き母偲び香を薫く
寄り添いてこよなく愛でる旬の味
寄り添いて茶の湯嗜む菊日和

大阪市　福岡末吉

秋空に男の嘘を見抜かれる
秋風が首筋撫でて行く不気味
ふんふんと妻に付き合う秋夜長
初霜が降りて終った恋ひとつ
霜焼けも今は昔の温暖化

池田市　上嶋幸雀

思い出を黒く塗られた古い地図
記憶力私に戻る夢の中
底力見せた昭和が消えてゆく
人参が嫌いで今も走れない
愛されて育ちましたというリンゴ

池田市　多田契子

松茸の匂いをたんと嗅いで来る
午前五時散歩をせがむ靴をはく
道聞いて心やわらぐ国訛り
針千本飲む約束が果せない
子の世話にならぬ積りの万歩計

吹田市　二宮栄子

子を叱る母も一緒に泣いている
逢える日は少し濃いめの赤を着る
人間が好きで仲間と飲むお酒
コスモスは風にゆらりと生きている
好きですと言わせた酒に今感謝

高槻市　杉本義昭

わいわいと来て淋しさの置土産
全開の蛇口我慢がせきを切り
古日記遠い失意を撫でている
難題を解いて心に隙が出来
捨て切れぬ未練が岸にしがみつく

枚方市　伊達郁夫

変化ない日々を人様無事と言う
ハードルを持たぬ気楽なトンボです
野の花を摘んだ男の太い指
頭より尻尾振るのが遅すぎた
高い樹に登り孤独な猿がいる

高槻市　佐甲昭二

プライドを捨てて余生を丸く生き
肩書きをなくしとまどう迷い道
深呼吸してイヤなことふき飛ばす
コレステロールかまってられぬバイキング
良き便り届いて嬉しい秋日和

枚方市　二宮紫鳳

重箱に残して行った亡母の影
突く相手さがしています一人鍋
生きてますそれしか書けぬ年賀状
寒風の中へ気合でまず一歩
お疲れを取って上げましょう縄のれん

羽曳野市　福田悦子

着膨れに散歩馴染みを見まちがう
湯加減を手で見ることも忘れかけ
もったいないみっともないも忘れ勝ち
プランター並べて妻の憂さ晴らし
急行の停まらぬ土地に根を下ろし

羽曳野市　森下一知

駄馬でいる誇りぬかるみ走り抜く
真っすぐな心で打てぬ変化球
居酒屋で今日にまとった影を脱ぐ
順風のワナを知ってる鯉のぼり
正道を歩いて靴は傷だらけ

羽曳野市　吉村久仁雄

大仏の掌で舞う煤払い
青テント消したい過去をもって生き
うるさいとこだまで返る反抗期
冗談に本音ときどき散りばめる
歌ってるキッチン今日は上機嫌

羽曳野市　永田章司

夫婦岩のようにふたりの影法師
ふたりして幸せそうな静かな夜
神様のお思し召しかと今日も堪え
嫁ぐ朝両手つつみの握手して
明日散りそうな花にも水をやり

泉佐野市　備後三代子

魚心あれど水涸れ時を待つ
かわく喉弱音を耐えて甘露得る
かわく砂　戦乱塵にしない意志
無理ですと拒否をされても根をおろす
無頓着そぶりだけです気はそぞろ

門真市　矢阪英雄

のり過ぎて話の本筋見失ない
もう飲めん一晩寝たらまた白紙
数字には弱いが欲に目がくらむ
かみさんとやり合う気なしボヤくだけ
酒やめて煙草やめたら何残る

高槻市　住友佳一郎

金婚の宿に着くなりああしんど
鈍行で一人旅する夢も失せ
お月様影踏みごっこ見てました
氷点を読んで自分史書き始め
ウオームビズ戦中戦後してました

河内長野市　印藤智子

泉佐野市　稲葉　洋

脆いなあ青から白となる決意
生き残るための矛盾と言い聞かせ
大欠伸なんの苦労もないのかえ
どうにでもしてよ　どうにもならぬ老い
梵鐘に合わせ晦日の回想賦

河内長野市　木太久　正一

金剛の山波くっきり秋さやか
八十年生きて悔いなし日本晴
よく食べて動き健康第一に
終幕のひとり芝居を恙なく
大胆に男料理に挑む日々

岸和田市　池田　岩夫

責任をとって辞めても席が待つ
目次にも自慢が躍る自叙の本
毎度有り言ってもらえぬ販売機
喜びと苦難が同居遠い道
投げ売りに射る目探す目女の眼

岸和田市　坂口　英雄

幸せをみくじでためす初詣で
頂点に立つと出て来るスキャンダル
失敗も恥も重ねて歳を取る
お互いにストレス消えた長電話
無職でも時間通りに腹がへる

寝屋川市　岡本　勲

もう妻は俺を相手にしなくなり
押売りに妻の勇気が前に出る
人生の裏も表も知る屋台
長すぎるスピーチ手頃な子守唄
携帯で夫泳がす妻の知恵

寝屋川市　森田　れい子

異文化をテレビで学ぶ母元気
リモコンは全部手の内気楽です
手のひらでリモコン通り舞う男
プラス思考の君が好きです影法師
鈴ついた草履が跳ねて七五三

藤井寺市　増井　ヨシ枝

まだまだと老いぬ薬の好奇心
おめでとうポストの音が待ち遠し
飼い犬も首輪新調おめでとう
狛犬さん今年一年宣しゅうに
初詣で犬もおすわりワンと鳴く

藤井寺市　吉田　喜代子

剪定に好みの違い聞く平和
青空に愚痴もどんどん溶けて行く
聞き上手ついつい乗った軽い口
若い子の死んでるような目が怖い
灯油値上げ蓑虫なみに着膨れる

自分史の仕上げは妻の手を借りて
遊ぶ子が減ってゆっくり飛ぶトンボ
見通しが甘かったとは言わぬ人
酔うほどにお里が知れる言葉尻
あの映画誰と観たのか遠い日々

堺市　羽田野　洋介

消しゴムで消せない嘘のしみがある
また一人賀状のリストから消える
腰軽く調子よすぎて任されず
東照宮見物だけの浪花っ子
定年後輝きだした人もいる

堺市　奥　時雄

顔の相そのまま自分史とならん
古稀すぎでスピード早い砂時計
出歩いて嫁に好かれる鬼になる
木を伐った罰がどんどん降ってくる
直球でくる川柳の面白さ

堺市　大久保　伸子

六十年杯を重ねて今ひとり
戦後史を語れば自分見えてくる
ときどきは昭和に戻る演歌聞く
初春にときめき持ってひとり旅
今年また愛想良くして妻と居る

吹田市　早泉　早人

新春は何時も通りの刻きざむ
内緒だといってた人が震源地
忘れてた夫と手を組む温かさ
夢だけは背延びをしても届かない
かくれてた父の生き様巻き戻す

八尾市　脇　俊子

一人酒勝手気ままに夜と居る
人情がからめばもろくなる頑固
初詣で健康だけで欲はなし
会えぬ人賀状に託し夢を追う
間引菜の母が自慢の一夜漬け

八尾市　田中　トシエ

辛抱を極めた妻の活断層
人情が薄いと刺がよくささる
股覗きしても解らぬピカソの絵
人生はパステル調で終りたい
絞り出す絵の具で老いの日々描く

八尾市　笹倉　ひろし

便利だが踏ん切りつかぬ車椅子
原油高マグロ納豆お前もか
ぼけたかな薬の数がまた合わぬ
ペイオフって何でしたかと妻が聞く
一気飲みしてみて若さ確かめる

八尾市　田邊　浩三

身の丈の合格点で生きている
生命線皺と合体して伸びる
恋人がいつの日からか友となり
母になる女の顔にある確か
幸せは節目節目にできた友

大阪府　神野千恵子

霜下りた軒下飾るつるし柿
無理あかん思いながらも無理をする
こわれたら元に戻らぬ老いの腰
満ち足りていても欲望湧いて来る
生きのびる蝗残照惜しんでる

大阪府　小栢こずえ

いつからか僕の身なりは妻好み
封書には〆を書かぬと気が済まぬ
数々の苦労わたしの宝物
古稀をまだちゃんづけで呼ぶ伯母がいる
回り道でも自分には合っている

神戸市　木村忠義

時々はダメ虎だからファンです
いつからか夫が友になって今
羽布団鳥にもらった暖かさ
青い鳥そばにいるよと自己主張
ココア飲むおとこ何だか優しそう

神戸市　田中章子

満月にビルの谷間は狭かろう
健康の妙薬笑いのある暮らし
少々の秘密をもって楽しんで
生きてきて自問自答の夜は長い
暖かい言葉汚さず受けとめる

神戸市　山田婦美子

十指みな節くれとなり農の詩
妥協した安易さ攻める喉ぼとけ
あべこべのムードになっていく未練
灰皿に火をねじり消す自己主張
舌の根に悔い溜めている苦い酒

相生市　村木信子

線香花火老いの元気を笑ってる
決心を午後の紅茶が掻き回す
農の手にフォークとナイフ馴染まない
天寿まできばる余生の蝸牛
本心を秘め相槌の使い分け

尼崎市　河津正治

実りの秋木の実豊作　里平和
食の秋体重計に監視され
介護する人の身になりバリアフリー
八ヶ月這った立ったの家族愛
訃報欄身につまされる同い年

尼崎市　小池幸子

三田市　石原歳子

何処へでも歩くスローな暮らしぶり
寒天が健康食に躍り出る
カラフルなおしゃれしている熱帯魚
どしゃ降りが汚れた地球洗ってる
忙しい主婦を助ける無洗米

三田市　上垣キヨミ

母さんの苦労が晴れるお振袖
式場と料理で決まる祝金
拭き掃除だれか来るかと不思議がり
墓まいりざんげをしたりたのんだり
村まつり天狗が降りる森がない

三田市　堀正和

水族館鮨のネタなら知っている
通帳もたまに足し算したかろう
禁酒刑執行猶予はつけぬ妻
気が付けばニートと同じ暮らしぶり
遺言もなしに枯葉がそっと散る

西宮市　片山忠

寄りかかる肩はあなたに空けてある
義理果すみたいにそっと手を握る
世渡りが下手な私の決算書
翔ぶことを止めた男に出るあくび
余熱未だあるのに女目を覚ます

西脇市　七反田順子

ソバ畑やがて産地は何処の名に
ワインにも味はいろいろ下戸にあい
にこにこと母の背中は笑ってる
モナリザの微笑もろて生きている
絵手紙に四季折り折りの花の彩

兵庫県　安達厚

関心を見せれば相手こちら向く
譲ること急がぬことを知る傘寿
情けない僕のことしか考えない
紅葉ならどの色だろう喜寿の僕
無位無冠心に錦もっている

奈良市　尾畑なお江

遠ざかる故郷の山の裾模様
ああ生命ずしりと重い血の嘆き
露天風呂紅葉舞い込む乳房から
図書館の椅子は寝心地悪くない
輪を抜けてストレスまでも置いて来る

奈良市　乾春雄

迷い子が風船だけは握ってる
親似でも親孝行はせぬ息子
罪責めぬ母の悲しい目が責める
拘れば悲しい傷がまた疼く
付き添いはどちらだろうか老い二人

和歌山市　土屋　起世子

しばらくは天下取らそう膝枕
帰らぬ子今夜も明かりつけて待つ
携帯もカードも持たず秋の道
祭り以後若い二人が来なくなり
それなりに恋の季節も知り冬木

和歌山市　たむら　あきこ

すこしずつ変わるわたしも風向きも
にんげんが来て去る幕のない喜劇
うっかりと相槌打てぬ板挟み
午前二時天狗が覗く読書中
影法師くっきり確と生きている

和歌山市　山田　侃太

正月に寄って痩せたの太ったの
背をつつく人が誰だか判らない
バナナ剥く指がクスクス笑い出す
赤信号蒸発をする夢ばかり
安心の野菜は町を出ていかず

和歌山市　根田　よしこ

冬が来たぐうたら鍋に恵比寿顔
いつまでも消えぬ戦争あと始末
鍵っ子に犬が飛びつき出迎える
転んでもキズ絆貼ると起き上がる
来年もよろしくと来た年賀状

田辺市　大峠　可動

日章旗　白にも赤にも民が住む
円周の無限倖せ追い続け
疑心暗鬼　重荷になって独りごと
参拝で法治国家に石礫
木洩れ月梢もほほを染めにけり

和歌山県　辻内　次根

逃げようとしても捉まる秋の色
争いは嫌い宮沢賢治の詩
今冴えています心が澄んでいる
故郷にいつも大きい海がある
目が覚めているか自分を呼んでみる

和歌山県　村中　悦男

苦労した人の話はよくしみる
旅の朝風邪をひくなと背なの妻
ひとことが長く気になる老いの坂
夕焼けを背に一枚の紅葉散る
生き方の摸索続けて早八十路

倉吉市　酒井　芙美子

ブランドで飾りたてたが肩がこる
優柔不断毒にも薬にもならぬ
豊作を喜びトンボ乱舞する
断りが下手で役職背負わされ
丁度良い母の甘辛匙加減

米子市　小塩　智加恵

不器用で小さな不正許されぬ
ヨン様に飛びつく歳はとうに過ぎ
一票が予想を越えた大勝利
敏感に音を集める耳元気
あと十年平均寿命越したいね

鳥取市　岡田　信恵

調子よく続いたあとの落とし穴
攻められて思わぬ口が嘘を言う
もう少し女でいたい歳になる
優しくも厳しくもあり親の愛
年賀状図柄はポチを描いてる

鳥取市　横田　春名

老いてきた明日の荷物は背負うまい
日陰から心も出して陽に当てる
老醜を支え合うまで口喧嘩
菓子折りの中身菓子だと思い込む
二を三に分ける人情薄くなり

鳥取市　中宇地　秀四

星屑の一つ一つが夢を持つ
イチゴ苗植えて真っ赤な春を待つ
多数決これで良いのか悪いのか
男にはそっと見守る愛もある
腹を立てそしてゆっくり思案する

鳥取市　森　美智代

ウォームビズ灯油値上げも何のその
立冬に黄砂も飛んでくる異変
私の出す答など知れたもの
信念が三日で消えたダイエット
宮さまと同い年です娘は独り

鳥取市　山口　千代子

柿熟す季節淋しく人恋うる
神仏の目が怖いとは善人か
美しい言葉に油断してしまう
妻の愚痴聞いた振りして空返事
認知症笑うないつか我が身かも

鳥取県　岡村　孝明

縋られるたびに生甲斐湧いてくる
捨てきれぬプライドに泣く時がある
茶碗揺れ心の動きかくせない
したたかに酔ってもけじめ忘れない
夢をもち歳のことなど気にしない

出雲市　川島　和歌子

哲学の道で出合った風の耳
心配を他所に呑気に酒を呑む
妥協ぐせ見せて呑気に旅に出る
思い切り腹の底から吐いて見る
慎重さ欠いで財布が底をつく

唐津市　岩崎　實

野菊活け楷書三行秋日和
とんとんと予定が運ぶもずの声
落ちついて事を運べば見えてくる
印押さぬ法務大臣好きですな

今治市　渡邊　伊津志

見なければ見えない風の絵に挑む
生きることを試みている風の顔
飾らない無邪気が抜いた冬の棘
結び目が時時緩む妥協癖

シドニー　坂上　のり子

肩のほこりそっと払ってあげる恋
もう急ぐことはないなと朝寝する
比較してやはり自分にあまい点
息子らとだんだん波長ずれて来る

シドニー　三谷　たん吉

誰一人聞いてないからひとり言
パソコンは使えど教養身につかぬ
夜更かしを叱れぬ親は罪つくり
火をつけて毒を盛ってる普通の子

メルボルン　藤原　ポン吉

寝る前に読んで聞かせる母の愛
お弁当確か昨日も見たおかず
油切れ我慢できずに水をさす
スランプと言えるレベルじゃないみたい

草加市　飯土井　健翁

冗談の中に隙の無い言葉
書くことの出来る余生の幸を知る
退屈を知らぬ柳誌を友として
まだ元気明治生まれの良き頑固

東京都　井上　つよし

土壇場で守り通した雑魚の意地
幸せは静かに明ける秋の朝
病む友の一筆箋を書く気力
一杯の未練断ち切る血糖値

東京都　笠原　のりこ

遣る瀬無い哀しみだけが焼け残る
手を当てて木が吸う水の音を聴く
メール好き携帯世代話しべた
若者のジーンズの穴右奇数

国分寺市　野崎　勝

定年後日めくりだけが曜日告げ
定年にハローワークも遠くなる
次は何時来るかと病床の老母
顔色を読んで結論先に言う

府中市　藤岡　ヒデコ

食欲と運動量が反比例
老いた耳逃しはしない褒め言葉
秋冷を労わり合おう熱燗で
大漁のサンマ度々我が家にも

やったぞと思う満期の朝迎え
ネクタイは黒を残して仕舞い込む
病院がたまさか活気ある不気味
血圧が上がる電話のベルの音

横浜市　金森徳三

部屋中に活性炭を置いてエコ
何時からか湯呑み持つ背が丸くなる
通勤のラッシュに耐えて定年日
あみだくじ　やたらと線を入れたがる

横浜市　中尾哲代

悲しくて菊にもたれるかすみ草
稲のゆれ静かに秋を聞いている
大地震地球の隅の悲しい日
オカリナの古代の夢を呼ぶ調べ

静岡市　中西雅

束の間の木漏れ日猫は見逃さず
妥協などせぬと踏ん張る鬼あざみ
綱引きに力の響き知る気合い
まばたきもせずに園児は紙芝居

犬山市　吉田幸子

ケイタイを持たない訳を訊ねられ
初恋の歌ホロホロと一人の夜
まあいいか空がこんなに澄んでいる
紅葉散る古傷チクリ胸を刺す

犬山市　金子美千代

こころざし高く持つ子で親不孝
アンテナは何時も張ってる主婦の椅子
バッグにはいつも女を忍ばせて
顔上げて白黒つける橋わたる

京都市　桝本宏子

今年また今を大事にして生きる
口元の可愛い写真はセピア色
適当に忘れる事で世は平和
義理を欠く勇気出きれば肩軽い

大阪市　中村れんげ

句読点だけは外さず楽に生き
感情を丸く抑えて日を送る
ウォームビズのおしゃれを真似て若返る
ストレスも紅葉も散らす秋の風

大阪市　吉内タカ子

安堵した快気祝の母の頬
ヨン様の写真が癒す更年期
露天風呂沈む夕陽に手を合わす
お仏壇鉦叩いては愚痴こぼす

大阪市　寺井弘子

抱き合って名乗る八十路のクラス会
買出しも幸せのうち老夫婦
立ち上がる勇気をくれる古い友
カレンダー買って書き込む旅の夢

大阪市　池上清治

厚着して協力しますウォームビズ
麻酔銃打たれて虎が目が覚めず
大将と共に沈んだ千林
顔でない服がきれいとほめてるねん

大阪市　平井露芳

それからを聞きたがる子の夢見る目
長い夏嘆いていたにもう師走
すらすらと出て来た母の名文句
歩く事薬と決めてまず千歩

大阪市　吉田富美

行く秋を足踏みさせて汗をよぶ
母の歳越えて法話を聞きに行く
説法を聞いてうなずく私です
黒塗りにさせてはならぬ九条を

大阪市　平嶋美智子

胃を切れば腹が黒いと言われそう
千六百キロカロリーのうす情け
大小のお通じ日常会話です
辛抱の良い患者だとほめられる

大阪市　中村忠敬

満州国でっちあげとは露知らず
赤紙に判捺した日の手の震え
ペン奪い銃押し付けてきた国家
どつかれて覚めた歩兵の頃の夢

池田市　北出北朗

体重計後悔してるバイキング
だんじりが好きで岸和田離れない
何よりも薬になると見舞金
国民はポマードの香を忘れない

泉大津市　助川和美

子の個性殺して親の意に染める
冬の蚊も必至明日を生きるため
作句する脳へ老いが近寄れぬ
欲てて聞いているのは壁の耳

柏原市　伴洋子

今年最後別れを惜しむ菊人形
みこし車に乗せられて来る秋祭り
子のジーパン黙って繕い叱られる
散歩道道草しつつ花を摘む

河内長野市　内海綾乃

お詫びする仮面はすぐにはがれ落ち
だんじりに一命かける岸和田子
専門医専門外も診る不思議
流行眼で二重まぶたを喜ぶ娘

岸和田市　中岡香代

持ち味はこれまで生きたあかしかも
この夫はみんな私のものですよ
持ち主になってみたいなお月様
おしゃべりがストレス解消独りもの

岸和田市　堤楢代

情報におぼれあれ買いこれも買い　堺市　荻野像山
血を吸って飛べなくなった蚊ほど飲み
仕合わせなことにきっちり腹が空く
挑むことがあってこの世は面白い　高槻市　大崎侑子

聴牌をかくした顔と見抜かれる
値札見るまではとっても良く似合い
お買得つられて買った不用品
上げ底の土産も旅の語り草　高槻市　安田忠子

顔だけで席譲られぬ喜寿の姉
良い事がやって来そうな日本晴れ
笑いましょ元気な今を大切に
バーゲンで何も買えずにふらふらに　豊中市　源田啓正

句誌開き良い句に巡り逢うも縁
ゴミ出しの日は早起きをする烏
箸の先夢を掴めば直ぐ逃げる
薬師寺の写経に託す虫のよさ　富田林市　古田千華

青信号歩幅そろって老夫婦
恩賜の煙草金平糖になりました
鼻と耳かやくご飯の焦げ加減
また一軒京の町家を壊す音

氏神さんへ恵方気にせぬ初詣で　寝屋川市　北田ただよし
柏手の音冴えきった年初め
お元日知らぬ先祖と酌み交わす
戌年も無沙汰しますと年賀状　寝屋川市　長濱賢山

がんばれと呪文のように母が言う
似たような内容ばかりテレビ界
税金の無駄を台風見て回り
不景気に追い討ちかけて土砂崩れ　東大阪市　今岡貞人

若人の波にもまれて戎橋
呼びかけに美人の方へする募金
がっくりと思惑違い預金利子
一本の白髪逆らうように立つ　東大阪市　米田水昇

わくわくとときめく心青春す
もがいても釈迦の手の中わくの中
大きい声内緒にならぬ内緒です
温泉の湯けむり裸のつき合いす　東大阪市　大塚サキ子

旅の友湯治であれば皆家族
似た夫婦共に似たとこおかしがり
袖引かれ席ゆずられて有難う
ついでだけ済ませて用事忘れてた

東大阪市　佐々木　満作

仲違いしても本音は信じてる
夫には内緒で買ったルイヴィトン
孫達とメールで交わす内緒事
華やかなマドンナ議員乞う期待

羽曳野市　松本静子

満点でなくてもいいの円満で
お買物おまけたっぷりある店で
コスモスは亡母の好きな花ゆれて
秋空にポッカリ浮かぶ白い雲

羽曳野市　仲谷真一

香水を男もつける時が来た
あかすりでひと皮むけて新年に
虫の音が知らしてくれる妻の事故
坊さんもヘルメットかぶり走ってる

枚方市　小川良吉

勝ち負けのない浄土わが夢の里
今日もまた仮面をつけて家を出る
追伸に本音ちらりと見え隠れ
気配りが足りぬ手紙に悔い残す

藤井寺市　伊藤アヤ子

熟年の二人話術も忘れがち
ふる里へ幸せ探す風が吹く
ひまわりが秋に咲いてる笑ってる
今年から姓が変った年賀状

藤井寺市　俣野登志子

黄昏れて苦労ばかりがなつかしい
捨て猫に心を鬼にして逃げる
一生分のもみじ見たよな峠道
席譲り最敬礼とはご丁寧

藤井寺市　西村栄一

ただ歩く緑の中を無の遍路
いい朝だ御飯おいしく胃が軽い
八十路まだ元気ですロマン追う
リハビリで米粒つかむ左箸

箕面市　寺井柳童

ハイキング　ボロを着て行く戦中派
玄関に揃いのブーツ秋祭り
デジタル派もうアナグロに戻れない
大洪水ペットボトルへ給水車

八尾市　西川義明

手応えを魚拓で話す釣天狗
若いママ児が母乳の味しらず
義経が最後を飾る菊人形
成し遂げた男が見せるいい笑顔

八尾市　寺川はじむ

味見した時は結構うまかった
こだわりの文字につられた小料理屋
冗談の効かぬ男を怒らせる
阪神のファンと言えば丸く済み

八尾市　松葉君江

引き出しをふやし老化を遅らせる
これからは愛の鞭よりコミニュケー
正直の汗で戻ってきた財布
これからは本腰入れてウミを出す

八尾市　平川幸枝

遅すぎた老後のプランカットする
割箸に替えて豆腐の角を取る
お隣の境界線の草いきれ
生きていく自信がもてる四季の雲

八尾市　中島春江

駅弁の窓の景色も味のうち
香の放つ松茸食べた日は遠く
九九たまに度忘れさせる計算器
整形美人以前の顔の子を連れて

八尾市　赤木妙子

亡き母にせめて一箸初秋刀魚
健康法手揉み足もみしてみても
姑息な手使えばいつかはね返る
捨て所なくて汚点をもて余す

大阪府　高木道子

メルヘンな風に木の葉が舞いたがり
辻褄を時に合わせて母平和
ほがらかに鴉が集う柿の赤
値札見てバーゲンの日を待ち侘びる

大阪府　畑中節子

シナリオにない毎日に慣らされる
何時の間に電池切れたか老いの耳
お疲れさん今日は休めと雨が降り
夕焼けを呑んだ柿の実雫垂れ

大阪府　若月祐作

感謝して妻の料理に舌つづみ
多国籍国技の影が薄くなる
政局は郵政の渦にまきこまれ
収穫の秋はいそいで日が沈む

大阪府　西川冷子

金婚を祝す無骨な夫温し
無我夢中金婚ですと聞こえ来て
カーナビの矢印信じひと回り
ほろよいにしとけば良いに駅の裏

神戸市　武田恵美子

歳だからかかえられないストレスよ
旅に出て夫必要荷作りに
愛犬に介護保険を使いたい
なにもない想い出だけが宝もの

尼崎市　古川正子

月を見る星の無い空寂しそう
声が似る親子ですもの菊薫る
秋夜長テレビ見る間に明日の刻
芒の穂十四　五本に風情あり

相づちのないのにも慣れ老い二人
老いも良しパントマイムの寂を知る
児が真似る会話に夫婦仲直り
向こう岸何も見えない橋を行く

尼崎市　桑原東園

野仏の向こうは広い芒原
真剣に生きた八十路のいぶし銀
病院のかえり漬物屋に寄って
一人居のトンボ見つめる秋の天

篠山市　谷田多美子

似顔絵のよく似てるのが気にいらず
居酒屋で隣の秘密聞かされる
人生は薄桃色で終りたい
スイッチを押すのにいつも後手を踏み

三田市　阪本藤朗

老いの指グーチョキパーで脳刺激
還暦だ我が人生の靴はこう
主導権妻に握らせ家平和
古里へ旬の香りを嗅ぎにゆき

三田市　辻開子

恥を知れ耳も心も持たぬのか
夕烏立飲みもせず巣に帰る
旅に出る生命保険も子に教え
ずはり言う後の涙も覚悟して

宝塚市　丸山孔一

冬の雨ふと針箱を整理する
この空気何か言わねば場がもたぬ
川柳の迷路に入り迷ってる
赤い糸途中で二つ分かれてた

西宮市　石野照代

さっぱりと忘れた風に知らん顔
放っとけば息子は何も言って来ず
ネクタイが遠ざかってる退職後
カマかけて本音を探る笑い顔

兵庫県　臼井二英

人の輪にもまれて楽し日も暮れる
来たかいがあった祭りでくじ当たる
マジシャンの手を見つめたが煙まかれ
有り難い寺の講演聞いた午後

兵庫県　黒崎美紗子

みよちゃんね玄関向きの赤い靴
性凝りなく向上心へミニゴルフ
単純な脳と言わせてお付き合い
北風になえる裏薮告げる年

兵庫県　岩本美緒子

冗談ではいた言葉が傷つける
消す事の出来ない過去をざんげする
神詣でみそぎ祓いで罪を消す
うるさいと言いつつ妻に感謝する

生駒市　小西稔

我が心捉え離さぬ海の碧
褒められた分だけ力発揮する
安心を買った保険に不信買い
年金に読解力を試される

橿原市　藤永実千代

天高く食欲不振秋の風邪
道徳も変わり戦後のままでいく
お喋りで懐刀抜いてくる
姉妹も亡母追いこした皺の数

和歌山市　坂部かずみ

赤い糸人それぞれにある長さ
満天の星を手に取れそうな村
星月夜あなたを許したい気分
セピア色の自分に語りかける母

海南市　小谷小雪

カレーライス一人で食べてつまらない
肩が凝るそろそろ眼鏡替え頃か
錆びついた心ほぐしにゆく句会
思い遥かに生きて星降る里を出ず

和歌山県　森下よりこ

おんおんと泣こかガハハと笑おうか
曇天を秋晴れにして柳誌来る
翔んで跳ね躍る言葉で歌わんか
晩成はやはり鈍行お気に入り

和歌山県　木村徑子

岩洗う波と一緒に露天風呂
予約日に限ってとれる歯の痛み
出不精もじっとさせない菊日和
空き腹に追討ちかけるお味噌汁

奈良市　矢野良一

行く秋と来る冬橋上で握手する
冬将軍今かと出番待っている
ウォームビス俺はとうからやっている
泣きたい時に泣ける女は幸せだ

鳥取市　近藤秋星

バラの香に心癒され蛙とび
バラのよう美人のつもり生きてみる
口紅を落し歯医者へ八十路行く
晩秋のバラの色香に迷う歳

鳥取市　河田のり代

満ち欠けの月に人生重ね見る
人生は思う裏腹泣き笑い
角隠しだんだん角が伸びてくる
テロ騒ぎこの世の地獄身がちぢむ

鳥取市　谷岡清子

天高く吸い込まれそう秋の空
事もなげ胃に原因があると言う
天気予報今日はどうかとテレビ見る
むなしい日ダルマ相手に睨みっこ

倉吉市　前田喜美子

倉吉市　大田勝誉

六十路来てやっと回りが見えて来た
輪の外でゆっくり人を見抜きます
大好きな花が会わぬと言わぬはず
いいだろうもうばれてるよ尻尾出る

境港市　中井虎尾

コスモスは吹かれ強さを示しゆれ
仙台は楽天で沸き燃えて暮れ
城下町城より高いビルもあり
一度寝て起きて静かな月を見る

境港市　遠藤那珂子

息が合い長くつづいた夫婦道
食べきれず干し大根になっている
こころよくとびらを開けてくれた人
八分目食べてそれでもダイエット

米子市　猪森スミエ

そろそろと山から下りた里の秋
台風がそれて稲穂がお辞儀する
看板が無言で語るソバの味
三世代好みを盛ったオードブル

鳥取県　岩崎和子

振り返り一歩進んで年をつむ
繰りごとが多くなったと指摘され
胃が縮み歳相応のダイエット
ジンギスカン食べに紅葉の山を行く

鳥取県　毎田信雄

人間の罪ほろぼしの天災だ
ハリケーン自由の女神気に入らぬ
親の臑五十過ぎてもまだかじる
真心が好きで仕合わせ従いてくる

鳥取県　橋谷静江

湯加減に幸を感じる仕舞風呂
上品なお人とサークルお付きあい
音のする方へ心が引かれてる
音を立て枯葉が落ちる淋しげに

松江市　山根邦代

朝日さす今日の予定が弾みだす
旬の物煮ると鍋ごと踊り出す
弾む靴笑顔の友に逢いに行く
ふるさとは満天の星こぼれそう

松江市　柏井日出子

集団の歩き若さをクリアする
綺麗だね鏡に感謝うぬぼれる
何ごとが起きても笑顔絶やさない
柔軟な友との旅は元気出る

松江市　松浦登志子

見栄はって買ったのだから苦しもう
りんごにも好き嫌いあり十二月
願いごと痩せることだけ絞りこむ
春の花思い浮かべてひと工夫

ご無沙汰に年賀ハガキが世の習い
家々の明かりを灯し秋の色
八十路まで生きて幸せ至福知る
余生こそ自分らしさで終りたい

出雲市　荒木英子

再会に弾んだ杖が先走る
頑くなにひとり芝居で恙なし
置き忘れ刻む時計が眠らせぬ
越えた山遠い日語る長い旅

出雲市　加藤スズコ

早朝を渋茶に追われ万歩計
もの忘れ自慢することないでしょう
反省のポーズですまぬ酒の事故
香典で三途の川は渡れそう

雲南市　福間博利

手の平に載る幸で良い初日の出
夢に出ぬ夫成仏出来たやら
信用を買われて内緒聞かされる
丸印つけて今年もスケジュール

雲南市　武島ちよえ

気がつけば肩に止まった青い鳥
健やかに暮して居ます笑い皺
おいと呼ぶあなたにまたも支えられ
ラブレターでないがうきうきするポスト

雲南市　菅田かつ子

豪商の元をただせばお百姓
悪口をたたいているのは負け惜しみ
シーズンを終えればただの長良川
川越えを忍ぶ水無し大井川

安来市　原煩悩児

第26回 ときせん賞作品募集

雑詠2句（未発表句）

選　者　大野風柳　河内天笑　去来川巨城
森中惠美子　小松原爽介

投句締切　**平成18年1月31日消印有効**

発　表　平成18年4月号誌上

賞　ときせん賞1名・準ときせん賞2名
佳作7名

投句料　「時の川柳」購読者は500円(定額小為替)購読者以外は1000円(定額小為替)発表誌進呈　▼切手拝辞

投句用紙　便箋大(B5サイズ)用紙に作品2句と住所氏名を明記のこと。

投句先　〒664-0836 伊丹市北本町2-69-2
山口千尋 宛

選句方法　無記名清記の上、選句
1句ごとにその合計点で順位を決め、上位10句を入賞句とする。
(平抜2点・五客3点・3才4点)
◎多数のご応募をお待ちします。

時の川柳社

第92回 大阪川柳の会

日　時　2月3日（金）17時開場　18時締切

会　場　北区梅田　駅前第2ビル5F
総合生涯学習センター第一研修室

宿題と選者　△狙う・板野美子△せめて・前田咲二
△ときめき・長浜美籠△節目・礒野いさむ

会　費　欠席投句　2月2日迄に本田智彦宛
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706

同人特集

私の一句

（順不同）

薫風の中鬣を靡かせて　堺市　河内天笑

実を付けぬ花を労わる花鋏　堺市　板尾岳人

抹香の中に残っていた昔　竹原市　森井菁居

良心を試す財布が落ちている　大阪市　安達はじめ

ふと抱いた好意に淡い虹の色　交野市　田岡九好

愛すれば風の心が聞えそう　岸和田市　亀井皎月

片道は確かに虹が出てたはず　鳥取市　倉益一瑶

弱気と強気棒立ちと仁王立ち　枚方市　海老池洋

負け犬の視野にまあるい月が出る　出雲市　園山多賀子

荒天にこぶしをあげる葱坊主　枚方市　丹後屋肇

おにぎりに母の温もり満ちてくる　岸和田市　芳地狸村

くしゃみして雪の仮設を思いやり　寝屋川市　平松かすみ

翔ぶ構え上昇気流待っている　東かがわ市　木村あきら

日々好日裃を着ることがない　泉佐野市　山本蛙城

有り難うの言葉を惜しみなく使う　松山市　宮尾みのり

大らかに生きて節目はポンと跳ぶ　大阪市　小泉　ひさ乃

さらさらと奇麗な嘘が狂い咲く　東大阪市　森下　愛論

ドア閉めて一人占めする小宇宙　吹田市　野下　之男

辞書開き前頭葉へ活入れる　鳥取県　小西　雄々

切り札が裸さっぱりしたものだ　寝屋川市　森　茜

百匹の鬼とくちづけしています　富田林市　中井　アキ

笑っても泣いても見えてくる答　東京都　清原　悦子

歩み黙々奇跡呼ぶ風待っている　和歌山市　桜井　千秀

人間の愚がごろごろと落ちている　相生市　中塚　礎石

愛の辞書私の命燃えている　出雲市　富田　蘭水

黄昏の坂で内助をかみしめる　弘前市　高橋　岳水

娘は銀婚　私は花と五十年　松江市　佐野木　みえ

一晩泣いて明日はきらきらするつもり　松江市　川本　畔

子等の声聞こえなくなる街空ろ　大阪市　星野　きらり

プライドがあるから凛と生きられる　高知県　赤川　菊野

透析がつづく限りの火の時間　八尾市　宮西　弥生

走ったら間に合ったのはもう昔　尼崎市　春城　武庫坊

大正生れに人恋うる唄哀しかり　尼崎市　春城　年代

余生とは言わぬ人生第二幕　堺市　村上　玄也

人生のところどころへ酒の恩　岡山市　井上柳五郎
金で済む話が金で揉めている　藤井寺市　中島志洋
初孫に抱っこ抱っこの手が伸びる　高槻市　瀧本きよし
善の道明日は野心の歩幅かも　和泉市　西岡洛酔
譲れない線を守って夕焼ける　和歌山市　木本朱夏
わたしには万能薬のワンカップ　宇部市　平田実男
あなたより愛しています預金帳　大阪府　澤田和重
漱石と子規が並んでネット裏　鳥取県　谷口次男
謝罪ショーとんでもないの値が下がり　唐津市　仁部四郎
無添加の老いに頑固の錆が浮く　唐津市　井上勝視
ヨン様の咳が女を眠らせぬ　唐津市　久保正剣
合掌の指から落ちていた迷い　東かがわ市　川崎ひかり
不滅にはあらず詩集も肉体も　美祢市　安平次弘道
眼裏にいつまで消えぬ星月夜　河内長野市　植村喜代
人妻の言葉気にする秋初め　横浜市　小野句多留
富士山を二見より見る運の良さ　和歌山市　宮本三喜夫
寝たきりの祖母の目線で飼う金魚　茨木市　藤井正雄
みやこわすれ逢いたき人の笑みを抱く　出雲市　小白金房子
明日のため今日をしっかり生きていく　鳥取市　福田登美

貧乏神寒い財布が春を待つ　鳥取市　鈴木一弘

訳あって渋渋乗った泥の舟　大阪市　河井庸佑

鍵が要るなんて人間だけだよな　竹原市　時広一路

ほのぼのと厨が動く母の笑み　倉吉市　山中康子

歳重ねつる草の気をもらいたい　米子市　澤田千春

香水がほのかに匂う妻でいる　鳥取市　岸本孝子

神さまの死角にいても手を抜かぬ　鳥取市　岸本宏章

満月へ遠吠えしたくなる慕情　和歌山市　上地登美代

ふるさとに傷口舐めてくれる風　大阪府　籾山隆盛

ありがとう言えば言うほど幸せに　岸和田市　土橋房枝

つべこべと言ってはいるが朝の露　鳥取市　中村金祥

振り向かぬほうが気楽に生きられる　鳥取市　有沢せつ子

力湧く生きてるだけでまるもうけ　神戸市　池田善守

一年の元気に頼る予定表　米子市　政岡日枝子

ああ夫婦鎖ではない絆です　羽曳野市　洒井一壺

沢山のハードル越えてまだひよこ　大阪市　川原章久

またひとつ薬増やした誕生日　大阪市　榎本日の出

信号を守っているのは犬でした　大阪市　松尾柳右子

日向ぼこ心の糸を巻き戻す　東かがわ市　伊勢八重子

春らんまん老いにももえる事がある　神戸市　伊勢田　毅

慕うほど本が重なる一頁　寝屋川市　太田　とし子

小波が静かな闘志秘めている　八尾市　村上　ミツ子

哭く鴉笑うカラスに身構える　弘前市　岡本　花匠

洗濯の好きな女房に脱がされる　唐津市　樋口　輝夫

冬の絵を破って冬を忘れたい　弘前市　波多野　五楽庵

百人の村に戦争などはない　和歌山県　三宅　保州

崖っ縁思わぬ人の手が伸びる　大阪市　井丸　昌紀

離れても心は堅く結びあい　大阪市　町田　達子

花やよし葉桜もよし散歩道　尼崎市　軸丸　勝巳

故里はいいな眺めるものがある　松江市　恒松　町紅

気分新たに時の流れに添うて生き　東かがわ市　清川　玲子

ひょっとことおかめで祝うお正月　高知市　小川　てるみ

刀折れ矢尽きて絵馬の雨ざらし　奈良市　米田　恭昌

ポイントを集めて春の風を呼ぶ　藤井寺市　若松　雅枝

ゆるやかに輪廻転生抱き大河　河内長野市　村上　直樹

まだ青いあの柿の実もわたくしも　羽曳野市　徳山　みつこ

どん底をはい出る準備木わく組む　鳥取市　奥谷　彩子

幸せの原点だろう医者知らず　和歌山市　田中　みね

ジグソーのように記憶をつき合わす　池田市　栗田　久子
洗いざらい話せばお腹空いてくる　大阪市　津村　志華子
水平線ちいさい事は忘れよう　松江市　三島　淞丘
一代記のろける優し妻が居る　奈良市　宮口　笛生
人間の賞味期限は辞書に無い　倉吉市　最上　和枝
身の内の炎が消せぬ寒椿　出雲市　石倉　芙佐子
黙秘権神と己とだけが知り　奈良市　天正　千梢
ゆとりある時はやさしい声になる　大阪府　米澤　俶子
花ことば笑顔で活ける誕生日　姫路市　古川　奮水
ヒナ守る時豹変をするつばさ　大阪市　津守　なぎさ
この指たかれ元気印のバスツアー　大阪市　津守　柳伸
一万歩歩いて今日の憂い消す　鳥取市　福西　茶子
母が居る以外なんにもない田舎　大阪市　大川　桃花
恩に着ることはけろりと忘れてる　米子市　野坂　なみ
痛む歯があっていいねと言われたり　高石市　浅野　房子
戦争の生き残りです重い口　吹田市　瀬戸　まさよ
脇役でいつも余裕をもっている　出雲市　岸　桂子
包み隠さず話せばきっと嫌うでしょう　高槻市　傍島　克治
まだ礼を言ってないのに母が逝く　河内長野市　山岡　冨美子

太陽に誘われちょっとお洒落する　岸和田市　雪本珠子

ひと月の余命へ告知など出来ぬ　富山市　島ひかる

傘寿喜寿古稀と兄弟揃いぶみ　大阪市　板東倫子

ありがとう只の五文字が素晴らしい　岸和田市　森元ふみよ

認知症の母とつくった小宇宙　堺市　柿花和夫

風邪引くな転ぶな娘等がやかましい　鳥取県　石谷美恵子

自画像を天女に似せて画く驕り　富田林市　大橋鐘造

心境の変化と顔に書いてある　八王子市　播本充子

掌に余生の運があるそうな　東京都　岸野あやめ

女湯をちらりと覗くことはある　鳥取県　新家完司

父もえて夕焼空と無に還る　美作市　小林妻子

梅干で時どき日本人になる　篠山市　遠山可住

都会から寝にだけ帰る市に市長　吹田市　早川棲世

母さんののぞみ揃って朝ごはん　三田市　北野哲男

饒舌な樹々に埋まる無人駅　京都市　都倉求芽

躓いて男の意地が点火する　神戸市　山口光久

散り方の順序は神の手の中に　吹田市　大谷篤子

丸い物を見ると蹴りたくなってくる　東大阪市　谷口義

伽羅薫る独りの部屋の充足よ　堺市　山本半銭

笑ったら笑ってくれた幼稚園　東かがわ市　池内かおり

白鳥と夢買いに翔つ春の空　熊本市　永田俊子

近ごろは不景気言わぬなれた日々　枚方市　二宮山久

おはようと言える相手がいてくれる　芦屋市　黒田能子

大波を乗りこえやっと幸を抱く　米子市　光井玲子

檸檬薔薇漢字で書けば匂い立つ　豊中市　田中正坊

履歴書に載らない罪はたんとある　羽曳野市　安芸田泰子

竹を踏みどきどきしてる土踏まず　河内長野市　井上喜酔

疵口をきれいに拭いて王手飛車　鳥取市　武田帆雀

おかげさんまた来年のさくら待つ　米子市　中井ゆき

笑い皺ふやして上手に年をとり　八尾市　生嶋ますみ

わが影に笑われぬよう背を伸ばす　大阪市　前たもつ

正夢の恋しい女と逢っている　鳥取市　土橋螢

舞い終えた五枚こはぜに朱が薫る　大和郡山市　坊農柳弘

蝶になる歓喜だ天にもつれ合う　寝屋川市　坂上高栄

あきらめも肝心だろう男なら　鳥取市　土橋はるお

時間待ち駅のそば屋も忙しい　鳥取市　土橋睦子

庭の木も犬も金魚も高齢化　竹原市　石原淑子

神仏が一体となる紀伊の山　和歌山市　細川稚代

誉め言葉器大きくして受ける　橿原市　居谷真理子
無事平穏いつも通りのありがたさ　神戸市　木村貴代子
丸見えの心自慢に生きている　大阪市　熊代菜月
澄んだ空路地の奥にも秋をくれ　八尾市　吉村一風
どん底で良心捨てず生きてます　大阪市　榎本舞夢
恋をするレモンの芯の一途なり　香芝市　大内朝子
二人きり相槌だけはしてくれる　堺市　齋藤さくら
砂時計砂が笑っているようだ　砂川市　大橋政良
春愁や胸の振り子が鳴り止まぬ　尼崎市　長浜美籠
もう少し生きねば帳尻が合わぬ　大阪市　神夏磯典子
戦争へむざむざ捨てて来た若さ　豊中市　吉田あずき
そよと来てそよと去る風遠き人　東大阪市　指宿千枝子
祈ること多い手ていねいに洗う　東大阪市　北村賢子
赤ちゃんの笑みに崩れた四面楚歌　大阪市　清水絹子
足腰のねじれ心のゆがみかも　大阪市　渡部さと美
のこされたいのちおまけにしたくない　鳥取市　林露杖
一徹で流れに添えぬ父の岩　大阪府　桑田ゆきの
人間のいる方へ来る夏の蝿　京都市　高島啓子
派手に泣き派手に笑って本音ふせ　堺市　西村りつえ

ブランクを抜けるとペンが走りだす　和歌山市　玉置当代
花いちもんめ背きつづけた子も戻り　米子市　八木千代
大切な余命と思うループタイ　松原市　玉置重人
ひと言の重さハートに染みてくる　堺市　宮本かりん
楢山の路へ減量しておこう　大阪市　川端一歩
番犬を飼わず夫で間に合わせ　黒石市　相馬一花
嬉しくてやがて寂しい孫の羽化　大阪府　前田ゆい
ライフライン便利なものと気付かずに　弘前市　今　愁女
子や孫に灯火管制などさせぬ　河内長野市　坂上淳司
地平線跨ぐ野心を抱いている　枚方市　寺川弘一
風の音賢治になって聞いている　吹田市　岩屋美明
日の丸を仰ぐと腹がすいてくる　川西市　西内朋月
馬鹿おっしゃい洗って消える傷はない　西宮市　山本義子
てのひらののぞみこぼさぬよう走る　吹田市　山本希久子
見上げればまだ半ばかな坂に立つ　松江市　小川注湖
雑学がとっても好きな古机　大阪市　西出楓楽
潤滑油救いの神と成らしめよ　松江市　安食友子
地の底を春の唄声水の音　出雲市　吉岡きみえ
今頃は柄杓の星にお泊りか　河内長野市　水谷正子

錆びてくる脳を耕す一行詩　高知市　川竹松風
軸足の揺れるはなしに芯がない　大阪市　岩崎公誠
二階からあいにく留守が降りて来る　尼崎市　林昭三
それでよしそれで良かったひとり言　藤井寺市　楠昭子
鉛筆が退屈そうだから書こう　藤井寺市　高田美代子
台風をくぐり美味しくなるりんご　弘前市　櫻庭順風
明日からは古希夢をまとめている日記　弘前市　相馬銀波
ストレスを溜めて逃げ場のない世界　雲南市　毛利幸
歩けるし食べて話して笑えるし　豊中市　江見見清
人生の所どころにある汚点　愛知県　早川盛夫
ささやかな幸をよろこび合うて生き　大阪狭山市　矢野梓
ゆっくりと疲れぬほどの日の暮し　熊本県　岩切康子
故郷は銀河の駅があるところ　大阪市　鶴田遠野
野宿の子不便さ知って立ち直る　交野市　山川日出子
ラムネころころ青い空呑んでいる　鳥取市　徳田ひろこ
ふる里を歌えば浮かぶ幾山河　鳥取市　録沢風花
もう少し命が欲しい白寿まで　尼崎市　黒川紫香
夕日美しあっけらかんと生きんかな　西宮市　奥田みつ子
二度までは無理に仏の顔つくる　藤井寺市　鈴木いさお

野望など無くて気軽に参加する　　堺市　矢倉五月
耳うちをされて流れを取りもどす　　美作市　大石あすなろ
ゼロ地帯から這い上がろ歩き出そ　　堺市　河内月子
重箱の隅に光って女偏　　和歌山市　松尾和香
順調に老いて居ります物忘れ　　東大阪市　笠井欣子
耳をすまして遠い太鼓を聞いている　　西宮市　西口いわゑ
右足が左の足に蹴躓き　　大阪市　玉置英子
親思うこころ形で伝えたい　　鳥取市　春木圭一郎
窓開けて手を振る妻が愛おしい　　寝屋川市　山本三郎
金色に葛城眩し初日の出　　堺市　石堂潤子
行間をたっぷりたっぷりの想い　　橿原市　安土理恵
耳寄りな話が好きな日向ぼこ　　小野田市　石川侃流洞
香水を変えて主流へ泳ぎ着く　　日高市　根岸方子
生きて死ぬだけでぎょうさんある迷い　　鳥取市　上田俊路
真っ直ぐに生きた男のいい笑顔　　さいたま市　星野育子
草萌えてはねまわりたい輝いて　　高槻市　井上照子
笑顔には自信をもっているらしい　　鳥取市　中原汲香
夜なべして命を綴る一行詩　　鳥取市　中原みさ子
経文をすらすら書くに到らない　　鳥取市　中原諷人

百歳の爺に静かな部屋がある　鳥取市　乾　喜与志
熱きもの人間ならば胸に抱く　鳥取市　森山　盛桜
やわらかな息で升目を埋めてゆく　鳥取市　上田　宣子
ダンスダンスに狂ってもみる笑顔　鳥取市　吉田　孔美子
初詣で母が教えている手順　鳥取市　国森　武子
生きるでしょ金婚式へあと五年　鳥取市　吉田　弘子
茶柱の福を信じて一人旅　大阪市　西川　更紗
歯車がかみ合う今日はうれしいぞ　美作市　山本　玉恵
倖せの動悸を妻と分かち合う　横浜市　菊地　政勝
本音ではなかろう僕を褒めている　岸和田市　岩佐　ダン吉
字の書ける右手をそっと撫でてやる　武蔵野市　亀井　円女
大らかな絵手紙が来た花吹雪　京都府　稲葉　冬葉
鶴を折るぐらいが僕のできること　四條畷市　吉岡　修
虫に耳とられ思索の行き詰り　八尾市　長谷川　春蘭
止めるとは言わず減らすという誓い　八尾市　山本　宏至
子沢山金の成る木に鍛え上げ　東大阪市　安永　春
咲いたと言えば雑踏になる萩の寺　八尾市　宮﨑　シマ子
噂など笑いとばしておくが勝ち　堺市　國見　蘭香
無意識に比較している目を恥じる　鳥取県　澤　裕子

愛染帖

新家　完司　選

寝屋川市　太田とし子

お祈りします　書いて祈った事がない

（評）手紙の決まり文句「…を、お祈り申し上げます」。本当に祈って書いている人は稀。

茨木市　藤井　正雄

妻の留守妻に似たこと言う長女

（評）しっかり者の妻に似てきたしっかり者の長女。苦言の内容も口調も妻とそっくり。

東大阪市　谷口　義

歳を書くところでいつも手が止まる

（評）恥ずかしくてためらうのではないが、我ながら「いい歳になったものだ」と思う。

唐津市　田口　虹汀

足元がぐらつく酒も飲まぬのに

（評）なぜなのだ。地震でもないし、お酒も飲んでいないのに。やっぱりトシのせいか？

尼崎市　春城　年代

平穏が崩れるときの速いこと

（評）何事もない穏やかな日々が如何にありがたいことか、崩れ去ったときに分かる。

寝屋川市　北田ただよし

好きやけど手を握らない訳がある

弘前市　高橋　岳水

年金を十二で割ると寒くなる

大阪市　前　たもつ

差があって敵の力がつかめない

寝屋川市　江口　度

妻に手をひかれ歩けた百米

西宮市　門谷たず子

無職でもホッと休まる日曜日

松江市　松本知恵子

コンビニの煮っころがしはきれい過ぎ

浜松市　杉浦　えむ

哲学を説く君笑顔忘れてる

和歌山県　三宅　保州

こんなことしてどうなる今日も日記書く

堺　市　矢倉　五月

犯人像どれもわたしにちょっと似る

唐津市　仁部　四郎

踏み石と私の足が折り合わぬ

寝屋川市　籠島　恵子

未熟とは言わぬ新進気鋭なり

大阪市　井丸　昌紀

医学書を読んで重病人になる

交野市　田岡　九好

ツーカーが一番通じない夫

境港市　遠藤那珂子

サプリメント老いを敵のように言う

羽曳野市　酒井　一壺

大都会水の足りない人ばかり

表札はふたりのままで住んでいる

和歌山市　楠見　章子

お月さんきれいな影ができました

百人は詫びねばならぬ人がいる

橿原市　居谷真理子

泣き方が下手でだあれも振り向かぬ

もみじの手なにを握って生きるのか

愛犬と気になる人の家を見る

自分史のその先を読む通夜の席

社説まで読んで政治の先読めず

風景に駐車違反が邪魔になる

二割増しで撮れた写真はいただこう

ずるい事許せるようになり　おとな

友の名を書き出してみる秋夜長

富田林市　池　森子

妻　母の免許汚したことはない

秋深し丘は愁いの花ざかり

鳥取県　石谷美恵子

虫時雨の中で電話を待っている

見ていると犬の尻尾もよく喋る

和歌山市　たむらあきこ

名人の手品のように秋の彩

ブーメランのような散歩を繰り返す

藤井寺市　太田扶美代

残りページ少し在庫を持っている

どの子にも手は打ってある日向ぼこ

寝屋川市　森　茜
ほめられるチャンスないから自慢する

和歌山県　辻内　次根
下戸ひとり粛粛帰ることにする

泉佐野市　稲葉　洋
歯軋りをしている百舌も私も

大洲市　花岡　順子
冬型の気圧になった夜の音

松原市　玉置　重人
舌打ちで不満を音に出してみる

岸和田市　土橋　房枝
老齢化僕も片棒担いでる

京都市　高島　啓子
遠吠えの犬の悔しさだけ判る

藤井寺市　鴨谷瑠美子
野次馬で自分が燃えるのは苦手

香芝市　大内　朝子
ギャルのへそぐらいではもう驚かぬ

和歌山市　木本　朱夏
数え唄柿もみかんも熟れてくる

美作市　小林　妻子
映画館出たら儚い現実が

藤井寺市　鈴木いさお
韓流の男優女優よく泣くね

和歌山市　古久保和子
パチンコで儲けて家が建ちますか

東かがわ市　池内かおり
下戸の妻鍛えて今日もふたり酒

唐津市　樋口　輝夫
テレビが点いているBGMのように

兵庫県　黒崎美紗子
どう化けてみたって皺はしわである

堺　市　奥　時雄
出し惜しみ十八番の曲を攫われる

神戸市　山田婦美子
その昔山に松茸出た話

鳥取市　福西　茶子
夕日背にガンマン気取る僕の影

和歌山市　田中　みね
平静を装い歯科の椅子にのる

大阪市　岩崎　公誠
相棒が働き過ぎて落ち着かぬ

高槻市　富田　美義
また怪我を保険屋どうもすみません

尼崎市　長浜　美籠
寒天のかわりこんにゃく食べている

鳥取県　谷口　次男
バリアフリー出来映え足に試される

和歌山県　木村　徑子
正攻法で進もう限りある命

八王子市　播本　充子
お年寄りいえいえみんな知恵袋

今治市　塩路よしみ
ホスト役終えて一人の寒い部屋

鳥取市　武田　帆雀
ほほえみを返して呼吸整える

大和高田市　鍛原　千里
均等法女やっぱり鍋みがく

枚方市　海老池　洋
案山子かと思えば歩き出す爺や

堺　市　和田つづや
ボロボロの心にリンゴの歌聞かす

八尾市　生嶋ますみ
メールより文より電話欲しい人

鳥取市　土橋はるお
悪友はどじょっこふなっこ時代から

芦屋市　黒田　能子
離婚して明るい顔になりはった

西宮市　西口いわゑ
サングラス外し眩しさ確かめる

奈良市　矢野　良一
秋風に見直してみる生命線

大洲市　中居　善信
イケメンよりあなたの方が温かい

西宮市　緒方美津子
老い二人ケーキまんじゅう半分こ

ずばりずばり切った男が山といる
家計簿の裏金作り得意です

吹田市　大谷　篤子
置き場所をかえると動く古時計

大阪市　三浦千津子
ものぐさな男の思案たかが知れ

米子市　政岡日枝子
好きだから危ない線は守っている

三田市　北野　哲男
床柱ない二次会が好きやねん

横浜市　金森　徳三
一時間地下鉄乗って陽が眩し

海南市　小谷　小雪
それぞれの病を癒す菊日和

和歌山県　村中　悦男
やき芋の笛がよく乗る北の風

神戸市　田中　章子
窓開けて雨見てるのもいい日なり

唐津市　井上　勝視
裏を見た男はいつも裏を読む

寝屋川市　平松かすみ
ひょっとして天井裏にアスベスト

豊中市　水野　黒兎
子にゆとり持たせて親は四苦八苦

堺　市　羽田野洋介
白々しい詫びの張り紙風に舞う

東大阪市　北村　賢子
レーザーで焼けば美人になりますか

鳥取県　竹信　照彦
孫のため出したコタツで昼寝する

弘前市　福士　慕情
雪降って雪の話で熱い酒

東京都　岸野あやめ
鍵握るお方会議は御欠席

札幌市　三浦　強一
声出して本読み脳の活性化

堺　市　山本　半銭
じゃじゃ馬も歳を重ねてもう跳ねぬ

寝屋川市　坂上　高栄
読む人もない自分史を書き溜める

八尾市　吉村　一風
天国で詫びたい人がたんと居る

京都市　都倉　求芽
亡母さんの言葉がいつも当てはまる

鳥取市　土橋　螢
新しい雪に埋もれた罪と罰

相生市　村木　信子
むらさきの未来図夢に抱く夫婦

尼崎市　山田　耕治
古里の風に雨戸を叩かれる

西脇市　七反田順子
ふる里は合併しても同じ味

大阪市　板東　倫子
にこにこと家族集まるおでん鍋

八尾市　田邊　浩三
子供らの寄せ書き開く赴任先

三田市　石原　歳子
独り身の息子に送る無洗米

羽曳野市　森下　一知
ちゃぶ台も昭和の母も遠くなる

高知県　桑名　孝雄
周平に近付くための粗酒粗肴

高槻市　傍島　克治
一言多く友一人去り二人去り

藤井寺市　高田美代子
はがき一葉ひもじさを消してくれ

鳥取市　西川　和子
波乗りが下手で渚を出られない

姫路市　古川　奮水
甘酒の生姜控え目凡夫婦

大阪府　米澤　俶子
家計簿はいつも焦げてる匂いする

交野市　山川日出子
すぐ耳が傾く話ガンのこと

松江市　三島　淞丘
軽蔑の目でワン公が通り抜け

武蔵野市　亀井　円女
勇み足してはおでこを叩く癖

海南市　堂上　泰女
生き抜いた人それぞれの万華鏡

八尾市　村上ミツ子
人生の節目ふしめに深呼吸

弘前市　岡本　花匠
あられ茶に亡母の思い出浮き上がる

滋賀県　中　宗明
祝い餅手さばき軽く丸めてる

誹風柳多留一一篇研究 5

伊吹和男・山田昭夫
増田忠彦・山口由昭
小栗清吾
清　博美

27　**生酔に沢山かけてしかられる**　旭連露蝶

伊吹　酔い覚ましの水をたくさん掛けて、着物までびしょびしょになったから、叱られたのではないか。いくらなんでも程というものがあると。

年わすれ生酔水をあびせられ　篭三5

山田　生酔に何かをかけて叱られたというのだが、その何かは何かこの措辞だけでは分からない。何より叱っているのが生酔自身なのか、「かけている」のを見て咎めている人なのかも分からない。でもこのままでも、何となく面白味のある句ではあるが……。

増田　かけたのは、着物や寝具をではなかろうか。暑苦しいといってはねのける。

山口　不明。水には少し無理があり、どちらかというと前説に賛。

小栗　礎解が挙げられた例句と同じく「師走油」の句と思っていました。師走に油をこぼした者はすぐに水を浴びないと火災にあうという俗信があり、一応善意（?）で、粗相した生酔に水を掛けたのだが、それにしても「そんなにたくさんかけるな」と叱られている光景。年忘れの勢いでありそうなことである。

年わすれとう〳〵壱人水をあび　四19

清　同右。礎稿引用類句及び小栗氏引用句の状態。

28　**そっと持出セ海鼠だと一二日**　鶴亀連名古屋

山田　十二月十三日の大掃除。「そっと持ち出せ、海鼠だ」と古畳を持ち出させている。海鼠は藁を溶かすという俗信があり、『譚海』には「わらにてつかぬれば、つかねたる所よりきるゝ。わらはなまこに禁物なればなり。それゆゑなまこをくひて食傷せしは、藁をせんじて飲時は即時にいゆるといへり」とある。畳の芯は藁だから、それが海鼠に溶かされたような状態の畳、つまりへたばった古畳だから、「そっと持ち出せ」と云っているのだ。

師匠さまなまこの表替をする　二七29

手習ひ子なまこの代を二百出し　安八梅3

山口　賛。『俚諺大辞典』には「海鼠を藁で括ったよう」という例えがあり、「緊縮箝制の自由なる喩。海鼠を藁に括れば短縮するよういう。次第に滅失すること」とあって、ここでは礎稿と逆に海鼠が消滅するケースと考えられているが、どちらにせよ藁と海鼠は禁物であろう。

小栗　賛。単に「海鼠のようにぐにゃぐにゃになった」古畳のことと思っていました。

清　同右。

29　**鬼に成てといふ人ハ情知リ**　鶴亀連瓢隠

山田　「鬼に成って」と苦言や諫言をする人は、訳知りの人情を解する人だというのであろう。しかし、そのような人は稀で、普通は鬼どころか、甘言を並べ、ますます不幸になって行くのを面白がるものだ。人の不幸は蜂蜜の味がするというから。

仏ヶにも成そうにして鬼になり　宝九桜

山口　賛。主題句のようなケースは駄目人間を立て直す場合や芸を教える師匠の場合に当てはまる。

清　賛。

30　出来ぬそうだんを二日路先てする

橘連鯉紅

山田　出来ぬ相談は無理な相談。二日路は「二日かかる道のり。二日間の旅程」(『日国』)。どうにもならない相談を、二日路つまりゆったりと先延ばしにしている図。もとより受ける気などさらさらないのだ。

春の旅にまだ二日路の八文字　六八27

増田　賛。考えておきましょうというやつか。

山口　賛。あわてるなといって取り合わない。

小栗　賛。「松が岡」も捨てがたいが…。

清　小田原評定ではないかと思うのだが、確信なし。

31　暑ひ事出張ッた衣の方を漕

若菜連中印

山田　この松は一般でもいいが、やはり大川端にあった「首尾の松」とすべきであろう。吉原へ急ぐ猪牙舟、いくらかでも涼しい所と、川に出張った松の方を漕ぐ船頭。それ程効果があるとは思えないが、気は心か。

大汐に松をかすって猪牙通り　傍二26

山口　賛。夏の吉原通い。

清　賛。

32　小言いふ内になくなる春の雪

桜木連大柳

山田　春の淡雪を詠んだもの。場面は色々考えられるが、雪を幸いに居続けた息子に「小言を云う内無くなる春の雪」あたりか。

いゝものといふとなくなる春の雪　一六5

下の句の出来ぬに消る春の雪　九三10

山口　賛。実際の場面よりも俚言、例えのようだ。

小栗　同右。居続けなどに限定すると窮屈になる。

伊吹　礎賛。「居続け」は捨て難い。

清　無理に居続けとすることもなかろう。春の淡雪が主題。

33　親類ィもないか間男施主に

立養老連婦美

山田　何とも奇妙な句。この施主、一体誰の施主なのか。間男が相手の女が死んで施主に立ったのか。とすれば、相手の亭主は既に死んでいるか、離婚しているのか、何れにしても施主に立てない状態にあるのだろう。それなら間男と云うまい。とすれば、夫が居た時分に間男をした女が、夫に死別あるいは離婚した後死んで、「親類も無いか（して昔の）間男施主に立ち」というようなことになるが、そんな義理堅い男も居るのだろうか。せいぜい、

知らぬが仏間男が通夜をして　二三八21

あたりでないのか。ただこの句、そんな穿鑿などせずに、そのまま「何とまあ、世の中は広いこと」と楽しめばよいのかもしれない。

増田　賛。やはり亭主が死んだのだと思う。女の親類になりすまして施主に立つのだろう。

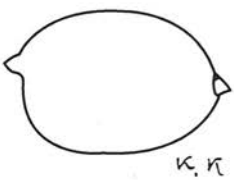
伊吹　増田説賛。気弱な女性では施主は勤められない。

清　亭主が死んで、その女房の間男が施主をつとめたということが面白いのであろう。このような句、理詰めで解釈しようとすると、ちっとも面白い句ではなくなる。

共選欄

檸檬抄

（薫風書、カットとも）



「呼ぶ」　仁部四郎選

オイと呼ぶのやめてくれなきゃノラになる　富田林市　中崎　深雪
友達の前では妻をオイと呼ぶ　大阪府　米澤　俶子
様付けで呼ぶお役所の気味悪さ　交野市　田岡　九好
お母さん用は無いけどオカアサン　東大阪市　北村　賢子
呼ばれたらハイとお返事する家族　和歌山市　榎原　公子
洗濯物干しているのに呼ぶ夫　熊本県　岩切　康子
返事せずヌッと出て来る十五歳　三田市　北野　哲男
公園で親子呼び合う草野球　豊中市　山門　タミ
山が呼ぶ海が招くと今日も留守　富田林市　大橋　鐘造
外出へ指差し点呼ガスその他　鳥取市　吉田　弘子
呼ぶけれど補聴器はずし写経中　唐津市　北村　松風
診断で息子呼ばれている不安　鳥取市　上田　俊路
主治医から妻が呼ばれた千羽鶴　弘前市　福士　慕情
地獄には呼ばれないよう花に水　京都市　桝本　宏子
大声で呼び戻したい通夜の席　生駒市　飛永ふりこ
居酒屋で社長と呼ばれ千鳥足　鳥取市　鈴木　一弘

「呼ぶ」　藤田泰子選

電子音に呼びかけられて幕が開く　神戸市　山口　光久
洗濯機役目終えたと呼んでいる　大阪府　高木　道子
影ゆれる熊野古道へ風が呼ぶ　和歌山市　松尾　和香
ふるさとが呼ぶ飛び乗った夜行バス　和歌山市　松原　寿子
どう呼んで見ても還らぬ夏の雲　出雲市　岸　桂子
呼ぶほどに逃げて行きたい反抗期　河内長野市　植村　喜代
幸運を呼ぶ茶柱が浮き沈み　河内長野市　井上　喜酔
呼ばないでそれでなくても迷ってる　泉佐野市　稲葉　洋
ふうちゃんと呼ばれる時はふたりきり　堺市　神原　文
ちゃん付けで呼ばれた途端無垢となる　河内長野市　坂上　淳司
呼び捨てにされて心が決まった日　三田市　久保田千代
呼び止めて見ても素通りする恋よ　富田林市　中井　アキ
仕合せを呼ぶはずだった薬指　池田市　上嶋　幸雀
一番星降りておいでと呼びかける　西宮市　山本　義子
オイと呼ぶのはやめてくれなきゃノラになる　富田林市　中崎　深雪
夫呼ぶ声に時々刺がある　寝屋川市　森　茜

呼ぶまでは来るなと女将遠ざける　唐津市　山口　高明
お祭りに呼ばれて酒を持ってゆく　鳥取市　土橋　螢
肩書で呼び合うだけのお付き合い　和歌山県　三宅　保州
後輩をさんづけで呼ぶ窓の際　唐津市　樋口　輝夫
犯人のように呼ばれる目撃者　静岡県　薗田　獏沓
ギャラリーであなたを呼んでいるムンク　黒石市　相馬　一花
またかいな客呼ぶための店じまい　高槻市　住友佳一郎
呼び止められるようにゆっくり横切った　松江市　川本　畔
お誘いはないが化粧をしておこう　羽曳野市　洒井　一壺
呼ばれたり呼んだり聡い手話の指　砂川市　大橋　政良
介護士が呼べばにっこり眼をあけた　和歌山市　細川　稚代
呼びだして母は事実を確かめる　大阪市　榎本日の出
呼ぶ声が虚しく消える拉致の海　札幌市　三浦　強一
奥さんと呼んで素通りさせぬ店　大阪府　澤田　和重
新築へ田舎の父母を先ず呼ぼう　弘前市　高橋　岳水
呼ぶ声が届くあたりで遊ばせる　尼崎市　長浜　美籠
呼ぶほども無い終日を差し向かい　鳥取県　羽津川公乃
山彦が呼ぶ声を待つ過疎の村　枚方市　寺川　弘一
仲間呼ぶ形で恐竜骨になり　大阪市　大川　桃花

秀　句

タイマーが呼んで万端家事がすむ　和歌山市　坂部かずみ
宇宙から君達を呼ぶ時が来た　田辺市　大峠　可動
助け呼ぶ声に地球儀割れそうだ　羽曳野市　徳山みつこ

軸　吟

父母がなぜ俺を呼ぶのか昨日から

オバサンと呼んだらわたし振り向かぬ　和歌山市　楠見　章子
山が呼ぶ海が招くと今日も留守　富田林市　大橋　鐘造
税務署に有無を言わさず招かれる　吹田市　穴吹　尚士
呼び方でそんな関係かとわかる　堺　市　加島　由一
誰よりもやさしい声で猫を呼ぶ　和歌山市　古久保和子
人数の足らぬ時だけ呼びに来る　羽曳野市　洒井　一壺
子どもより頼れる大工さんを呼ぶ　京都市　高島　啓子
先生と呼べば誰かが振り返る　鳥取市　岸本　宏章
一回も呼んだことない救急車　川西市　西内　朋月
娘の名呼んでるニクイ男まえ　松原市　玉置　重人
セールスのために呼び鈴つけてない　堺　市　奥　時雄
再会を待っていたよと呼ぶ木霊　高槻市　執行　稲子
呼ぶ声が届くあたりで遊ばせる　尼崎市　長浜　美籠
夕焼けに呼ばれて父は出て行った　鳥取市　土橋　螢
呼ばれねば越せない川が一つある　米子市　中井　ゆき
若い日へ呼び戻されたハイネの詩　唐津市　久保　正剣
愛のかけら欲しくて亡母を呼んでみる　富田林市　片岡智恵子
母を呼び子を呼ぶ冬の日本海　安来市　原　煩悩児
ニンゲンをかえせと今日も呼びかける　羽曳野市　三好　専平

秀　句

助け呼ぶ声に地球儀割れそうだ　羽曳野市　徳山みつこ
呼ぶ声が虚しく消える拉致の海　札幌市　三浦　強一
最後にはきっとあなたの名前呼ぶ　堺　市　矢倉　五月

軸　吟

そのうちに呼ばれなくても参ります

犬

桒原　道夫選

犬だって育てたように育ってる　順子
ビーグル犬じゃれる兎のぬいぐるみ　(堀)正和
誰にでも懐く番犬飼っている　慕情
負け犬になって上手に泳いでる　志華子
のら犬の尻尾プライドだってある　権悟
半分は犬にまかせる夫の守り　(矢)五月
犬だけが僕に嫉妬をしてくれる　忠
真ん中に小犬が座る核家族　俶子
公園でひとり暮らしが犬自慢　和重
愛犬が写メールでくる赴任先　恭昌
好きな娘のとなりにいつも犬がいる　千里
犬の名で呼びとめられて返事する　明子
逃げ道を知ってる犬はよく吠える　愛論
善人のつもりが犬に吠えられる　孝一
飼い犬によく似て飼い主も吠える　霜石
人間と思い込んでるウチの犬　みつこ
ワンと啼く由緒正しい犬を飼う　忠
愛犬の瞳の一途さにふと負ける　アキ
老犬を労っている老夫婦　俊子
犬だって死にたくないの自爆テロ　一粋
愛犬の名も載っている遺言書　霜石
ドッグフード食費の欄に記入する　遠野
安全なとこで吠えてる家の犬　美千代
犬だから許されている事もある　あやめ
老犬で隣の猫と仲がよい　妻子
名を呼べば妻の顔見る家の犬　雅明
散歩道いつもの犬がまだ来ない　雅枝
古稀の坂ポチと一緒にかけ抜ける　和香
セールスの粘りへ子犬しっぽ振る　典子
リボンつけ服着た犬に吠えられる　倫子
年金で飼ってる犬がよく吠える　半覚
盲導犬もきっと悩みを持っている　美代子
うちの犬レッサーパンダの真似をする　(福)ゆきの
遠吠えに首を傾げる家の犬　英子
時々は犬にも正露丸飲ます　義
散歩道犬も一緒に吸う酸素　開子
誰にでも尾を振る犬で悲しませ　可住
佳
ウフフフフ犬につけている名前　扶美代
老妻と夢でチワワを飼っている　次根
小心な犬でうっかり近寄れぬ　善信
忠犬なら上目づかいはやめなさい　理恵
最後まで迷惑かけず逝った犬　ルイ子
人
シロという犬が主人のあとを追う　喜子
地
ご近所の犬には仁義切ってある　重人
天
新聞にでかでかと載る犬の鼻　播本充子
軸
野良犬が僕見る地面嗅ぎながら

暦

山中　康子選

ひめくりの暦の名句とても好き　三喜夫
人生の暦が巡り時は秋　(岩)和子
新暦子の婚の日をまず印し　シマ子
こっそりと恋を埋め込むカレンダー　早人
にんげん百態喜怒哀楽にある暦　柳弘
還暦を過ぎて生き方味が出る　ヒデコ
寝たきりの母へ絵手紙花暦　晴翠
日めくりが止まったままの妻の留守　美千代
酒なしデー暦に青いマーク入れ　公誠
カレンダー赤丸増えて十二月　和枝
暦日の吉凶なんか気にしない　ミツ子
ツバメくる暦のように正確だ　次男
日めくりのようには減らぬダイエット　一花
懐も暦どおりの寒さ中　(稲)洋
隔月に暦ではしゃぐ年金者　寅次郎
母が持つ休日のないカレンダー　充子
騒がせた噂を消していく暦　鐘造
故郷のおやじ座右に農事暦　武史
元旦の日めくり1が誇らしい　宏章
生れ年西暦で言いまだ卒寿　哲男
一坪の庭に我が家の花暦　(安)泰子
子守役暦の余白埋める旅　照彦

仲人と暦をめくる嬉しい日　志洋
悲しみが暦どおりに消え失せぬ　智加恵
暦通りに行けば出世は違わねど　虹汀
西暦で歳を聞かれてお手上げに　浩三
日めくりと対話している小豆めし　典子
戒めと思えば暦めくる癖　妻子
新しい暦へ期待する何か　理恵
年の瀬や暦と人に追われ暮れ　美義
いい話両家持ち寄る伊勢暦　勝視
日めくりの暦に頭叩かれる　ルイ子
カラオケの演歌で綴る歌暦　准一
まっさらな暦へ夢が弾み出す　(渡)富子
義理包むやおら暦が顔を出す　かおり
旧暦を母の達者が守り抜く　一知
空白のニートの暦動き出し　かつ子

佳

四季有情折り目節目を知る暦　美代子
天子様の暦に女系という時世　セツ子
青い鳥翔んできそうな初暦　正剣
テロリストの部屋に仔犬のカレンダー　霜石
暦よ暦明日は何をすればいい　螢

人

拉致された暦が母を寝かせない　忠

地

前向きの暦を闇にした告知　弥生

天

身二つになる日を囲むカレンダー　高橋岳水

軸

暦から今日の感謝と明日の夢

変わる

大橋　鐘造選

仏にも夜叉にも変わる妻といる　(渡)富子
変人が辛口メニューばかり出す　みつこ
心変わりしたとは知らぬネックレス　志洋
異常気象男心も秋の風　かずみ
変わるのを待つより変えていく努力　深雪
成績表見て気が変わるお年玉　いさお
曖昧な語尾に潜んでいる変化　(井)富子
変わり身のはやい男の瘤だらけ　公誠
号泣が笑顔に変わる遺産分け　遠野
生き方を変えて不況に立ち向かう　一壺
まごころが敵を味方に変えました　一粋
鼻ぐすり効いたか変わる風の向き　淞丘
無記名になると本音が目白おし　春雄
三面鏡コロリと変わる厚化粧　愛論
変わり映えないが傘寿の薄化粧　志華子
人生の矢印変えてチャンス待つ　房枝
変り身の早さを競う美男美女　アキ
生え変わる歯や髪の毛が欲しい歳　淳司
天辺の人事に変わる風通し　一知
変わらない人と暮して五十年　シマ子
発想の転換うまく図に当る　一風
切り出したとたん上司の顔変わる　時雄

温暖化地球の異変聞く悲鳴　幸子
腹の底見せた日から風変わる　弥生
泣き切って変わる明日を信じよう　理恵
花の色が変わらぬうちに売り急ぐ　碧
見る人の心で変わる万華鏡　(奥)五月
生活のリズム変わった定年後　玄也
大口を叩いてからの風の向き　充子
昨年と同じ誓いで年変わる　(稲)洋
頂点に立つと見えなくなる根元　霜石
ころころと意見を変える綱渡り　典子
新年へ喝を入れてる晦日そば　重人
初穂料次第で違うお取り次ぎ　哲男
魂を磨くと明日が変わりだす　セツ子
あの時の天使ドロンと魔女になる　朝子
雲ゆきが変わり本音を仕舞い込む　正雄

佳

険悪な空気を変えたハプニング　登美代
建前が本音に変わる通夜の席　美義
変わったこと無くて静かな日が送れ　美代子
万華鏡回せば明日が見えますか　慕情
発想を変えると増えてくる味方　(安)泰子

人

変換キー押して老後を華にする　扶美代

地

朱に染まる心変わりにある余白　柳弘

天

変らねば明日の夢が見えてこぬ　鍛原千里

軸

天秤にかけて変わった自己主張

初歩教室

題 ― 願い

三宅保州

新年おめでとうございます。

新春のお題の「願い」は、今年も皆様がご健康で恙無く川柳を楽しめ、しかもどしどし佳句が作れますことを願って出題させていただきました。今年も「初歩教室」へのご投句のほどよろしくお願い申し上げます。

【添削・批評句】

願い事するときだけの神仏　幸雀
お願いをするときだけは神ほとけ　賢山
無理難題知りつつ願う神仏　政子
仏壇にお願いばかり増えていく　洋子
　四句ともこの発想では同想になり勝ち

原 願いごと願いすぎたか神そっぽ　開子
添 神様もそっぽ向きたいときがある
原 願い事かなえられるか絵馬を吊る　忠子
　当たり前すぎるのでせめて「強がりを言ってもやはり絵馬を吊る」とかの工夫を

原 願望の一部始終の絵馬溢れ　かずみ
添 神様もあきれるほどの絵馬溢れ
原 神無月平和を願う絵馬書き　節子
添 新玉に平和を願う絵馬を書く
原 それだけのさいせん入れて何願う　れんげ
添 お賽銭それっぽっちで何願う
原 一つだけ叶う願なら孫のこと　サキ子
添 一つだけ叶えてほしい初孫を
原 抱かせてよできたての子をこの胸に　のりこ
添 この胸に早く抱きたい初孫を
原 願ってもない良い話舞い込んだ　美恵子
　どんな良い話か詠んでほしい。
原 お願いをするよりお礼詣りする　千華
添 叶ったらお礼詣りをしてますか
原 願い事人には云えぬ胸の内　みね代
添 他人にはとても言えない願い事
　次の三句は上三、中上六等の字足らずです。
原 今朝も幸せ願い床を出る　ミヨノ
添 幸せを願って今日も床を出る
原 五円でも願い事は多くする　那珂子
添 五円でもあれもこれもと願い事
原 叶うならフルムーンは月みたい　弘子
添 フルムーン叶うものなら月旅行
原 初詣合格願いの絵馬躍る　きぬ子
　初詣でと絵馬が重複。中八。
添 こんなにも絵馬神様はどう捌く

原 宮参り親の願いを子に託す　稔
　子に託すで親の願いと分かる。
添 宮参りあれもこれもと子に託す
　次の三句はリズムがぎくしゃくします。
原 明日試験願う寝床の冴えてくる　清
添 合格を祈る前夜は寝付かれぬ
原 足腰強く願いを込めて小魚を　綾添
添 寝込みたくないから小魚を食べる
原 願いはひとりより夫婦で逝きたし　利子
添 願わくば夫婦で共に召されたし
　次の四句は順序を変えると良くなります。
原 低姿勢願いが叶うその日迄　政子
添 願い事叶う日までは低姿勢
原 種蒔いて今年も願う良い花を　冷子
添 花いっぱい咲いてほしいと種を蒔く
原 隅っこで残さないでと御飯粒　百合子
添 残さないでと隅っこの御飯粒
原 願いごと無理難題と分かっても　信雄
添 無理難題と分かっていても願い事
原 ハードルを下げるずるさが身に付いた　萠
添 ハードルを下げれば願い叶うのに
原 古希いまだあれもこれもと願いごと　好
　古希、喜寿等は必然性がないと句が「動く」
添 老いてなおかくしゃくとして願い事
原 柿泥棒お願い熟すまで待って　益子
添 柿泥棒せめても熟すまで待って

原 職探しお願いします不況風　雅代
添 職探しも祈るほかない不況風
原 アルバムのも少しページ増やしたい　和子
添 アルバムに笑顔のページ増やしたい
原 臆病で裁判員は願い下げ　寅次郎
添 頼まれても裁判官は願い下げ
原 予報雨てるてる坊主数増やす　亜希子
添 大雨の予報に増やすてる坊主
原 夕暮れの安全願い散歩する　孝明
添 安全を願い散歩は夜光服
原 円満を願う気配り嫁姑　(村)信子
添 お互いに円満願う嫁姑
原 一日でも笑いの多い日が願い　(臼)信子
添 しあわせで笑顔の多い日を願う
原 願いごと一つになった白い髪　千代子
添 長生きのほかは願わぬ共白髪
原 終わるまで元気で居たい願いだけ　タカ子
添 生きている限り元気で暮らしたい
原 願望は好きな事してポックリと　順子
添 好きなことしてポックリと召されたい
原 逝く時は虫の知らせをあなたには　ただよし
添 虫の知らせで君と別れて召されたい

【少し工夫すると佳くなる句】

神様も苦笑いする絵馬の誤字　満子
佳句ですが同想句が既にあるので残念
原 願わずも直ぐになれるよおばあさん　道子
添 願ってもないのにおばあさんになり
原 夫より十日長生き願います　智加恵
添 俺よりも長生きしろと言う夫
原 願いごとペットもきっと何がある　のり子
添 ペットにもきっとあるはず願い事
原 柳の下へドジョウを祈るウォームビズ　はじむ
添 柳の下のどじょうを祈るウォームビス
原 同じこと聞かされ神もあくびする　時雄
添 同じこと聞かされ神も大あくび
原 二拍手で十もお願いしています　浩三
添 二礼二拍手で十も願い事
原 明日あると思う命に願うてる　映子
添 明日あると思えばこその願い事
原 赤ちゃんの泣いた願いは母わかる　松風
添 赤ちゃんの泣いた願いはわかるママ
原 願いごと絵馬の草書にルビを振る　雅明
添 念のため絵馬の草書にルビを振る
原 十万人願い届かず馬券捨て　たん吉
添 願い届かず十万人の馬券舞う

【佳　句】

モシモシとかわいい願い糸電話　藤朗
平和を願う心に刺さるテロの記事　つよし
平和への願い一筋初詣で　秀四
拉致の子に早く会いたい青リボン　正和
こっそりと陰膳据えて手を合わす　アヤ子
頑なに願掛け守る年女　俊子
厄払い女真面目に年を書く　像山
願掛ける母の一途を見る素足　徑子
親の願い噛み合いません反抗期　幸
お願いと甘えてみせるこれも知恵　起世子
不本意な退職願い書けと言う　こずえ
願わくば海の青さに負けぬ恋　孔一
合掌の両手に余る願いごと　宏子
　　イセ

【今月の推せん句】

いつまでも娘であってほしい父　上嶋幸雀

娘を持つ父親の心情として目新しい句意ではないのですが、それでも心ひかれて涙腺がうるまされます。そして娘を手放すのですね。

願い事神にまかせて寝正月　早泉早人

これはまた何という罰当たりなお人でしょう。しかし、川柳独特のユーモア、風刺、穿ちを兼ね備えた味のある句ですね。

五円玉と万札神はどう裁く　岡本昇

それを知ったら幻滅だったりして…。

千羽鶴万羽供えて震災忌　永田章司

「万羽供えて」にその万感の思いが凝縮されている秀句。折しも阪神淡路震災忌。

【私の句】

歓迎をされてお願い言い出せず
膨大な願書の中に僕が居る

秀句鑑賞

同人吟　牛尾緑良

―12月号から

カルチャーの講師をするようになって川柳がより楽しくなりました。参加されている方は仕事を終えて何かに挑戦したいと、意欲を持った方がほとんどです。内に持つ伝えたい事が沢山あるので、少しお手伝いをすれば次々に句が生れてくるのです。

初心の頃、自分たちも苦労しながら句を生んできました。技巧に憧れたこと、好きな人の句を真似たこともありました。句会での入選を喜んでみても、何が良かったのかも判らないままでした。

カルチャーでは一人ひとりと句が生まれた経緯などを話しながら勉強をしますが、人生の先輩が多いだけに含蓄のあるお話が聞けます。これも会の楽しみのひとつです。

年齢にも経験にも差のあるグループですが、川柳という同じ目標に向かう思いが活力になっています。世代の差も刺激になります。

この世代の差が、川柳を次の時代へと受け継ぐ原動力になるものと信じています。末永く歳月を越えながら。

秋風に乗って南画と黄泉の旅（直原玉青氏逝去）

村上　ミツ子

永く川柳塔誌の表紙を飾っていただいた直原玉青氏の南画。和歌山市の田村南崖氏は先生に師事されていました。昨年七月七十七歳で亡くなられています。天寿を全うされた先生のこと、正に秋風に乗っての旅でしょう。

コスモスもいっぱい恋をするだろう

蔵本　悦子

コスモスの原は風のままに揺れながら、それでいて笑顔を絶やすことがありません。色とりどりの花ひとつ一つが恋にも思え、次に咲く風に乗って新しい夢を捜しに飛び立ちそうにも思えます。

太郎花子残してほしい子の名前

志田　千代

愛子さまの御誕生で女の子の名前に子が見直されています。ツル、カメ（共に私の祖母の名前ですが）の時代もありました。音読では外国人かと思うような名前もありますが、両親の愛はいつの時代も変わりません。

似合っても似合わなくても着る喪服

谷口　義

真っ黒で何の変哲もない喪服ですが、故人への思いの深さをこの黒に込めているのです。歳とともに着用の機会が増えたように思うのですが、体型の変化もあってそろそろ新しいものをと考えています。

ご近所の解体工事マスクする

緑沢　風花

新築の工事現場には活気があって、どんなお店が出来るのだろうか、どのような人が住むのだろうかと楽しみです。解体となるとアスベストの心配をしたりして、ついマスクをしたくなります。

十五分男待たせた今日の贅

居谷　真理子

男と女の駆け引きは毎日どこにでもあるのです。少し遅れただけで怒る人、何時間でも待つことの出来る人。個人差はともかく、待たせても安心な二人の熟れた関係が見えます。

山びこは二十歳の響き持っている

川本　畔

子供のころ以来体験の無い山彦。雉が鳴き鮎や桑の実を懐かしく思い出します。向こうの山から返るヤッホーは、自分の声に山の精気が乗り移ったような響きを感じます。

石段を上りストレス捨てて来る

多久和　敬　子

社寺には結界なのでしょうか、石段が多くみられます。息を切らせて登る行為そのものが自分の意思を試しているようです。一歩ごとにストレスが洗い清められるのでしょう。

輝かせてあげたい老母の髪を梳く

山　本　玉　恵

老いは誰にでもやってくるもの。身なりにも化粧にもあまり気にかけなくなっても、母には昔のような母であってほしい子供の心。せめて髪を梳くことで若い頃の姿を見出したことでしょう。

蝶番雨季も乾季も越えてきた

髙　瀬　霜　石

風に曝された蝶番はやがて錆びてきます。しかし使い込まれたものは、回りは錆びてきてもしっかり役にたっています。熟年期を迎えた人間のように味のある風景です。

元をとるなんて無理ですバイキング

板　山　まみ子

いくらでも食べられそうな気にさせるバイキングですが、しっかり算盤ははじいてあるもの。普通の人にはとても元は取れないのですが、食べ放題だとの解放感が食欲を増し疲れを吹き飛ばしてくれるのでしょう。

悲しみを沈めた空が夕焼ける

山　田　葉　子

夕焼けは今日一日の締めくくりに最も素晴らしい贈り物です。嬉しい日には喜びを、悲しかった日には明日への勇気を与えてくれます。夕焼けの大きさは明日の希望の大きさに他なりません。

着きました母が送ってきた五文字

岩　佐　ダン吉

若いお母さんならメールで連絡が来るのでしょうが、一昔前の母のイメージはかな釘流。絆がしっかり結ばれていた頃の親子が浮かびます。芝居で育った私には「五文字」が痛いほど心に染みます。

大丈夫かいな紳助に似た執刀医

早　川　棲　世

紳助さんに似ていたら安心でっせ。稼いでいるのは腕が良いから。顔の方だけですって。とにかく任せてから心配はしないこと。私の場合局所麻酔でしたから、バックグウンドミュージックのリクエストをしておきました。

木洩れ日を楽しむ冬がくる前に

森　　茜

寒くなってからの光は貴重なもの。温かい気持ちになってきます。老後の光、人の心のあたたかさに特に敏感になっています。

胃の壁を削る上司の怒鳴り声

喜　田　准　一

宮仕えで怒られることには慣れているものの、時代が悪いとも言えずに代表で受ける罵声には胃が痛みます。こんな係も必要ですがせめて自分でなかったらと、少しある肩書きを恨むことにもなるのです。

辛子を効かすすんなり老いてなるものか

楠　見　章　子

老いては子に従えなんて昔のこと。しっかり自己主張させていただきます。昭和という時代を築いたのも私たち、戦後のわが家を支えてきたのも私ですからね。

居酒屋の障子貼りでも手伝うか

土　橋　はるお

酒代のかわりに手伝うつもりはありません。四畳半襖の下張りではありませんが、障子が聞いた世間の愚痴や痴話などを引き取らせていただいて長編小説など。少し酔いが過ぎましたかな。

どの種類のんでも効かぬ風邪ぐすり

政　岡　日枝子

インフルエンザに戦々恐々とするこの頃です。風邪薬の個人輸入も盛んとか。でも本当に風邪なのでしょうか。気の病も風邪に似た症状があると聞きます。

秀句鑑賞

―水煙抄

―12月号から

居谷 真理子

深く腰かけて出直す時を待つ

田中 章子

巻頭を飾るにふさわしい堂々たる句。思いの通らない時は、背筋を伸ばし深く座って、待つ。大人の風格です。

星空が冴えてあしたの予定表

山根 邦代

あしたと平仮名で書かれたのは、きっと楽しい予定がおありなのでしょう。星を見上げて楽しくなって下さい。あしたは晴れます。

大根と女太らせ秋の風

藤岡 ヒデコ

大根と女を並べると何となく艶かしい。それを秋の風で引き締めて、爽やかなおかしみ。

気分転換風ともつれて旅に出る

馬場 利子

鞄を下げた旅行ではなく、散歩のようなお出かけでしょうか。でも気分は「旅」。

風よお先に やはり一人の乱気流

やまぐち 珠美

知的な美人がセンスの良い服装でスッキリ立っていたら、見とれずにいられません。この句も同じ。選ばずにはいられない句、選ばされてしまう句です。

癖のない字ですねえが褒め言葉

池田 岩夫

作者は大阪の方。「字」は「ジイ」と大阪弁で読みたいです。いっぺんに人間の匂いがします。

缶ビール時々中身見たくなる

木村 忠義

笑いました。同感です。コップに注いで飲みなさいの声も聞こえるけれど、缶ビールはプシュ、グビッが基本（?）ですし…。

日本地図貼ると自分の土地に見え

木村 忠義

缶ビールで酔うとこんな気分ですか。地図や地球儀で自分の小さを思う人も多いのに、なかなかの豪気。見習いたいです。

意地っ張りごめん母さんそっくりで

根田 よしこ

若いお母さんをお持ちの人にはニヤリの句でしょうね。私の母は老いています。とてもせつない句です。

放送の今日はおからが売り切れる

髙野 不二

テレビの力はすごい。昨日は寒天、今日はおから。健康志向はいいけれど、右往左往するのはいかがなものか。「おから」がとぼけた感じでいい味出してます。

邪魔物は切る剪定の名において

平井 露芳

角張った詠みぶりが面白い。でもまあ人間の傲慢なこと。教育という名の剪定、リストラという名の剪定、剪定鋏を持っている人がいつも正しいとは限りませんのに。

里帰り母もご飯もやわらかい

河津 正治

久しぶりに親子で食べるご飯。お母さんも年をとられたのか、ずいぶん軟らかく炊いてあります。里帰りしたのは男性でしょう。硬い人間関係に疲れていたのだなあと改めて思ったりして。

ぶら下がるものがいろいろ人の首

前田 三津子

なるほど、ネックレスや身分証明カード、ケータイまで、目に見える物だけでもいろいろぶら下がっています。家族、見栄、肩書等々見えないものもいっぱい下げて、道理で首がまわりません。

■句集鑑賞

『森』

池森子著

政岡日枝子

池森子さんが句集『森』を発刊されました。河内天笑主幹、墨作二郎氏お二方の序文から始まり、土田欣之氏の跋文まで全六三九句、まさに佳吟満載の作品群である。

森子さんとは、鳥取県の足立美術館での出逢いがはじめてであったように記憶する。

それからだろうか森子さんの刺激的であり、説明的でない表現の句を意識して見るようになった。その森子さんの句集と言えば、難解の句が多いだろうと思いがちであるが、全編を通してそうでもない句も多い。

難解句ギリギリの解る句を目ざしておられるということであるから、一読目より二読目と引き摺り込まれる範囲が広がっていく。

一途さの羽音感じてくれますか

句集の最初の頁に作者の写真が載っているが、その声が聞こえてくるような愛らしい一面が窺える句もある。

視野の中にいつも沈めているナイフ
返り血を浴びて戻ったブーメラン
愚かさを愛して降りてきた飛天

優しい口調で、ゆるゆると人の心の中に浸透してくるような句から始まる樹海の章。

新しい鱗で回遊魚になった
切り捨てた端数大きな森になる

作者の決意、思い、心ばえが快く伝わってくる。

情熱はあるかと雪が降りしきる
何度火を騙して眠らせたことか
裏がわの音を拾った首の冷え

女性にある激しい紆余曲折が、時には優しく、時には厳しく詠んである雪の章。

富柳会会長、広報富田林川柳欄選者、富田林市民川柳講座講師等々、その労苦を厭わず、鋭意汗をかきつつ、前進、前進の日々であると跋文に書かれている。女性である自分へ送る一篇かも知れないと、作者も文中で語っている。

半音の違いを聞き分けて夕陽
わたしから朱色を引いてゆく夕陽
情熱を語れば沈めない夕陽

月の章には足早に沈みゆく夕陽の句が多く収められて、作者の詩眼で味わい深い章になっている。

花の章の作品は、おだやかな、柔らかい句いの残る句が続く。

美しい炎をくれた青い薔薇
いのちより重たい彩のクレヨン画
一言の語尾に絡んだままの蝶

火の章ともなると、朱色に炎え上がる言語空間に素晴らしいものが見える。心象風景の表現力、そこに愛がちらりと見え隠れするような、それが川柳への私のスタンスだと森子さんはおっしゃっている。

その殻を脱いだら火柱が上がる
わたくしの裏を流れる赤い河
一本の縄になれなかった藁の鳩尾

森子川柳の深層心理を追求し、また豊かなるものが持つ悲哀ものぞくという風の塔でこの句集は完結を迎えるのであるが、読みごたえがあり、満足感を得る作品群になっている。

そして、森子川柳の原点はというと、何も足さない何も引かない語り口であると明言される。

一文字は愛そして完熟する私
短編のドラマで終わる会者定離
裸木の意地で希望は伏せてある
罪状もなく身の丈ほどの我が塔よ

本社 十二月句会

十二月六日(火)午後一時
アウィーナ大阪

冬本番となった六日、本社句会は参加者101名を得て、定刻開催された。はじめに十一月七日に亡くなった岡本吉太郎氏の御冥福を祈り黙祷を捧げる。

お話は「教育が変わった」と題し副理事長の前たもつ氏。

多様なメディアによる情報過多で、特にこ十年の教育現場とそれを取り巻く環境の激変を指摘し、新聞記事のレジュメを氏の豊富なキャリアで解説する。特に校内暴力の増加、性意識及び行動の変化と、その著しい低年齢化。「今親がしっかりせぬと国滅ぶ」とその解決策に、家庭教育が欠かせぬと警鐘を打つ。通学路のパトロールへの参加等希薄化した人間同士のつながりを取り戻し、親と子と一緒に考えていくことが大切だと専門家の言も引用し、深く頷いた30分であった。

(冨美子記)

月間賞は吹田市の山本希久子さんに輝く。

(司会—玄也・朝子)(記名—朱夏・義)
(受付—義・ふりこ)(清記—直樹)

席題「手」　江見　見清選

味方だと信じた妻も懐手　和夫
てのひらに愛した淡い傷つつむ　寿子
優しさか義理か頼りない握手　理恵
手のひらに乗る歳暮ならありがたい　義子
十字切る手で殺戮の銃を執り　洋
黒い手が絡み合ってる深い闇　萠
近頃は妻の手綱に逆らえず　かすみ
手のひらを合わすと怒り解けてくる　はじめ
晩学に手垢のしみるコンサイス　憲太郎
奥の手を使うと咳が出て困る　義
夢一杯暖めている懐手　集一
観音の手はそれぞれの愛を持ち　愛論
手を抜かぬ仕事が自負の道具箱　正雄
手はあるが使うかどうか思案する　正坊
老いの恋キスするように手を握り　真理子
使えない手にも一滴化粧水　扶美代
手垢のついた愛ですけれど温いです　富子
握ってた手を外されてからの闇　アキ
いつからか僕の運命線がない　つづや
手の上にころがしながらよく言うわ　れんげ
聞き役に回り手の内明かさない　准一
前列で不満だけれど手を挙げる　ひさ乃
手ばなしで喜ぶような嫁が来た　(奥)五月
柔らかい手だねとそれだけの握手　潤子
手さぐりで老母と戦う認知症　朝子
傷跡に触れないように手短に　冨美子
千手観音さて利き腕はどれかいな　恭昌
手つかずの森にいつかは還りたい　茜
点線の余白が多い手の汚れ　弥生
両の手を握り信頼滲ませる　玄也
永田町辺りに怪しげな手品　保州
女房の奥の手でまた年を越す　和夫
佳
手のひらをじっと占い師の吐息　柳弘
お互いが手頃と思いあう夫婦　俶子
身八つ口奥の手を出すためにある　美代子
手のひらが汗ばむかくしごとひとつ　希久子
手加減が出口隠している迷路　求芽
人
手が二本健在ですと車椅子　寿美
地
老いの恋階段へ来て手を握る　耕治
天
母さんの手品笑顔の種を蒔く　朝子
軸
柏手の響きがとんと届かない　洋

兼題「床」　山本　義子選

床下に拾うた仔犬飼うていた　哲男
内緒話聞いてしまった床柱　庸佑
建築法違反の床がきしみ出す　希久子
床の間の軸重文でくつろげず　正坊
出来すぎた嫁が来てから床光る　弥生
糠床の匂いかすかに世話女房　尚士
床下は妻も知らない古酒の蔵　直樹
畳の床で転んだことは内緒です　洋

悔しい時床光らせる癖がある　扶美代
苗床へ豊作祈りつつ植える　萬的
修羅堪えて息子へ譲る床柱　光久
リフォームはさせぬ旧家の床柱　倫子
もてなしの心が通う床の軸　弥生
父の背な継いで艶出す床柱　一風
床上げに笑い袋の内祝い　昭義
床の間が消えて離婚が増えている
苗床でそれぞれ個性のばす苗　俶子
空びんが並ぶ万年床の部屋　准一
糠床に母のぬくもり母の味　みつ子
病床も口は達者なおじいちゃん　(奥)五月雅文
床の演技鮮やかに舞う里神楽　瑠美子
床の間の飾りになった茶の道具　能子
ピカピカに床を磨いてウツ晴れる　冬葉
髪を梳く姑に床上げ日も近い　ひさ乃
言い分けもせず黙々と床柱　集一
夢抱いて苗床で待つ花の精　重人
床ずれはさせぬ介護の手がまるい　ダン吉
床上げの朝猫までも笑ってる　いわゑ
淋しくて床をピカピカ光らせる　洋
床柱に亡父の哲学生きている　蕉子
床の間の菊一輪にかぶとぬぐ　千里
マニキュアの手でぬか床をまぜている
佳
活断層の上に寝床を敷いている　保州
ぬか床でバイオあやつるおばあちゃん　見清
この疵はどの子が付けた床柱　孝一
病床の妻に無骨が粥を煮る　尚士

百歳がちょこんと背負う床柱　直樹
人
父の喝まだ床の間に響いてる　ばっは
地
ふるさとに板の間がある手毬歌　寿子
天
赤ちゃんの床はわが家のど真ん中　たもつ
軸
床三味線デンと響いて京師走

兼題「損」　桜井千秀選

尽くすこと損と思わぬ好きだから　文保州
損ばかりしても楽しい小商い　(志)千代冨美子
口に出し言える損ならしれている
勇み足割に合わないくじを引く　憲太郎和夫
損得を抜きの恋ならしてみたい　朱夏
割勘と聞いてピッチをあげ始め　俶子
書き損じのハガキばかりが溜まる冬　久峰
おさがりばかり次男は損な役まわり　尚士
損得にこだわり大魚取り逃がす　尚士
損ばかりする人柄を褒められる　潤子
損得を見極めてから手を挙げる　朋月
二個セット売り手は損をせぬ特価　和夫
損得は計算しないボランテイア　弘風
損したと泣いて儲けるまっちゃ町　セツ子
割り勘に損を承知で参加する　理恵
人間で居たくて損をして生きる　重人
損得勘定できなくなってから夫婦
北浜に払った月謝高すぎる

長の字がついて出費がふえました　ばっは
健康を損なうほどは飲まぬ酒　瑠美子
味に凝り損を承知で小料理や　ばっは
口車すぐに乗るから損をする　准一
損得は抜きと言いつつある打算　高栄
鷹揚な彼でいつでも火の車　柳伸
誘われて損を承知で旗をふる　鍾造
損な役重ねた人のいい笑顔　たもつ
目の前の損は笑って生き上手　崩
情に竿さしてとことん入れあげる　柳伸
貸し倒れわかるが苦境見逃せぬ　ルイ子
正義感溢れて損は気に止めぬ　准一
損得で仕事はしない道具箱　正坊
世の中に戦争ほどの損はない　楓楽
佳
現世の損は冥土で取り返す　鐘造
損な役果して空が広くなる　ダン吉
損したと言うてるうちは大丈夫　見清
正面に坐っていつも損をする　義
損のない話だ阿呆になっておこ　寿美
人
損しない儲け話に落し穴　崩
地
空は真っ青損を承知の靴を履く　みつ子
天
損得はつゆ考えぬ花の種　楓楽
軸
衝動買いの損はあっさり諦める

兼題「粘る」　都倉　求芽選

粘る眼の蛇が這うてる住宅地　あやめ
何処までも粘り通せと母の鈴　きらり
無言の行ねばる妻には負けた僕　弘風
毎日が本気いのちのある粘り　弥生
粘り強さほしいと思うＤＮＡ　茜
時効まで粘りに粘る老刑事　正坊
鍵のあるお部屋で粘る不発弾　れんげ
粘り気がなくなったのは歳の所為　玄也
粘っても動いてくれぬ脳になり　いわゑ
自然薯に粘り強さを教えられ　(久)千代
健康に良い食品はよく粘る　東吉
セールスに粘り勝ったが恐かった　美智子
納豆の糸のおかげで靴が鳴る　ばっは
血が粘りお医者嫌いが酢を舐める　一歩
人生の中ほど粘ばねばの坂がある　扶美代
粘り抜いた汗を少々自慢する　萠
まだ粘る面白い事ありそうだ　楓楽
粘らずにポックリ逝ってほめられる　寿美
夕日背にどうやら出来た逆上がり　瑠美子
あくびしたとたんに粘り消えて行き　朱夏
粘ってるうちに時効になるだろう　寿子
ぼこぼこにされても粘る道がある　朱夏
歳かしら粘りが消えた指の先　千恵子
何となく粘々したもの苦手です　みつ子
じっくりと粘る灯りが見えるまで　富子
根気よく綻び縫って共白髪　義子
モナリザの粘り勝ちですあの視線　瑠美子
粘ってた割には離婚早かった　アキ
粘っこい風に縁切り状を出す　見清
いつだってまあええやんで済ます人　孝一
あの時の粘った妻がこうなるか　公誠
妥協せずひとり粘って生臭い　佳
黙秘権守り続ける桜貝　洋
粘るのは止そう恋は蜃気楼　柳弘
粘ったらガンが大きくなりました　かすみ
楢山へゆっくり粘るロバの背で　愛論
粘り勝ちやっと自由になりました　義
粘ったことだけを母さん褒めてくれ　人
粘られた人といまだに暮らしてる　ダン吉
まだ米寿も少し娑婆で粘ろうか　地
引き分けに持ち込む粘り褒めてやる　天
　　軸

兼題「旅」　宮西　弥生選

駅弁を楽しみにして旅を買う　雅明
一人旅のんびり紀行は文語文　哲男
石炭の匂いが好きで大井川　泰子
お茶漬けがうまいと夫旅帰り　さくら
トンネルに入れば窓を閉めた旅　美明
旅慣れた鞄の中のワンカップ　恭昌
私からわたしに送る旅土産　舞夢
ひとり旅昔ふたりで来たところ　倫子
観光もせずにマージャン打っている　朋月
据え膳にあきて候妻の旅　潤子
もう少し歩いてみよう古都の旅　美明
まだまだねこの世の旅を続けます　れんげ
性格の不一致の人もいるツアー　義
音のずれほどよくあって二人旅　幸雀
二泊目になると気になる植木鉢　かすみ
旅支度している時も旅のうち　(志)千代
五感の錆少し落としにひとり旅　洋
よっこらしょどっこいしょと続く旅　たもつ
大阪のオバちゃんガイドよりしゃべる　見清
周遊券の表紙残して旅終る　雅文
高速を走り続けただけの旅　准一
旅先の酒は地酒と決めて出る　弘風
旅の空ふっと優しい顔になる　ダン吉
アテンションプリーズここから日付け変わります　雅文
無人駅ドラマ始まる一人旅　孝一
羅漢さまにほほ笑み貰う旅ひとり　潤子
温泉と地酒の他は要らぬ旅　理恵
朝市の蟹がウインクして困る　重人
白い画布旅の構図を決めかねる　(久)千代
他人様に言えない旅もして秘密　准一
時刻表繰れば心は旅に出る　楓楽
人生に句読点打つ旅に出る　はじめ
旅にいるみな故里の山に似る　ダン吉
　　佳
不器用な旅であったが嘘はない　たもつ
しがらみから逃れて風になれる旅　セツ子
透明なこころで終える遍路旅　楓楽

定年の旅に仮面をつけ変える　憲太郎
地の果てへ風を見にゆく冬の旅　朱夏
人
他人同士の旅がこんなにおいしくて　ぱっは
地
旅をするとても小さな憂鬱と　扶美代
天
レールから食み出ぬ蟻の旅続く　(久)千代
軸
いい汗とおもいで分けて旅終る

兼題「握る」　河内天笑選

ハンドルを握らない日はない生活　螢
泣き所握って強気くずさない　久峰
なつかしさ言葉にならず手を握り　春蘭
最後まで握ってあげるあなたの手　理恵
握ったら鉄骨やはり細かった　蕉子
握ったら離さぬようにしています　重人
心から握ってくれた手の温み　はじめ
切り札を握った亀は慌てない　冨美子
握手した手の温もりを信じよう　なぎさ
タミフルを握る医者には付け届け　則彦
振り上げた握り拳が迷ってる　千恵子
ポケットの中で行き場のない拳　ひさ乃
お互いの弱み握ってやじろべえ　萠
三度目の妻にも財布握られる　倫子
吊革をしっかり握り十二月　美代子
弱点を握られてからイエスマン　光久
握手には慣れてないので困ります　義
赤ちゃんの握りこぶしが天をつく　れんげ
もみじの手宇宙の未来握ってる　ふりこ
すぐ握手する人ですと教えられ　春蘭
握手して両国首脳物別れ　保州
握手する頬が引きつる日本海　淳司
DNAに動かぬ証拠握られる　洋
惚れている弱みを妻に握られる　尚士
札束を握るともたげだす邪心　玄也
転んだら大地と握手して起きる　真理子
握られた弱味で君と深くなる　ダン吉
しっかりと拳握って反戦歌　楓楽
投票はしないが握手だけはする　昭
握手した数だけ票が集まらぬ　いさお
にこにこの妻に手網を握られる　朝子
どさくさに好きなおひとの手を握る　美明
佳
ロボットが握った寿司に角がある　萠
うっかりと握り返したくされ縁　柳伸
ウフフフフこれでハートを握ったわ　修
トップより社を握ってるフロッピー　俶子
負けじ魂握り拳の形して　理恵
人
握手して敵か味方かたしかめる　扶美代
地
妻の鼻何か握っているらしい　俶子
天
両手に欲握ってるからよく転ぶ　山本希久子
軸
財布握らせておいたら乱れない

平成17年度本社句会の月間賞杯永久保持者は山本希久子さん（吹田市）に決定しました。

平成17年度本社句会皆出席者（順不同）

穴吹尚士　阿萬萬的　石堂潤子　安達はじめ
石森利昭　稲葉冬葉　岩崎公誠　太田とし子
榎本舞夢　大内朝子　太田　昭　太田扶美代
柿花和夫　鍛原千里　河内天笑　奥田みつ子
河井庸佑　川端一歩　吉川寿美　鴨谷瑠美子
木本朱夏　黒田能子　志田千代　小泉ひさ乃
玉置重人　中井アキ　長浜美籠　古今堂蕉子
西内朋月　西出楓楽　藤井正雄　滝本きよし
板東倫子　坊農柳弘　前たもつ　飛永ふりこ
松原寿子　村上玄也　森　茜　冨山ルイ子
森下愛論　山田耕治　吉村一風　中村れんげ
米澤俶子　平嶋美智子　宮本三喜夫
山岡冨美子　（48名）

身近な「怒り」の川柳コンクール

正義の立場から感じるいきどおり、身の回りの出来事に対する明るい怒りを川柳にして下さい。

締め切り　1月31日
投句用紙　1枚400円　2枚セット600円（何句でも可）
発表　3月31日（HP・入賞者は本人直接）
お問い合わせ（主催）〒678-0239赤穂市加里屋68-9
赤穂商工会議所内　TEL0791-43-2727

◎お知らせ―平成18年の『川柳塔』発送は、各前月27日とします。（ただし8月のみ26日）

■句集紹介

福島万年川柳句集『百花園一』

小島蘭幸

福島万年さんが平成十七年十一月、句集『百花園一』を上梓されました。題字と一番好きな作品〝ありがとう指に止まった赤とんぼ〟を三宅不朽氏が揮毫されています。跋文は藤解静風氏が書いておられます。可愛くて楽しいカットは小さな四人のお孫さんの作品です。私は序文に万年さんは最初から古武士の風格を持っておられた…と書きました。古武士の風格『百花園一』は繰り返し繰り返し読みたくなる一冊なのです。

万年さんはあとがきの中で〝自選句集のことなど考えていなかったのですが、医者から告知を受けてこの辺で区切りをつけるのも好いかと思いました。句歴五年や六年で佳句など有りませんが自分の好きな句を拾ってみました…。〟と書いておられます。

平成十二年十一月、竹原川柳会に入会、平成十四年十一月に川柳塔同人に推挙された万年さん。

癌告知天空青く青く澄み　万年
癌告知妻が優しくなりました　〃
癌告知癌で死ぬとは限らない　〃
ものがみな愛しく見える茜雲　〃

川柳を始められてまだ五年なのです。五年なのにこの深さです。これはやっぱり古武士の風格です。

あたたかい字で題字と作品を揮毫された三宅不朽氏は、川柳たけはら12月号にその熱き思いを作品にされています。

百家園一私の字です灯を供え　不朽

人間性あふれた作品を抽出して、どうかこれからも個性ゆたかにあなたらしい作品を発表してください、と跋文を書かれた藤解静風氏は次の作品を寄せておられます。

柳友はみな続編を持つ百花園　静風

竹原市のスイミングクラブで出会った、故楠美佐雄氏に奨められて川柳を始められた万年さん。楠美佐雄氏の長女国兼千代美さんは、句集『百花園一』を手にして次の昨品を祝吟として寄せられています。

百花園亡父に教えてあげました　千代美

元校長先生だった万年さんの川柳の眼は、とても厳しくて優しいのです。

大地の子ポテトチップスにはならぬ　万年
馬鹿だなあ人間だけが傘さして　〃
議事堂に雷一つ目を覚ませ　〃
カラス舞う豊かな国の園遊会　〃
寺焼けて貧しい人に寄進帳　〃

そして

草いきれ男根ふいに隆々と　万年
キリストも釈迦もおわすか青テント　〃
鶴嘴にガチリと当てた僕の骨　〃
自画像にずっと見られている絵描き　〃
終えてよし永らえてよし木を植える　〃

これらの作品に万年さんの明日が見えて来ます

鉄塔に登れば星に手がとどく　万年

海と山と鉄塔と星、小さなお孫さんのカットが見事です。亀、花と蜜蜂、野仏、将棋の駒、甲虫、花と蝶、四つ葉のクローバー、モアイ像、メダカ、蛙、砂時計、波、おたまじゃくし等々…。

一つずつ咲かせて夢は百花園　万年

てのひらサイズのあたたかい句集『百花園一』は二、三……と夢を咲かせていくのです。

百花園いつも私のポケットに　蘭幸

百花園一雨が降る雪が降る　〃

花池柳壇

毎月24日締切・30句以内厳守　編集部

川柳クラブわたの花（前月分）　井尻　民報

水泳のタイム一秒何十年　正春
飽食へこだわりの文字釣りに来る　はじむ
かなづちで人生うまく泳げない　ミツ子
引き際の美学こだわる王の椅子　君江
米寿でもおしゃれこだわる粋な母　宏
背なを押す妻と人生泳ぎ切る　一風
こっそりと出掛け帰りは虎になり　欣子
ここち良い本音話せる人に逢う　幸枝
いつの日も川の向こうに青い鳥　晴美
根性も情熱もまだ拳なか　俊子
ハイオクは高く付くねとカー自慢　浩三
短い言葉ちょっと宇宙へ野口さん　㈱たえ子
裏窓はストレス捨てる時開ける　㈱妙子
明日咲く蕾は微熱抱いている　ますみ
格式にこだわり過ぎて赤字増え　敏男
夜の灯を巧みに泳ぐ赤い爪　いつふみ
こっそりと扉が重い午前様　義明
越えて来て今は笑顔にするパワー　ふりこ
こだわりの晒のおむつひらひらと　知佐子
古池に人を引き付け蓮の花　美代子
あるだけの鉛筆けずりまだ三時　民
こだわりはおいしいものを少しだけ　宏至
一段と熱弁になる酒の席　愛子
誰からと着信聞かれ目が泳ぐ　和子
暗やみに岬の光島かすむ　博子
星の恋人魚の恋も知る灯台　耀一

川柳塔のぞみ　播本　充子報

あみだくじ当って私もらわれた　那珂子
あそび上手な男がつくるあみだくじ　由一
一石の波紋をとくと御覧あれ　美枝子
風船にギリギリ入れる免罪符　晩秋
ギャンブルの手始めになるあみだくじ　和香
アミダクジ介護をタライ回しする　美代子
片べりの靴を一足残しとく　清
頑固な風船に泣きだしたほっぺ　由香
あみだくじ大好きと言う千鳥足　ちゑ子
ハンドルを切ろうとしない一人ぼち　由紀子
人生を変えた合コンあみだくじ　英雄
顔のたるみを引力のせいにする　哲代
あみだくじ今日も私が鴨だった　妻子
耐えて待つそんな日もあり妻の櫂　賀世子
あみだくじ性に合わない勇み肌　久峰
働いた悪事は記憶の中にない　勝
ハンドルを死ぬまで離さない女　朋月
雑談に仕事のヒント掴み取る　あやめ
男運いつも外れるあみだくじ　朝子
商談のきっかけ六甲おろしから　方子
除雪車が通ると雪の山がある　順風
A型が丁寧に書くあみだくじ　康子
風船が風とダンスをしています　嘉恵
風船が視線を集め空を行く　育子
風船は月まで行くと風に乗り　リツ
折り返し地点これからは遊ぶ　文子
誕生の次は柩のあみだくじ　花王子
心ない一言風船が割れる　充子

ローズ川柳会　山崎　君子報

わたしの名晴れ多かれと名付けしか　てる
迷い晴れ急にお腹が空いてくる　みつ子
四季巡りやっぱりうまし国日本　哲子
金木犀香りいっぱい敷きつめて　トミエ
通信簿やっぱりこの子私の子　貴代子
晴れた朝威張るかのよう秋桜　孝一
元気ある内はやっぱりパスポート　美籠
予報雨それでも晴れる秋の空　武庫坊
きょうと違うあすを目指しているのだが　年代
秋晴に鼻歌まじり布団干し　義子
金木犀秋はやっぱりとなりから　君子

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

一つ知り二つ忘れて朽ち果てる　賢
古ボケた旗でも風を待っている　あきら
歯を取られ歯科医を恨み粥すする　放任
躓ずいてから人生が見えてくる　八重子
長電話切った後から思い出す　いさむ
亡き母の温もり今も手に残る　よしみ

義姉よりの早掘りの芋蒸す匂い　貞月
金メダル陰に流した血の涙　文仙
義理チョコがとろり溶けてる夏に入る　ひかり
喜ばすコツを覚えた孫の芸　初恵
給料日まあるい声の妻が待つ　寿々女
子は街に親は老いても過疎に住む　治延
取急ぎ書いて切手を貼り忘れ　かおり

川柳塔おおとり　鈴木一弘報

広告の裏すらり川柳書けてくる　道子
紙風船どこまでとぶか見えぬまで　清子
お断りしますの手紙もう慣れた　真一
ひらめいてもどかしいけど紙さがす　ヒロ子
画仙紙と墨とが和合みちたりる　(国)和子
白紙に産声しるすくろぐろと　一弘
心中を紙にしたためそっとだす　知恵
お札という紙で懐暖まる　幸次郎
紙こより作って綴じたその昔　(岩)和子
生活に紙のお札が追ってくる　小生
幸せへ入籍届け濃いく書く　以和万津
和紙の書に日本の心会得する　登美
千変万化紙も上手に演技する　黙光
大切な手紙の文字が褪せてきた　風花
動揺を隠し切れないうそ一つ　艶子
たかが紙辞令一枚荷をまとめ　由多香

川柳塔みぞくち　小西雄々報

コーヒーも抹茶も好きなお付き合い　智恵子
ロマンスが芽生えてきそう喫茶店　和代
午後の居間コーヒータイム陽の光　公美枝
辛酸をなめた人生そつがない　豊枝
煎りたてのコーヒー入れる至福時　弘子
相槌を打ってコーヒー館を出る　鈴枝
コーヒーの香りもほろり秋時雨　信雄
待ちぼうけコーヒー二杯目をたのむ　群司
休日はコーヒータイム家族の輪　静江
自販機のコーヒーを飲む味気なさ　正光
鶴と飲むコーヒー館は暮れいそぐ　雄々

川柳大阪　高木信酔報

さりげないあの日の言葉抱いたまま　民
酒止めた何度聞いたか数知れず　五月
べっぴんが起こしてくれるまでこける　利昭
くれないの夕日に染まる里心　朝子
子は平然親が泣いてる迷子室　東吉
勤勉に棚田を守り秋を待つ　章久
森抜けて染まるみどりに癒される　一風
染まりたい友と仲良くいる安堵　芳香
勤勉な蟻がひとりの夕御飯　ダン吉
精勤な男演じている仮面　美籠
鍵穴の向こうにあった迷い道　孝一
染まるまで幾度くぐるか藍絣　タカ子
最強の国でも脆いハリケーン　隆司
赤ちゃんに握手してでも票欲しい　いつわ
入らねば損するように言う生保　いっふみ
いい顔になった黒髪に染めてから　笑風
それからの話に気の抜けたビール　柳弘
九十歳戦争話もうしない　三十四

佳句地十選

（12月号から）

津守なぎさ

国政も選挙もショーにするテレビ　棲世
たこ焼きを食べて浪花の顔になる　昭
キーボード叩いて平和訴える　節夫
試供品だけで間に合う妻の顔　柳弘
水汲みの苦労を知らぬ蛇口です　昭子
雑音を抱え込んでる日本海　佐余
あの人もこの人も立て丸くなる　(辻)和子
いいことは信じたくなるテレパシー　圭一郎
星空の魅力に抱かれ動けない　喜美子
御転婆を優しく替える母子手帳　(奥)五月

片道のキップの中にある大志　重人
ひとり酒よりもしんみり語り酒　一歩
汗かかぬ奴ほど秘訣聞きに来る　川童
三日間ゴミ見なかった地球博　司
一服のドリンク老いの背を伸ばし　洛酔
断わりも命がけです変な世だ　喜楽
さわさわと秋の気配のキビ畑　鉄心
転勤のたびに友あり地酒あり　青道
青空が未知に飛び立つ背中押し　柳昌
迷子にはならない貴方いてくれる　美花
先頭がこけても私びりのまま　まつお
無印の男で家族みな平和　信酔

あかつき川柳会　山本柳昌報

目覚めると妻が突然消えていた　明子

ドラ息子が突然天女連れてくる　シマ子
忘れかけた頃に襲ってくる震度　良知
あんた誰妻に突然言われたら　希久子
突然の告白に酔う青い月　まつお
浮雲よわたしも雲になっている　いわゑ
先急ぐあまりに千切れ雲になる　扶美代
お遍路の足を急がせる茜雲　たつお
雲つかむ話の好きなおじいさん　みつ子
雲掴む男あんぱん食べている　義
女仙人は真っ赤な雲で来る　一筒
雀たちイエスマンにはならないで　勝弘
精一杯自己主張する雀の子　光久
雀の子そこのけそこのけ戦車くる　康男
プライドがあるから踊らない雀　正坊
今日生きる雀はきっと必死です　たもつ
九条を守ってほしい雀たち　美花
お地蔵さんと身の上話する雀　義子
うろうろと追いかけている青い鳥　重人
人生の放浪包む母の森　和香
流れながれてふる里に戻る葦　祥昭
放浪だ環状線を二周する　楽生
片減りの靴さすらいの日は言わぬ　美籠
温暖化ハリケーンがあばれ出す　富美
千人針思い出させる世の動き　美智子
彬の碑つくるロマンを追いかける　一歩
芸に生き文化勲章どっこいしょ　孝一
腐敗した市政浄める選挙戦　正
戦争の神社で不戦などと言う　ダン吉

川柳ふうもん吟社　夏目　一粋報

離農した日から父の背丸く老い　洋々
明日の風読んでダルマは動じない　一瑶
洗濯機夏を丸めて放り込む　寿子
小さいこと忘れなさいと海が言う　一京
信管を抜いた正体妻だった　諏訪男
裏口へ回るダルマに足がない　行男
ふるさとを唄うといつも涙ぐむ　節子
やっとこさ逃げ火ダルマに抱き付かれ　蟹郎
あやがないと言われぬように飯を食え　秀四
神様に届く梯子を探してる　雅女
丸めるか丸めないのか力の差　茂登子
天下取る野心ダルマにこめてある　無限
見て見ぬふりをしてあやがない大人達　美雪
談合を丸める役で天下り　毅
震度七地下に正体埋めたまま　はつ江
定年までは優しい顔の妻でした　秀夫
想定外の定退離婚あやがない　孝男
胸つき八丁凌いだ汗が心地よい　昌鼓
老夫婦丸めてくれる人居ない　孝子
総スカン食ってダルマになっている　金祥
正体は何であろうと銭に惚れ　志げ緒
野暮用が読書の秋にしてくれぬ　美恵子
正体を暴いたとたん鬱になる　房江
枯尾花したたかな顔見え隠れ　春名
改革の正体誰が見届ける　圭一郎
正体は内緒我が家に来るサンタ　義徳
ラブレター丸めてポンとゴミ箱へ　益子
ダルマ市眼入れ主をじっと待つ　由美子
叶わぬと片目のダルマ置いてきた　善夫
死火山になって正体隠してる　一粋

竹原川柳会　時広　一路報

折り返し地点だ昼寝でもするか　蘭幸
節目から悲喜交々の熱い詩　正宏
旅を終え今日を節目に前をむく　慶子
すばらしい新芽が伸びてきた節目　房子
がっちりと古希の節目に箍を締め　節夫
苦労したんだね節目節目の竹の乱　笑子
節目ですステップアップしていこう　民恵
ふり向けば節目節目にあった愛　笹舟
バリカンが活躍親子良き時代　汎美
播いた種だもの刈りとるのも私　淑子
頑固親父恋の芽生えを刈りたがる　幸子
貧乏神刈りたいけれど逃げ回る　輝恵
跳べそうでとべない夢の中にいる　寿枝
天高し地球の丸さ信じたい　比呂子
備前焼の茶碗おかわりしたくなる　史子
一日の疲れを癒す熱い風呂　千枝
傷を持つ二人で支え合っている　菁居
古傷はここにもあるよ内視鏡　規代
傷いやすまあるい家族の中にいる　敬子
傷ついたそれは昔よ木守柿　栄恵
晩年のドラマは無傷完と書く　力
傷ついた地球が熱を出している　万年
きずをもつ男の目差しが深い　静風
無傷ほど大きな傷はあるまいに　半覚

節目節目にいつもの海が見える丘　一路

川柳ねやがわ　森茜報

母さんは子の顔色をすぐに読む　日出子
表情を読んで核心衝いてくる　庸佑
手の内は読みつくされた蟬の穴　ただよし
聞き上手人の心もうまく読む　一風
飾っても心上手に読む鏡　朝子
パン食いへ飛び入りしてる古希傘寿　かすみ
胎動を感じた日から母になる　高栄
無理しすぎ医者より先に言う鏡　たもつ
家中が鏡だったら狂うだろう　とし子
湯上がりの鏡に私はまだ若い　弘風
子は鏡先生は家庭お見通し　一笑
若いころの私を知ってない鏡　恵子
鏡に映るわたしほんとのわたしだろうか　弘一
さみしくて鏡を出してみる女　鈍甲
厚化粧わたしが消えてゆく鏡　集一
不運が続く朝　鏡の曇り拭く　亜成
和装展楽しむだけと予防線　頂留子
男より女人生楽しそう　修
楽しみはこれだけですと食事中　利昭
いい踊りルンバ楽しむ共白髪　忠央
原色を楽しむ琥珀色の肌　茜
明日のため楽しさ少しあけておく　桂作
鍵盤の上を楽しむ白い指　洋
転ばぬ先の杖見当らぬ不安な世　一炊
マドンナと言われて今は総入れ歯　さち子
この人のそばに安心して座る　ルイ子
腰痛に犬が合わせる散歩道　れい子
ハルとナツ同じ世代で涙する　勇太朗
愛ちゃんも太郎もいないクラス会　仁清
失敗をしてから人は立ち止まる　博泉

高槻川柳サークル卯の花　瀧本きよし報

老い二人以心伝心口利かず　祐作
石を抱く心の底に不発弾　美義
こころまで汚れていない風の中　石舟
ブランドに凝って懐寒くなる　稲子
陶芸に凝ってガラクタばかり増え　萬的
凝りすぎて先生が手を焼いている　求芽
肩の凝る話の輪からそっと抜け　庸佑
肩が凝る見ると閻魔が圧さえてる　きよし
凝り性の質われながら持て余す　晴美
不作法な慣れぬ横文字あっち向く　とし子
満員の車内で膝を組むブーツ　活恵
胡坐なんかかいていません座禅です　昭
駄々っ子の不作法親が笑われる　武史
お化粧が済めばメールをする電車　重人
見栄を張り冷や汗かいている茶室　美籠
ブランドにうとい女房で助かった　勲弘
運動会撮った写真に孫居ない　義一
世の中にうとくてカモにされている　八斗醸
商才には疎いが父は鍋奉行　孝一
レストラン夫が美人と入って来た　照子
カネ女ハプニングありご用心　治三郎
小遣いは足りてますかと妻が問う　尚士
ハプニングあって人生おもしろい　宏章
ハプニングにもさすが老優演じきり　公子
世なおしにひらきなおってまた一歩　信酔
ぽとりぽとりどこかで噂洩れる音　秀夫
決断をつけるにあなたまだ若い　典子
一本の薬に二本の手が伸びる　砂輝守
はしゃいでる夫の顔は見たくない　かおり
日だまりでこの先のこと後のこと　節子

川柳塔唐津　仁部四郎報

過去はみな許しています再生紙　晴翠
知らんぷりで晩酌の量見てる老妻　勝視
供日酒いっぱい機嫌が肩をくみ　實
一人前でなくても代議士にはなれる　正剣
大の字で深呼吸する青畳　蜂朗
子や孫に望みをつなぐ順送り　水笑
曳山の囃子始まる神無月　虹汀
心眼と対話真冬の天の川　四郎
お詫びしたことを忘れて反り返り　輝夫
横顔を撮るなと怒るダンゴ鼻　高明

尼崎尾浜川柳会　山田耕治報

つきあいへ上手に酔えるウーロン茶　晴美
お転婆が奇跡のような玉の輿　五月
奇跡です瞳輝く退院日　よし子
里の秋木の実も音符になり踊る　里江
キャリアなどどこへとんだか不況風　イサミ
かんたんにキャリアがころぶボクシング　亀与子
陳謝するキャリアを見てるノンキャリア　耕治
ノンキャリは宝わが社の生き字引き　勝巳

退院を奇跡と思う空の青　美代子
奇跡をと祈る術後に陽の光り　正治
宝くじ当りタコ焼五舟買う　きよし
奇跡だな庭に松茸生えている　朋月
籤引きの先に潜んでいる奇跡　孝一
楽しみにルス電聞けば訃の知らせ　江美
究極の奇跡わたしが生きている　桃花
まだやっていたんでしたか赤い羽根　全彦
冬鳥の分け前にする木守柿　鹿太
ストローとしんみり悩み聞いている　美籠

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

龍宮城あるかもしれぬ海の底　はるみ
なんとなく感じた視線だったから　恵美子
井の蛙眼鏡の奥に海を見る　好栄
転んでもダルマのように起きられぬ　ちよえ
なんとなく眠れぬ夜の雨の音　かつ子
味噌汁はやっぱりうまい母の味　伸子
平穏なこの海時に人を呑む　聖子
玄海灘あの海の荒れ忘れない　博利
迷うときやっぱり聞いてくれる海　清泉

川柳塔きゃらぼく　福代　天雀報

私のこころの太陽孫五人　玲子
エスカレーターどなたも髪が薄くなり　天雀
物騒な世間に鍵をかけておく　亜弥
国会の熱気涼しい風を待つ　恵子
明日ありと分相応の虹を描く　瑞枝
寝もやらですず虫の声聞き明かす　章江

八十路坂神から借りた衣着て　春枝
風になってしまった少年のいない町　ふみ
一日の塩例えれば命綱　日枝子
秋やよし鯛にタケメシ金山寺　やえ
ペット連れ町内じゅうを見て回る　那珂子
椅子ひとつ落葉の中に置いてある　千代
目覚めの呼吸ありがたいなと思う日々　なみ
看板が無言で語るそばの味　スミヱ
イラクから翔んできたんだ赤とんぼ　繭
星数えわらべに戻る日をかぞえ　てい子
小さく生きて笑いが欲しい部屋の中　初枝
亡夫のバッグに愛車のキーと免許証　紫泉
生き甲斐を探して歩く老いの坂　晶子
シソの穂が太ったカマキリ連れて来る　寿々子

京都塔の会　都倉　求芽報

大気汚染　河童の皿もボトル水　きよし
人知れず咲く野菊にも香りあり　鹿太
朦朧と作句離さず黄泉に旅　ふりこ
追加した人生にあるバラの花　輝美
赤とんぼ季節をタッチする姿　和友
何気ないタッチに妻が身をよける　則彦
絵手紙に軽いタッチの秋の花　萬的
老舗継ぐバトンタッチの男の背　百合子
届かない高さへ柿が熟れている　典子
高望みしてはいないが縁がない　庸佑
五票の差お高くついた反対派　美義
生れつきではないらしい高い鼻　尚士
行楽へガソリン高が気にかかる　満子

高らかに余生謳歌のファンファーレ　求芽
先へいくほどハードルが高くなる　啓子
人情にころりと惚れた山の宿　正坊
秋の実にころりと出会う茶碗蒸し　昌乃
ころりころりと足弱くなるから歩く　春
ライバルがころりといった拍子抜け　欣之
変わり身が早くてうしろ歩けない　葉子
コロリとは折れぬ自分に苦笑する　宏子
スーパーに夫が来れば追加増え　益子
だんだんと追加のくすり増え悩む　英子
追加した案から会議荒れ始め　牛延

長柳会　村上　直樹報

妻という最後の味方無二の友　直樹
安倍さんよみんなが味方頑張って　佐久治
味方こず刺客あらわれ総崩れ　輝子
叱られて夜の巷をうろうろと　ひろし
院内をうろうろまわり博学に　明信
二段腹お目出度ですかに照れ笑い　たけし
目の前の欲にくらんで地獄みる　もこ
三十路過ぎ運を味方にする見合　孝彦
夫婦です騙し騙され芝居する　マサ
ああ恐い妻の味方のオンナ達　不二雄
大胆と無謀はまさに裏表　靖博
ボーナス日父の味方に早変り　史
百歳へ夢ふくらませ散歩する　正一
セールスのふくらむ鞄汗にじむ　正子
末っ子は母を味方に我を通す　武男
前向きに生きて運命味方する　和代

敵味方心ゆるして囲む鍋　靖子
神無月味方にしたい七福神　よしお
無器用を味方につけて無為徒食　芳野
失意の日うろつく先は縄のれん　敬二
煩悩の迷路うろうろ果てしなく　幸雄
詰め物で胸ふくらませフラダンス　美代子
揺り籠の夢がふくらむパパとママ　けい子
クラス会幸せ芝居する彼女　正博
古里を出てうろうろとちぎれ雲　正美
ふくらんで風に乗りたい夢風船　三和子
募金箱愛の心をふくらます　冨美子
敵味方その境目で軋む音　和子
私のもボインでしたねねえあなた　淳司
一直線亀はうろうろなどしない　一慧

川柳ささやま　遠山　可住報

雨の日はのんびり充電しています　純子
八十路にも豊かさ貰うネックレス　美緒子
首飾り花一杯のハワイアン　文子
トラ勝った寝不足なんか気にしない　美紗子
幸せな寝顔が並ぶ旅の宿　靖子
寝たきりの姑の涙をそっと拭く　多美子
首元の光に負けぬお人柄　開子
ネックレス　ピアス男もする時代　照代
友達と遊ぶ約束すぐ決まる　かほる
明日という嬉しい夢を抱いて寝る　つや子
ネックレスつけたことないから一度　冨子
小銭では神様いつも話し中　哲男
川の字の真ん中にある宝もの　芳郎
年金の框に願いが納まらぬ　可住

川柳塔鹿野みか月　土橋　螢報

筆不精手紙書かずに電話する　久枝
ふみ箱の昔をしゃべりだす手紙　保子
言いたいが言えない手紙したためる　かおる
小包の中に一筆母の文　みどり
愚痴いれて書いた手紙の世帯染み　八重
封を切るたびに鼓動の立つ手紙　永子
嬉しくて朝な夕なに読む手紙　かつ乃
追伸の孫の乱筆うれしいよ　富久江
渓谷に失くしたものを取りにゆく　小鹿
家出ほど荷物かかえて里帰り　幸枝
生きてゆく証だ今日も働いた　武子
泥かぶる覚悟の勇気減ってきた　弘子
夕焼けの渓を脳裏に焼きつける　睦子
ぬいぐるみの犬を抱いてる犬ぎらい　くに子
どぶ掃除ここ掘れ掘れと犬が嗅ぐ　はるお
飼い犬に噛まれるようじゃまだ半端　節子
絵手紙の自画像いつも亡母に似る　彩子
孫に書く手紙に教え書いておく　汲香
出撃の手紙に泣いた資料館　茶子
衰えとはっきり自覚する七十路　和子
他人から見れば何でもないレター　みさ子
切手貼る候文で亡父の意志　実満
赤とんぼ運んでくれた秋だより　きみ子
読む人の顔を浮かべて手紙書く　菊乃
絆ゆえ朱文字の手紙など書けぬ　諷人
葬送の遺影眩しく湧く涙　公子
燻し銀眩しく光る日を信じ　宣子
真実の涙眩しいほどきれい　房子
制服の大き目眩し夢眩し　孔美子
眩しくて老眼鏡の度が進む　螢

川柳茶ばしら　板山まみ子報

幟り立ちここにも鎮守おわしたか　文男
ご機嫌のころっと変わるお年頃　秀水
もみじの手合わせほほえむ七五三　幸子
もみじ散る野点の席に座る幸　かつ子
お隣のもみじを愛でて掃く箒　八木
年金の暮しに嬉しシニア券　盛夫
箸置きのもみじが癒す山の宿　百合
初めてはいいな素直な感嘆詞　美千代
成長を見守ってやるもみじの手　まみ子

川柳塔わかやま吟社　牛尾　緑良報

世代交替切り株に芽が伸びる　緑良
さて何が出るやら明日という鞄　保州
モダンに装うことも女の武器のうち　さち子
引き継いだバトンが重くなってくる　大輪
交替もやっぱりガムを噛みながら　豊太
人生の余韻残して譲る席　和香
未練まだ少し残して役を降り　千代子
交替の握手へ落ちたひと滴　紀久子
交替に体内時計動き出す　和
澄んだ瞳の真一文字に負けました　夕胡
真っすぐに落ちてきたのは熟し柿　輝子
天を指す葱あのようにあのように　愿

真っすぐな大根土に生きている　小雪
占いもどこ吹く風と我を通す　和子
真っ直ぐに生きたい風が厳し過ぎ　冨美子
清貧に生きて真っすぐ美しく　克子
真っすぐで融通も利く良い男　准一
真っすぐに生きて人生よくわかり　智三
セールスの鞄に入れてあるいくさ　あきこ
入れる物ないけど鞄持って出る　三喜夫
寅さんの鞄に溜まる風の音　朱夏
すごすごと帰る実りのない鞄　正博
跳んだ気で買った鞄が模造品　三男
鞄持ちちゃんと中身を見抜いてる　よしこ
晩秋の憐れに浸る旅鞄　泰女
只今と鞄ほりなげ出て行った　稚代
背伸びしたモダンがすぐに蹴躓く　英子
ふるさとにモダンな母の四季がある　寿子
添い遂げる道でめっけたモダン地図　怜
モダンだが爺ちゃん腰が曲ってる　東吉

かわはら川柳会　上田　俊路報

亡夫とは鉦線香でデートする　登生
チャペルの鐘舞い上がり聞くご両人　好道
一日の規律となりし鐘の音　雅予
除夜の鐘余韻の響き悟り知る　かず恵
鐘きけばふる里の土香る風　悦子
山寺の鐘は戦争語らない　寿子
鐘の鳴る丘に戦後の傷癒す　泰良
庭の木に水やり終えて夏も行く　余吏子
終わりまでがんばる子ども育てたい　静子
有終へ精一杯に今日を生き　俊路

川柳塔なら　坊農　柳弘報

同じこと聞いて聞かれて共白髪　雅子
目くばせに喋れなくなりとがる口　カズ子
セクシーな足に似合った赤い靴　博一
満願の今朝軽がると弾む靴　秋泉
洗いざらい喋ると皆に叱られる　章久
口数が過ぎた或る日の自己嫌悪　春蘭
じわじわと本音喋り出す屋台　洋子
マンネリがいやで毎日着替えます　ふりこ
脱ぎ捨てた靴を並べている余生　冬葉
一寸した刺激が欲しい夫婦仲　弘風
少し位喋りすぎたかしまい風呂　千梢
退院の電話意外によく喋る　春雄
結果論になるとあなたはよく喋る　ダン吉
幾山河越えた靴かも汗くさい　弥生
封印した過去喋り出す古日記　富子
お喋りな財布でいつも困ってる　寿美
ご先祖の苦労をしゃべる鬼瓦　茂雄
松茸を焼く香へ換気扇止める　國治
松茸が背負う売り場の床柱　孝子
花野遊ぶ靴を忘れぬ子の柩　理恵
こだわりをかかえて重い靴の紐　秋雄
さむらいになれぬ男のちびた靴　一風
じっくりと聞けば見えだす二枚舌　隆盛
腹の底割ってやさしい国訛り　道子
ぬるま湯の暮らしに増える脳の錆　和夫
長靴が似合う一家の農繁期　笛生
落人の秘話語り継ぐかずら橋　良一
絵手紙で松茸もろた秋日和　真理子
マンネリの多忙が余暇を持て余す　直子
なんべんも泣いた笑うた靴の底　朝子

川柳クラブわたの花　井尻　民報

肝心の時に小さくなる短波　はじむ
奥手ですそのうちきっと花も実も　ミツ子
嫁姑本音隠して出す葉書　君江
喜寿の母スイミング通の健康美　宏
遅咲きの花にもあった古い恋　一風
短命な花の命を待つ夜長　欣子
利息より少しましです眼の検査　幸枝
夫婦だから本音に重い蓋をする　晴美
スローライフ先手必勝出る元気　俊子
前走る若葉マークの一車線　浩三
医療ミス隠ぺいづくり終りなく　(本)たえ子
がむしゃらに騒いで過ぎていく野分　(赤)妙子
八起きめはもう力まないことにする　ますみ
箱庭に池を造りし想い出よ　敏男
老い何ぞ息ある限り前を向く　いつふみ
耳よりな話と誘う甘い罠　義明
シャンソンを奏でる鳥と秋の杜　ふりこ
引け際に汚点残して去る無念　知佐子
嫌われる覚悟で孫を躾する　美代子
太鼓判押された父のスニーカー　民
良心のかげにかくれている獣　宏至
冗談で話したつもり本音吐く　愛子
本音でね言いながら目が世辞を乞う　和子

思いやる心持つ人温かい　博子
本音をば言ったばかりに縁が切れ　正春
息のあるうちにと集う欲の顔　耀一

はびきの市民川柳会　徳山みつこ報

改憲の靴音迫る子や孫に　久仁子
胸張って孫に九条読んでやる　いさお
孫がいる日本沈没させられぬ　重人
玄関で一番でかい孫の靴　美代子
香水を男もつける時が来た　真一
人柄を暖かくするよい匂い　フジ
香水が男を酔わす初デート　獏沓
異文化の香りとやらを高く買い　美喜
音楽会隣の香水気にかかり　志洋
枯葉舞う香水一滴多い目に　みつこ
香水を使いこなしてもう大人　扶美代
香水よりシャボンが匂う健康美　泰子
香水の匂いを追っている野道　吐来
夏バテもやっと回復テキとカツ　たけし
肉親がアテにならない老介護　一知
肉筆の師の短冊の太い文字　一壺
アメリカが牛肉買えとうるさいぞ　敏
狂牛病ならぬようにと肉ひかえ　静子
肉よりも魚が増えた老いの膳　庸佑
肉親というぬるま湯で生きている　六点
宛名まで肉筆ひとつない便り　ダン吉
合格をメガホンつけて叫びたい　喜久子
七つ道具まずメガホンを首にかけ　悦子
ふらふらの蚊に献血をせがまれる　恵勇
メガホンが要るおばちゃんのバスツアー　耕策
巻紙の芯で老母と対話する　かつみ

尼崎いくしま川柳会　春城武庫坊報

水害の出石復旧そばの花　勝巳
飼主に何処か似てくる犬の顔　正子
悲しくも似た顔並ぶ通夜の席　宏一
終点で目覚めた人が酒臭い　昭三
マラソンの終点に見る晴れの顔　幸子
昭和はるか終点に咲く彼岸花　薫
石南花の花に予約の紅葉狩り　純
度忘れにまた笑い合う共白髪　東園
秋桜のにこにこ笑う風に会う　武庫坊
閉店のふぐちょうちんが腕を組む　寛之
マッチ擦る匂いと流れ星いくつ　年代
コロッケ屋の背中へ晩秋が来ていた　芳子
大声を出して見たくて山登り　守弘

川柳塔まつえ吟社　三島　淞丘報

哲学の道にお米がこぼれてる　茂美
哲学の話に一升瓶があく　治代
いい老後自己と対話の哲学で　幸子
老人は哲学よりも平和主義　英子
哲学の小径で石を蹴っている　畔
哲学は無縁おでんの鍋つつく　淞丘
行きあたりばったり今日も夕焼ける　螢
古里に老いて呑気な侘住居　スズコ
長生きのひとつの要素呑気です　宏
空財布妻に渡して呑んでいる　たけし
呑気者こうしちゃおれぬ冬が来る　幸代
呑気さが取り得の人の傘にいる　幸
腸がじくじく煮えて居りまする　多喜
煮えきらぬ話に席をそっと抜け　和歌子
旬の物煮ると鍋ごと踊り出す　邦代
知らぬまに煮たり焼いたりした噂　たえこ
仲なおりいつか煮こごり溶けている　雪代
ゆっくりと余白の時間煮込んでる　知恵子
底辺のくらしに青い空がある　房子
金魚鉢の底に言い訳二つ三つ　喜美子
老いの知恵そろそろ底が見えてきた　政子
煩悩をかくしておいた底の底　繭
母となる女が放つ底力　桂子
悲しみの底で行き場のない涙　芳山
家計簿のミスにうっかり気が付かず　ちえこ
うっかりと口がすべった内証ごと　長吉
気がつけば私独りの縄電車　多賀子
ぼんやりでバスは目の前通り過ぎ　注湖
うっかりと大きな石に躓いた　静恵
うっかりと返事したのが運の尽き　叮紅

富柳会　池森子報

孫台風帰って猫もひと安堵　和代
帆をいっぱい無理してあげることはない　紅紫朗
気負わずに生きる風花舞うように　鐘造
哀しみの中でくつろぐ古時計　扶美代
一言が台風となる空模様　和子
裏切りのはじまり風が生臭い　初太郎
散髪屋いやしの洗髪無骨な手　彦次

ドンファンは恋の火種を持ち歩く　冬虹
ひと芝居打った台詞が宙に舞う　一慧
簡単なオペだと医者は宣うが　淳司
今夜にも妻の台風涌く気配　隆彦
軽いいびき妻と母と女がいる　伸雄
譲れない位置でコロッケ作ってる　アキ
熟柿むさぼりて獣の貌になる　深雪
ガッツポーズのまま蟷螂は息絶える　よりこ
生物のいのち育む森の精　あかり
しがらみを断って納得する孤独　正典
刺を抜くあと一本がままならぬ　巳代一
とんでとんでたどりついたのはあなた　奏子
合掌がまだ生臭い青臭い　欣之
十指みな節くれとなり土の詩　信子
山や川人の情けで年越した　宏至
生きて行く視野で笑いの面を彫る　鬼焼
目覚ましの要らぬ故郷の蝉時雨　高鶩
誰も居ぬ部屋で弱音を吐いている　ひろこ
本音から違うと知った雨の夜　萩乃
雨止んでのどの小骨がいとおしい　奈保美
前列に冬が並んで出迎える　森子

川柳さんだ　北野哲男報

ボロボロの古文書がある歴史館　順子
ぼろぼろの心癒せる母の腕　婦美子
おしゃべりな口が滑ってボロボロに　キヨミ
草の種ぼろぼろこぼれ地に帰る　藤朗
パソコンと秋の夜長を睨めっこ　雅司
辛かった昔話をする夜長　忠

エエ嫁とおだてられてはまた許す　和代
川柳に足を滑らせ浮き沈み　茂山
パレードへやっぱり泣いた御堂筋　房江
コスモスが待ちくたびれて皇太子　章子
頼みごと増えて賽銭はずんどく　歳子
ダイエットウォームビズでひと休み　正和
そろそろとヒューズが一つ飛ぶ歳に　開子
毎日が休日なのに暇がない　朋月
野次馬を分けて救急車が動く　哲男

西宮北口川柳会　黒田能子報

美智子妃のお髪も白く娘が嫁ぐ　てる
悲しみの傷は見せない束ね髪　富喜子
おしゃれにも乱れ髪にも要る帽子　歳子
浦島もいろんな髪色おったまげ　いたる
廃校の教室にある古ピアノ　朋月
子も親も別顔になる参観日　和子
教室の絆は強くいつまでも　松煙
教室の窓あの頃がほろ苦い　美籠
財布から主役の諭吉すぐ消える　五月
すやすやと主役は眠る宮参り　昭三
一輪の花が主役の寒い部屋　鹿太
朝ドラの主役はいつも明るい子　正和
絵手紙の主役演じるすみれ草　一之
主役下りてからの父さん好きになり　たず子
沈思黙考こめかみさえも動かさぬ　いわゑ
胸の内こめかみだけが知っている　哲男
こめかみがふるえ出したら要注意　房子
悲しみに耐えてこめかみふるえてる　光子

美味しいもの見るとこめかみおどり出す　光久
こめかみを締めて無言の自己主張　比ろ志
白足袋の先まで写す七五三　美明
秋深し亡母の手になる鍋つかみ　求芽
世渡りに几帳面過ぎ先見えず　孝一
簡単に弱音は吐かぬ尾骶骨　石舟
旅は好きもどった時の家もいい　章子
苦労して釣った魚がする謀反　忠
錦秋も共に見る人あってこそ　美代子
はねられたリンゴに意地の甘さあり　トミヱ
亡き人を想えばしばしなくちろ　春蘭
周五郎に感情線をゆすぶられ　文

翠洋会　谷口義報

夢持とう宇宙の枠は無限大　孝一
目覚めれば空はまっ青勇気湧く　みつ子
わく広げたりなくなった年賀状　春
恥かきっ子でも老夫婦に希望わく　恭昌
総入歯絵に書いた餅眺めてる　千梢
にせ物と知って買ってる収集家　日の出
絵手紙で達者を知らす冬だより　会美
MRI輪切りで内緒見透かされ　れんげ
午前さま内緒ひとつをぶらさげて　志華子
じいちゃんが死んでから出る内緒事　舞夢
耳に手を当ててひそひそ金バッジ　久峰
固い口見込まれそっと洩らされる　さと美
ケータイにロックをかけてある浮気　尚士
花鋏すぱっと決心は固い　理恵
冬支度もう終えたかとうろこ雲　絹子

キャンバスをはみ出している青春譜　昭
いちにちの無事を幸せとも思い　千歩
秋刀魚焼く煙電気が吸っている　水昇
紅葉狩り友一人欠く白い雲　照子
恋という字私の辞書で薄くなり　蕉子
み仏のこころ伝える山の風　美籠
不祥事の疑惑を抱いて再出馬　満作
思いきりやろう命は一つだけ　石舟
理由などないが赤飯炊いている　義
昔から同じ所で転けている　すみ子
マジックのような十指が動く手話　捷也

南大阪川柳会　吉川　寿美報

飛行機を話すと彼は少年兵　叡子
悪夢だったB―29へ赤トンボ　修
腹決めぬまんま離陸をされている　ダン吉
自惚れの私を叱る紙ヒコーキ　柳弘
飛行機雲消えた辺りに老母が住む　寿美
父さんの紙飛行機は夢に乗り　直子
許されぬ恋べったりと朱に染まる　集一
べったりを捨て少年の眉太し　珠美
軽く見た茶髪が母に組む為替　雅文
乗り越えた子へほのぼのと夜が明ける　ひさ乃
ほのぼのと幸せ感じている湯槽　萬的
ほのぼのと綴る夫婦の終の章　更紗
肩車ほのぼの親と子の絆　章久
トップよりビリに大きな拍手わく　弘子
あこがれのままで沈んだ桜貝　千里
ときめきがどんどん沈む待ちぼうけ　朝子
沈ませた撒き餌で恋を釣りあげる　志華子
信念を曲げて男の意気沈む　遠野
せせらぎに沈む紅葉も冴えている　タカ子
無為無策それでも何時も勝っている　利昭
策無いがただしんけんに今日を生き　たもつ
策の無い男が吹かすタバコの輪　柳伸
三食はきっちり食べている無策　なぎさ
大きい声で歌をうたっている無策　シマ子
高齢化無策のつけがやってくる　憲太郎
策のない男大きなめし茶碗　重人
沈む気をふるいたたせる霜柱　弘泰
泥舟の沈む速さで老いてゆく　楓楽
無策者同士が溜まる日向ぼこ　とし子
本盗まれるのをまたまた見逃した　度

豊中もくせい川柳会　江見　見清報

黒田家の無事をお祈りコウノトリ　美義
震度五で潰れるビルが建つ文化　石舟
不出来でも味はいいのよ茄子胡瓜　満寿巳
文学の友はアッツで眠ってる　勇治
ロボットに手を握られて赤くなり　則彦
美味しくなった大根おろしを多いめに　求芽
ほろ酔うてふんわり落ちる夢の中　早人
無事泰平時どき欠伸しています　比ろ志
文化から離れてみたい時もある　巴子
さがしてる路面電車のあのゆとり　玲子
文化には似合わぬ奴の句が冴える　寅次郎
IT化新手新手の罪つくる　萬的
握ったら離さないのが私流　郁子
異文化が頑張っている国技館　禄骨
逆風に情けひとつを握らせる　隆
ひょっとこの面でにぎわう座興かな　タミ
さりげなく無事か達者かと母の文　都代子
この国の恥の文化が廃れかけ　尚士
娯楽費が医薬に化ける老いのうつ　知香子
もう役に立たぬ大正の知恵袋　正坊
寝姿へ息してるかと頬よせる　宇乃子
しっかりと握り返した嘘もある　幸雀
おたやんの面被って自分おさえてる　寿美子
いい人と言われいい人続けてる　英子
百までも生きたらあなたどうします　重人
末席から切るには惜しい意見出る　庸佑
また一つ文化が消える菊人形　高栄
株踊るIT文化浮かれ過ぎ　啓生
動いたら鈴が鳴りそな嬉しい日　見清

川柳エスポ　山本　三郎報

僕の夢意見相違で妻の愚痴　一歩
全身が胃袋になる秋が来た　恵美子
若人の夢断ち切ったJR西　晩翔
あの方と夢見たロマン露と消え　三枝
老いてなお昔の夢を追いもとめ　よねぞう
九条の架橋工事は談合で　ただよし
うちの子にかぎって連れが悪いだけ　鈍甲
初詣で一族郎党皆元気　とよ子
家族増え願い重ねる初詣で　れい子
振袖がしとやかに行く初詣で　文好
初詣で平和な世界祈ります　一炊

イラク派遣事故ないように初参り　ルイ子
初詣で小銭を投げて願多し　みさと
初詣で八十路迷わぬ知恵ほしい　団地
神様も新しい顔する初詣で　とし子
賽銭で願い欲張る初詣で　任宥
健康で並んでまいる初詣で　星花
初詣で数えてくぐる赤鳥居　昭一朗
ねがいごと健康ひとつ初参り　はつよ
誠実に生きる誓いの初詣で　ゆき子
振り袖の孫かしこみて破魔矢買う　一幸
一年分一度に願う初詣で　高栄
初詣で済めば早速飲む話　さとし
五円玉ひと握り持ち初詣で　さち子
初詣で吉と出るまで御籤ひく　三郎

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

姑と嫁との息をよむ息子　ますみ
冬に咲き冷凍百合よ幸せか　幸生
破れ目をかくす女の返し針　弥生
虹を夢見てガラスの靴を履いて出る　直子
風習を破る若者たちのサンバ　秋雄
東大が吐くキャリアの太い糸　欣之
人生の佳境迎える八十路坂　欣子
屋台酒ハズレ馬券が愚痴ってる　いっふみ
日帰りの露天風呂にも秋の彩　加津子
澄んだ空路地の奥にも秋をくれ　一風
補聴器をくれた息子の愚痴を聞く　浩三
キャリア族が食い散らかした国の富　耀一
気負いすぎうっかり塀を越す梢　はじむ

朗報も訃報も知っている梢　民
後継がず外へ出たがる三代目　寿鶴
外出は妻に済まない車椅子　弘直
ちょっとお散歩外はきれいな草もみじ　シマ子
深呼吸夢が破れていかぬよう　芳香
OKを出してドレスに迷い抜く　柳伸
まだやれる口笛ふいて弾みけり　宏至
秋灯下心の糧を古書新書　春蘭
破れかけの夢を繕う冬の酒　まつお

川柳若葉の会　宮崎シマ子報

解決の鍵を握っている余裕　ますみ
親の持つ鍵では開かぬ子の心　あずき
へそくりが減ってる鍵はかかってる　喜美子
老いの役いちょう落葉を掃き清め　弘直
青春を銀杏並木に置いたまま　加津子
コスモスの海で佇む失意の日　シマ子
コスモスの前でやさしくなってゆく　香住
コスモスの秋と一緒に歩く径　能子
コスモスとワルツを踊る秋の風　欣史子

むらくも川柳会　毛利幸報

枯葉散る私の未来問うてみる　幸
風強く枯葉一枚一人旅　英男
枯葉にも落ちて役立つ道がある　彰
強がりを言わなくなった枯すすき　義良
一年のつとめ果して枯葉散る　定子
掃いた後枯葉ひらひら落ちてくる　信夫
山の木々枯葉実りて落葉樹　安男

過疎の里誘われている秋祭り　恵美子
七五三可愛い孫が客となる　ます美
新市政道路工事で美化される　寿
さわやかな風をペダルに桜土手　昭子
話しても無駄だと知りつまた話す　美保
招いてもひこ星までど降りて来ず　喜美
収穫を祝う祭りの笛太鼓　克子
きっぱりと鱗一枚ずつを剥ぐ　秀夫
先生を信じて白い花になる　かずこ
新しいことの消化が出来かねる　秀子
一日を感謝長寿の道川柳　明朗

三幸川柳教室　古久保和子報

悠久の園の時計は動かない　幹子
手付かずの夢引きずって磯に立つ　公子
絶景に見とれ小石にけつまずく　みね
赤トンボ追うて歌人の道標　美枝子
人妻の歩幅で愛でる秋の庭　朱夏
空き巣から戸締りのスキ教えられ　一歩
その手口暇な電話で相手する　かずみ
敬老日孫が花束持って来る　桂香
手口には乗らぬがティッシュ貰っとく　幸
あの手この手母は笑って首を振る　和子
巧妙な手口冷や飯食わされる　孝義
マジシャンの手口に慣れた白い鳩　町子
人間の手口を読んでいるカラス　碧
まず雑魚に手口を見せて網かける　昇
切羽詰まった手口で情に流される　三千子
温かい料理に妻の愛を知る　義男

芋茶粥祖母の温もりよみがえる　信子
温情は隠してきつく叱りつけ　武
手のひらで体温測る母の愛　宏夫
温々と育ち未来の荷が重い　徑子
幸せのうしろに温いお味噌汁　起世子
温暖化に喘ぐ地球もわたくしも　当代
温暖化分別ゴミが多すぎる　章子
さよならをした残像をあたためる　登美代
向き合えば温い心は自ずから　千秀
一坪の店が温もり売っている　准一
伸び縮みする物差しで温かい　次根
亡き母を漢字にすれば温になる　智三
温室の真っ赤なバラに騙される　イセ
温室のカレンダーには四季がない　保州

堺川柳会　河内月子報

助かっています良人の無関心　泰子
コルセットいくら締めてももうあかん　潤子
想像がピタリ当って笑えない　日の出
今晩は鍋ですと父送り出す　千代
見ぬふりをするのも時に人助け　篤子
鍋やきを横目で見つつかけを食べ　りつえ
モナリザの笑み想像はご自由に　好
手のかかる男ほっとけない女　楓
コスモスを活けて独りを持て余す　扶美代
これぐらいいいと自然をもて余す　深雪
ライバルのミスにすっかり助けられ　玄也
助太刀の妻にあれこれ指図され　恵勇
きっと来る白馬の騎士を待っている　朋月
案外と助けた方が忘れない　時雄
ナウマンの象も見てたかこの夜空　俶子
億ションの部屋で朝食何やろか　五月
嫁ぐ娘へ父からそっと預金帳　幸雀
助けたらためにならぬと鬼になる　よりこ
箸持ったままでおじやを待っている　半銭
食べてほしいと土鍋で炊いているお粥　かりん
助け舟出した私が叱られた　さくら
月旅行想像だけで目が回る　萠
強すぎて妻を助ける気がしない　像山
波除けのつもりの私邪魔でした　和夫
シースルーちらちらとして落ちつかぬ　伸子
弱虫の僕を助ける酒二合　鐘造
小泉さん意地を張るのはもうやめて　八千代
想像の翼大きい車椅子　みつこ
ふだんから避けてた人に助けられ　冬虹
逃げ道に兵糧と置く助け舟　公誠

川柳塔打吹　大森孝恵報

石投げて鳥居に積んだ二人連れ　義人
ぼんくらもかしこいひとも石になる　石花菜
重石にもならぬ女の石頭　幸子
石ころになって路傍で生きていく　三津子
三途の川石を重ねて阿弥陀仏　貴恵
君は金剛石ぼくは軽石だ　完司
温かいかに汁冬の日本海　たけ代
初恋を毛糸のマフラー温める　清
温かい孫と寝た夜に地図書かれ　紀美恵
温かい母の古着を身につける　富恵
温かい心で染まる赤い羽根　京子
介護の手握る手と手が温かい　芙美子
友の橇骨の髄まで温かい　芳光
温かい募金でかける虹の橋　善江
役職を退いて今度はボランティア　久芽代
灰皿のような役にもある誇り　きみ子
役に立つ間は主婦の座を守る　和子
いつまでも終わり見えない親の役　滋
表札の世帯の主は寝たっきり　美知江
役どころ私ゃ刺身のつまで好い　節子
役得でつまみ食いする鍋奉行　玲坊
目付役つけても悪いことをする　蛍
愛犬も世帯の中のプラスわん　禎元
独身に見せたイケメン妻が居た　龍枝
咲き終り世帯を持たぬ一年草　玲子
世帯べつ孫子に作る注連飾り　重忠
一人暮し親子喧嘩がなつかしい　克枝
大世帯回転すしの皿高し　照彦
片翼になって私が世帯主　美ッ千
肩の荷をおろした途端呆けて来た　孝恵

岬川柳会　八十田洞庵報

幼児画にきらりと光る勘の冴え　みやこ
生かされる嬉しい誤算感謝する　和香
ときどきは歳を忘れて無茶してる　年子
お入りと縄跳びの輪のタイミング　和美
旧名所大河ドラマで陽の目見る　里子
やっと手に入れたマンション形だけ　茂平
目を細め母の眼差し愛あふれ　富美子

億単位理解を超えた使い込み　鉄男
赤い服着ればうれしくなる私　洋子
壺開けて梅と取れ取れ鰯煮る　悦子
予想した顔ぶれ揃いカニツアー　芳子
肉少し削りなさいと試着室　俶子
籠の鳥抜け出て見たが飛び立てず　珠子
暁暗の地球に鬼火迷うてる　洞庵

城北川柳会　吉岡　修報

犬でさえ繋いだ紐を切りたがる　昭
紐たぐるように話が続いてる　達子
厄除けの紐を振ります神の鈴　志華子
つながれた紐ゆるめ合う夫婦　倫子
目が覚めると信じて今日も眠ります　和夫
自然体眠りたい時は眠ります　重人
本箱で居眠りをする本を買う　弘風
本当の悪党眠る暇がない　たもつ
人間のサンプルやがて介護ロボ　高栄
花の種サンプルにない色で咲く　千里
妊婦さんみるとなんだかほっとする　朝子
楽屋裏見せてしまえば楽になる　ひさ乃
敬遠をされているのか渋い顔　はじめ
輪の中に舌を出してる鬼も居る　あやめ
例えばのモデルにされる仏さん　典子
子育てが終り身につく肝っ玉　求芽
六十年続く平和がきな臭い　利昭
虫の音も生きる証や我が余生　春蘭
収穫がはっきり見える塾通い　ルイ子
新米が故郷の味を連れてくる　郁夫
被災地の棚田に稔るコシヒカリ　正
収穫を子孫に繋ぐ杉の苗　集一
仲人が言うサンプルと違ってた　美智子
サンプルの親の蛙に子も蛙　順三
涙もろさ優しくなった見本です　桂作
サンプルはわたし娘が一人いる　恵子
ともかくもサンプルだけはもらっとく　昭子
吠えるのも咬むのも涙枯れたから　修
抜け目ない女の背にくらい影　萬的
ゆっくりと呑めばゆっくり酔うお酒　とし子

倉吉川柳会　竹信　照彦報

イエスマンお腹の中はいかの墨　和枝
お爺ちゃん可愛い孫のイエスマン　龍枝
飯のためローンのためにイエスマン　次男
イエスマン昨日はきのう今日は今日　萩江
イエスマンならなきゃ首が飛ぶ世代　日出子
都合よい言葉を返すイエスマン　睦子
イエスマン揃えごきげん総理どの　よしえ
泣き止まぬ子に暴力は無責任　和子
戦いもほれたはれたも不滅なり　石花菜
火のついたペンと戦う一行詩　きみ子
産声はこの世で生きる時の声　悠子
老兵が語る戦の生と死を　重忠
カマキリが背伸びしながら戦する　賀寿恵
食欲と戦いながらダイエット　泰輔
声援とバトン握れば隼に　祐子
貧乏が原因犬も痩せている　季芳
喧嘩したその原因がわからない　螢
原因は男にあった自己破産　秋草
元気なく花芽つかぬは土のせい　京子
原因は指先にある桜貝　修
原因はすべてのことが我にあり　常代
低学力テレビのせいにしておこう　鬼一
ライバルもきっとテレビを見てるのだ　かつみ
アリコには飽きたよ耳が錆び出した　康子
テレビから元気を貰うのど自慢　(前)喜美子
おじいちゃん水戸黄門でご満悦　酔芙蓉
チャンネルを爺と婆とが取りあいこ　勝誉
時代もの老人たちはテレビづけ　小生
テレビ見る子を叱る親許す老い　照彦

川柳塔みちのく　小寺　花峯報

絵手紙にしました胸が詰まります　和香子
孫の絵はなぐりがきでも額にいれ　誠子
運動会抜きっ抜かれっ赤と白　てる
ピカソの絵良さが私に分からない　隼人
たんすの底でむかしの火種生きている　ヒサ子
神が描く自由自在の夕茜　愁女
刺抜いて優しいひとと掌を結ぶ　花匠
クラス会むかしを酒に入れて酌む　ふさゑ
想い出の欠片で遊ぶのも余生　銀波
どうしても笑わぬ父の肖像画　黙人
まほろばの昔を語り出す埴輪　岳水
青春の海に潜っていた昔　花峯
大器晩成いまだに虹を描いている　慕情
鬼になる子供が居ないかくれんぼ　一花
蕎麦の花むかし話を語り継ぐ　劦

一人っ子と遊び疲れた玩具箱　五楽庵

岩美川柳会　石谷美恵子報

胎教の名曲忘れ子は音痴　たぬ
腹いっぱい蟹を食う会年忘れ　孝男
歳などは忘れて今日も翔んでいる　一京
歌謡曲ひとつおぼえて年忘れ　螢
聞き流す事にようやく慣れた姑　睦子
父母逝ってようやく外す躾糸　茶子
五代目の黄門さまが板に付き　石花菜
単独の町もようやく光りだす　公乃
逆上がりようやくできたうれしい日　節子
芽が開くお御輿担ぐ曲線美　幸枝
曲芸がうまい女の泣きボクロ　一瑶
曲者とじっくり話し合ってやる　はるお
イラクへと続く危険な曲がり角　重忠
曲者が聖書と子供連れてくる　忠良
花か実か決めねばならぬ曲がり角　よしえ
曲がり角ずっと見送る夕まぐれ　和子
真っすぐを曲げて生花も生きてくる　菖子
輪の中で曲がったへそを許し合う　雅女
時化ているスナック客は僕一人　圭一郎
時化の日はほっとしているマッバガニ　完司
時化てくりゃ漁師の女房美容院　蟹郎
夢千代の男は時化の海を漕ぐ　公子
時化の日は布団被って寝てかかる　季芳
古希までに何度も時化はありました　稔
八起き目でようやく運が上を向く　一粋
言うことも言えてようやくうちの嫁　美恵子

ほたる川柳同好会　水野　黒兎報

競馬好き馬の名前はよく憶え　信男
半分こどっちを取るか迷ってる　春代
芽の出ぬは名前負けさと負け惜しみ　勝
黒光り廊下老舗の気骨あり　よしろう
町の名でもめて合併ままならぬ　黒兎
愛称に馴れて本名忘れられ　雪子
表札の亡父の名前が外せない　禮子
黒い奥にワインを囲う外務省　禄骨
家族運薄い名前で友増やす　契子
飲みっぷり子供に負けず午前様　柳童
パンうどん茶粥も並べ三世代　昭子

○

○柳界展望 169頁のつづき

常任理事会＝12月6日　出席者17名　①プロジェクトチーム人選検討　②『川柳塔』950号誌上大会、予算計上　③自選集欄追加者人選　④同人承認2名　⑤高野山会計報告　⑥代表者会議の日程決定

次回常任理事会＝1月7日(土)9時30分から

各地川柳会代表者会　2月18日(土)13～16時
於アウィーナ・4Fマーガレット
案件＝誌友拡大プロジェクトチーム・小冊子の活用・その他

□各地川柳大会の同人の秀句獲得者については、すみやかに編集部宛連絡をお願いします。なお、日時・会場・参加人員を明記下さい。

第五十七回　大阪川柳大会

在阪柳社6社の自主運営となって3回目の川柳大会は、11月19日（土）北区民センターで154人の参加を得て開催された。当日の秀句は次のとおり。（太字は本社同人）

「発　言」　岡　良三選
だいじょうぶよそれだけで足る母の愛　西　美和子

「早　い」　山本希久子選
早合点させた二月のチョコレート　太田扶美代

「　袋　」　前　たもつ選
いたわりをつめた袋を母が抱く　谷川　勇治

「戦後60年」　前田　咲二選
戦後のボロズボンと60年後のボロズボン　柏原幻四郎

「牛耳る」　吉川　卓選
槍も浅間も富士山の御意のまま　井上　一筒

「油　断」　前田芙巳代選
わが死後も雪か油断はなかったか　墨　作二郎

「　鳥　」　上野多恵子選
天才のピアノで鳥が飛んでいる　内藤　光枝

「テープ」　嶋澤喜八郎選
両面テープ罪つくりだと言われても　小林すみえ

高野山合祀法要

於・高野山大霊園

十一月十二日、心配された雨も、明け方にはすっかり上がり、第十七回川柳塔合祀祭は秋空の下、御遺族を含め総勢四十八名の参加を得て盛大にとり行われた。

バスを降りた時は朝靄に包まれ、うっすらと霞んで見えた峯々も、法要の始まる頃には雲一つなく晴れわたり、紅葉の山は秋の陽を受けて輝き、まことに美しく、霊峰・霊場の感を深くした。読経の流れる中、次々と焼香がすすみ、薫風先生のお孫さんお二人が御両親に続き、手を合わされる姿は見ていて微笑ましく、胸温まる光景であった。

食事の後は自由時間。

チリ一つない参道を紅葉を愛で、御遺族の方と柳人もうちとけ会話を交わしながら、奥の院までの散策を楽しみ18時前に全員無事に帰阪した。

（扶美代）

新合祀者―寺井東雲・月原宵明・松川芳子・中澤伽羅・瀧井勝・長谷川淳・小池しげお・工藤吟笑・西谷大吾・中田あい子・橘高薫風・藤村〆女

（敬称略）

お供拝受（敬称略）藤村盛造・長谷川初子

第７回　文学ルート川柳募集

文学ルート（松江市・尾道市・今治市・松山市）

募集作品　文学ルート周辺の自然や衣食住・信仰・年中行事等に関する習慣・民俗行事などを題材とする川柳（未発表のオリジナル作品に限ります）

宿題・応募先（宿題に応じてご応募下さい。各２句）

松江市	**「縁結び」「牡　丹」**	松江市観光振興部　観光文化振興課 〒690-8510　松江市末次町86	TEL(0852)55-5293 FAX(0852)55-5564
尾道市	**「灯　り」「　波　」**	尾道市企画部　観光文化課 〒722-8501　尾道市久保1-15-1	TEL(0848)25-7366 FAX(0848)25-7293
今治市	**「　瓦　」「　塩　」**	今治市教育委員会　文化振興課 〒794-8511　今治市別宮町1-4-1	TEL(0898)36-1608 FAX(0898)25-1700
松山市	**「神　輿」「マップ」**	松山市総合政策部　国際文化振興課 〒790-8571　松山市二番町4-7-2	TEL(089)948-6634 FAX(089)943-9001
瀬戸内しまなみ海道周辺地域振興協議会	**「しまなみ」「多島海」**	尾道市企画部　企画課 〒722-8501　尾道市久保1-15-1	TEL(0848)25-7316 FAX(0848)37-2740

応募方法

・専用の応募用紙、または官製ハガキ、封書に書かれた作品（FAXによる応募可）
・応募作品には「宿題」及び、氏名（ふりがな）、郵便番号、住所、年齢、性別、電話番号等、必要事項を明記してください。（柳号の場合は本名も明記）
・入賞作品の著作権は主催者に帰属します。応募作品は返却しません。一人２句以内。

応募締切　**平成18年３月31日（金）**（当日消印有効）
出 品 料　無　料　　選考　平成18年５・６月
発　　表　平成18年７月、入賞者に返却します。（表彰式は平成18年10月を予定しています。）
選考委員（第二次選考）今川乱魚・塩見草映・河内天笑
（第一次選考）松本文子(松江市)・定本イツ子(尾道市)・渡邊伊津志(今治市)
丹下茂夫(松山市)・合田悦子(瀬戸内しまなみ海道周辺地域振興協議会)
賞　大賞　１点　　奨励賞　５点　　佳作賞　若干

明けましておめでとうございます

竹原川柳会

平成十八年　元　旦

本年は竹原川柳会創立50周年記念川柳大会を開催致します。
ご支援よろしくお願い致します。

〒725-0022 広島県竹原市本町１丁目14―３
小　島　蘭　幸　方

会監会
計査長

山内房子　正畑半覚　福島万年　沖浜正宏　三宅不朽　古田太虚　藤解静風　古谷節夫　石原淑子　森井菁居　岩本笑子　時広一路　小島蘭幸

ほか会員一同

新年おめでとうございます

西宮北口川柳会

例会　毎月第２月曜日午後１時　西宮市立中央公民館
（阪急電鉄神戸線西宮北口下車南出口徒歩３分）
プレラにしのみや４F

事務局および投句先

〒663-8202 西宮市高畑町2—82—308　西　口　いわゑ

黒川紫香　河原野折杭　冨山ルイ子
阿萬萬的　神原文　長浜美籠
秋元てる　菊池トミヱ　七反田順子
浅野房子　北野哲男　西口いわゑ
井上松煙　木村貴代子　長谷川春蘭
石原歳子　久保田千代　春城武庫坊
岩倉キク子　蔵田光子　春城年代
臼井二英　黒田能子　古川奮水
奥田みつ子　小林和子　堀正和
小熊江美　住谷石舟　牧渕富喜子
小倉藍　田中章子　松下比ろ志
片山忠　田中正坊　丸山一之
門谷たず子　田辺鹿太　山口光久
亀岡哲子　辻開子　山崎君子
河井庸佑　坪井孝一　山本義子
川島諷云児　都倉求芽

献　壽

平成18年

川柳塔鹿野みか月

第25回“みか月”記念大会に際し、全国の皆様から温かいご支援を賜りました。こころからの感謝を申し上げます。

本年は第26回目の記念の大会に当たる年でございます。何卒、旧に倍してのご支援をこころよりお待ち申しております。

会長
森山　盛桜

副会長
中原　諷人

相談役
土橋　螢

顧問
小倉　利男
石尾　かつ乃
乾　喜与志
岩崎　みさ江
大角　幸代
大角　正道
太田　幸枝
奥谷　彩子

垣尾　宣子
鹿児島　節子
加藤　公子
加藤　永子
国森　武子
久野　野草
黒田　くに子
児嶋　保子
髙原　かおる
竹森　富久江
田中　きみゑ
谷口　百合子
田村　きみ子
津村　八重子
徳岡　本丸
土橋　睦子

土橋　はるお
中原　汲香
中原　みさ子
永原　奈津子
西川　和子
原田　菊乃
福西　茶子
山岡　久枝
山口　実満
山根　立亥
山根　八重
横山　房子
吉田　孔美子
吉田　弘子
若林　みどり
ほか会員一同

※事務局：〒689-0405 鳥取市鹿野町鹿野1279　中原諷人方
電話 & FAX (0857) 84－2100

明けましておめでとうございます

平成十八年　元旦

堺　川　柳　会

河内天笑　川西真澄
石堂潤子　河盛龍三
泉谷喜代子　神原文
稲川恵勇　源田八千代
岩崎公誠　小寺竜之介
上嶋幸雀　小西小雪
榎本日の出　齋藤さくら
榎本舞夢　志田千代
大久保伸子　高木世紀子
太田扶美代　津守なぎさ
大谷篤子　徳山みつこ
大橋鐘造　中井萠
荻野像山　中川楓
奥時雄　中崎深雪
柿花和夫　中野健吾
河内健造　中村忠敬
河内康治　半井酔粋
河内月子　遠山唯教

西内朋月　西村りつえ
長谷川彰　長谷川春蘭
原清晋　樋口冬虹
日野愿　藤田泰子
升成好　宮本かりん
村上玄也　八木侑子
矢倉五月　矢野梓
山本半銭　米澤俶子
和田つづや

あけましてお芽出度う御座います

平成十八年　元旦

香川県東かがわ市白鳥

川柳塔おっぱこ吟社

会長 成重　放任

会計 川崎ひかり

顧問 木村あきら

同人 池内かおり

〃　原　賢

〃　伊勢八重子

会員 角尾いさむ

〃　辻上よしみ

〃　向山　治延

〃　岩倉　文仙

〃　山崎　初恵

〃　赤沢　貞月

〃　中塚寿々女

明けましておめでとうございます
ことしもよろしくお願い致します

米子　川柳塔きゃらぼく

青戸　田鶴
池尾　保子
石中　時子
猪森スミヱ
遠藤那珂子
大塚　恵子
鹿島　繭
笠岡　章江
門脇　晶子
木村富美子
木村　春枝
小村てい子
佐伯　やえ
佐々野紫泉

澤田　千春
白根　ふみ
田中　亜弥
中井　ゆき
野坂　なみ
林　瑞枝
福代　天雀
福井　雪江
二岡　初枝
政岡日枝子
三好寿々子
光井　玲子
八木　千代

謹賀新年

川柳塔唐津

井上勝視　宗　水笑
岩崎　實　田口虹汀
市丸晴翠　仁部四郎
久保正剣　樋口輝夫
坂本蜂朗　山口高明

明けまして
おめでとうございます

川柳ふうもん吟社

会長　両川洋々
会員一同

事務局
〒680-0033　鳥取市二階町三―一〇二―二
植田一京方

例会
毎月第四日曜日　十三時
JR鳥取駅構内（シャミネ会議室）
※四月は吟行会、十二月は没句供養大会

あけましておめでとうございます

翠　洋　会

安土　理恵
穴吹　尚士
居谷真理子
井上　照子
榎本日の出
榎本　舞夢
大川　桃花
太田　昭
岡本　久峰
奥田みつ子
古今堂蕉子
佐々木満作
清水　絹子
住谷　石舟
髙杉　千歩
田中　正坊
谷口　義
津村志華子

坪井　孝一
天正　千梢
長浜　美籠
中村れんげ
中村　叡子
西出　楓楽
長谷川会美
原田すみ子
藤井　正雄
安永　春
矢野　良一
山本希久子
横山　捷也
米田　恭昌
米田　水昇
渡部さと美
渡辺　富子
(故)児玉　蛙

明けましておめでとうございます

NHK川柳教室

河内　天笑
藤井　正雄
指宿　千枝子
鴨谷　瑠美子
志田　千代
野下　之男
井上　松煙
緒方　美津子
井上　信子
古今堂　蕉子
江見　見清

大崎　侑子
安達　忠央
福田　満州
南原　正和
山田　耕冶
池上　清治
久保田　千代
角谷　克治
藤井　則彦
西内　朋月

明けましておめでとうございます

いずも川柳会

会　員　一　同

事務局　〒693-0052　出雲市松寄下町２８４
吉　岡　きみえ　方
TEL 0853—22—1068

謹賀新年

エイシス堺

講師　河内天笑

石堂　潤子
泉谷　喜代子
稲川　恵勇
榎本日の出
榎本　舞夢
大久保伸子
大谷　篤子
奥　時雄
荻野　像山
源田八千代
小寺竜之介
齋藤さくら
阪井　智之
島田　誠一

高木世紀子
津守　なぎさ
冨田志津江
冨山ルイ子
中井　萠
中野　健吾
原　清晋
樋口　冬虹
升成　好
宮本かりん
村上　玄也
矢倉　五月
矢野　梓
米澤　俶子

あちこちに
のぞみの旗が翻る

（平成18年2月13日
「八王子支部」発会予定）

川柳塔のぞみ

（事務局）
東京都八王子市散田町
2の31の3
播本 方

あけまして
おめでとうございます

おたまじゃくし川柳会

土橋房枝
雪本珠子
森元ふみよ
林力子
助川和美
堤楢代
中岡香代
山本蛙城

〒596-0076
岸和田市野田町一―六―二
土橋 方
TEL（〇七二四）三八―三三〇八

明けましておめでとうございます

川柳塔なら

宮口笛生
中原比呂志
米田恭昌
坊農柳弘
大内朝子
吉川寿美
居谷真理子
渡辺富子
安土理恵
飛永ふりこ
森中博一

会員一同

季刊
A5判
一五二頁
「川柳展望」
誌代　四、九六〇円（年間）
☆見本誌贈呈いたします
〒567-0009
茨木市山手台四―六―三―一〇一
TEL〇七二―六四九―五一二六
FAX〇七二―六四九―一三三四
川柳展望社
主宰・天根夢草

謹賀新年
川柳大阪
会員一同
大阪市交通局互助組合文化部・川柳部

新年おめでとうございます
平成18年　元旦
岩美川柳会　会員一同
〒681-0074　鳥取県岩美郡岩美町網代118-155
会長　山下蟹郎

明けまして
おめでとうございます

熊本川柳会

高野宵草
永田俊子
岩切康子

明けましておめでとうございます

尼崎尾浜川柳会

黒川紫香
坂本晴美
西内朋月
長浜美籠
河津正治
山田耕治
坪井孝一
松下比ろ志
林昭三
岩城義芳
西部イサミ
酢谷亀与子
小西まさ
軸丸勝巳
奥村五月
瀧本きよし
作山信子
村山よし子
延野カズ子
木村美代子
松村江里
小熊江美
都倉求芽
田辺鹿太
他一同

慶賀丙戌歳新春

川柳ささやま

会員一同

あけましておめでとうございます

川柳塔わかやま吟社

同人一同

事務局　〒641-0012　和歌山市紀三井寺111-2
牛尾　緑良

明けましておめでとうございます

エイシス東大阪

講師　河内天笑

和田つづや	米田水昇	山本宏至	堀富重	西川更紗	中村れんげ	中岡妙	飛永ふりこ	佐々木満作	古手川光	熊代菜月	国見蘭香	吉川寿美	笠井欣子	内田希	伊藤博仁	新井弘子	生嶋ますみ

謹んで新年のご祝詞を申し上げます

高槻川柳サークル卯の花 一同

月例句会は第三木曜日正午　　高槻現代劇場306号室

明けましておめでとうございます

川柳塔打吹

会長　牧野芳光・会員一同

事務局　〒682-0924　倉吉市河原町1879
高多博丈方
電話　0858－22－6128

賀正

岸和田川柳会

平成十八年　元旦

長谷川呂万
岩佐ダン吉
寺田甚一
不破仁緑
加藤基
宮野みつ江
小島笑司
池田岩夫
永田守
土橋房枝
林力子
堤植代
河越みよ子
林春栄
助川和美
前田ゆい
家路野添
向井清
佐藤幸子
松岡浅子

芳地狸村
井伊東吉
原さよ子
山本蛙城
田口穣一
仲谷弘子
中島寿海
田中文時
松村睦馬
雪本珠子
森元ふみよ子
中岡香代
藤井照女
柿本あい子
三宅ゆり子
小林淳子
稲葉洋
佐藤文夫
森本みね代

あけましておめでとうございます

もくせい川柳会

相田博子
阿萬的
岩崎玲子
上嶋幸雀
江見見清
粕屋都代子
河津寅次郎
岸田知香子
源田啓生
住谷石舟
玉置英子
辻川和子
都倉求芽
中内久太郎
早泉早人
広島巴子
松下比ろ志
安永春
渡辺光雄

穴吹尚士
安藤寿美子
井上隆
上村隆
樫谷郁子
河井庸佑
神野宇乃子
黒川紫香
坂上高栄
田中正坊
玉置重人
辻川慶子
冨田満寿巳
菱田加重子
野島
藤井則彦
宮田禄骨
山門タミ

ほか会員一同

謹賀新年

川柳塔まつえ吟社

同人一同

〒690-0056 松江市雑賀町1686　恒松町紅方
電話 0852—24—5450

とんだばやし川柳

富柳会

謹賀新年

池森子
中井アキ
大橋鐘造
中崎深雪
小野紅紫朗
久世高鷲
森下よりこ
尾形奏子
田嶋伸雄
河野伸雄
望月正典
村田巳代一
外一同

明けましておめでとうございます

京都塔の会

会員一同

明けましておめでとうございます

川柳塔みちのく

主幹 斉藤　劦
副主幹 小寺　花峯
福士　慕情
相談役 工藤　甲吉
森中惠美子
顧問 波多野五楽庵
理事 岩渕　默人
櫻庭　順風
佐治氏加子
浅田　隆樹
肥後和香子
田中　叶
監事 相馬　銀波
小枝ふさゑ
会計 相馬　一花
ほか同人一同

あけましておめでとうございます

鳥取県川柳作家連盟

会長 鈴木公弘
会員一同

事務局 〒680-0843 鳥取市南吉方3丁目364
安田方　春木圭一郎
TEL 0857—24—2834

明けましておめでとうございます

城北川柳会

会長 吉岡　修
会員一同

大阪川柳の会

句　会　毎偶数月上旬・大阪駅前第２ビル５階　第１研修室
事務局　〒532-0025　大阪市淀川区新北野1-3-4-706　本田智彦 方
TEL（06）6303-7297

代表
礒野いさむ

世話人
足立淑子
碓氷祥昭
岡良三
坂本和樹
竹森雀舎
内藤光枝
濱田良知
本田智彦
森口美羽
安井英華
吉村雅文
砂木啓三

大阪川柳人クラブ
坂本晴美

川柳塔おおとり

明けましておめでとうございます

確かな指導者とあたたかい仲間。
会員一同がんばっています。

平成18年　元旦

会長　小林由多香
事務局　〒680-0805 鳥取市相生町1－110　TEL. 0857－23－1170

謹賀新年

かわはら川柳会

上田俊路
谷口泰良
田中好道
谷口寿子
国本悦子
谷口寿子
西田静子
漆原余吏子
漆原登生
山田雅予
山尾かず惠

謹賀新年

河内長野

長柳会

水谷正子
村上直樹
山岡冨美子
坂上淳司

明けましておめでとうございます

川柳ねやがわ

会員一同

会長　山本三郎
事務局　高田博泉

新年あけましておめでとうございます

ほたる川柳同好会

水野黒兎
前田昭子
椋山風祥
藤原桂子
田中蛍柳
栗田久子
田辺正三郎
二ノ倉よしろう
高嶋勝
出口セツ子
米原雪子
江見清
寺井柳童
唐住実
宮田禄骨
藤澤長一
小牧信男
多田契子
前田いさむ
北川ヤギエ
宇山禮子
中山春代
谷川勇治
佐藤憲治
ほか会員一同

定例句会・毎月第2火曜日午後・豊中市蛍池公民館（蛍池駅前ビル5階）

明けましておめでとうございます

尼崎いくしま川柳会

例　会　毎月第一金曜日　午後一時

会　場　サンシビック尼崎　三階
（阪神尼崎駅西南五分）

奉　祝　新　年

川柳藤井寺
川柳みささぎ

会員一同

新年おめでとうございます

西宮ローズ川柳会

山本義子　山崎君子　春城年代　春城武庫坊　西口いわゑ　長浜美籠　坪井孝一　久保まさお　木村貴代子　菊池トミヱ　亀岡哲子　小倉藍　奥田みつ子　岩倉キク子　飯西ミサヲ　秋元てる

新年のおよろこびを申し上げます

川柳若葉の会

黒田能子
辻川慶子
永浜加津子
中井アキ
古川喜美子
宮崎弘直
宮崎シマ子
宮本欣史子
山内香住
吉田あずき

明けましておめでとうございます

川柳クラブ わたの花

平川幸枝
松葉君江
生嶋ますみ
吉村一風
村上ミツ子
神原まさと
山本宏至
八倉知佐子
乾美代子
篠原いつふみ
井尻民
砂田八寿子
藤本一道
馬場宏
杉本晴美
脇俊子

本田たえこ
赤木妙子
西川義明
寺川はじむ
笠井欣子
田邊浩三
辰巳敏男
松浦愛子
小西博子
上田和子
飛永ふりこ
土谷耀一
葭矢正春
梅原荘治
梅原克美

明けましておめでとうございます

南大阪川柳会

会員一同

あけましておめでとうございます

三幸川柳教室 一同

事務局　〒640-0112 和歌山市西ノ庄239—23

桜井千秀

「この会は、鶴彬をはじめ先覚川柳人の反戦平和と社会諷刺の精神を現代に生かす」（会則）

あかつき川柳会

川端一歩　加山勝久
森村美花　前田紀男
岩佐ダン吉　森松まつお
山本柳昌
近藤正　塩満敏
江島谷勝弘　田中正坊

◆毎月奇数月に句会
06・1・6（金）14時
国労大阪会館
（JR環状線「天満駅」3分）

◆会報「あかつき」発行

〈事務所〉〒596—0824
岸和田市葛城町891—22
岩佐ダン吉方
〇七二・四二八・〇三三五

明けましておめでとうございます

八尾市民川柳会

会員一同

大阪川柳人クラブ

会長　礒野　いさむ

副会長　板尾　岳人

幹事長　坂本　晴美

明けましておめでとうございます

平成18年　元旦

「春はくろぼこ川柳大会」主催の

くろぼこ川柳会

会長　鈴木　公弘

明けましておめでとうございます

川柳はびきの

会員一同

はびきの市民川柳会

明けましておめでとうございます

川柳塔社

主幹 河内天笑

理事長 板尾岳人

副主幹 奥田みつ子

副理事長 小島蘭幸　前たもつ

常任理事 穴吹尚士　大内朝子　鴨谷瑠美子　川端一歩　鶴田遠野　西内朋月　松原寿子　山本希久子

井伊東吉　籠島恵子　河内月子　木本朱夏　長浜美籠　坊農柳弘　村上玄也　米田恭昌

西出楓楽　仁部四郎

川柳塔社常任理事会

柳界展望

○第56回西宮市民文化祭川柳大会は10月23日西宮市民会館で開催された。当日の天位は次のとおり。

ふわふわと生きて明日の風掴む　亀岡　哲子

○第26回桜井市民川柳大会は10月30日、80人の参加で開催された。

〈ライオンズ賞〉

終章を彩る小さい小さい恋　安土　理恵

○寝屋川市民川柳大会は、11月3日寝屋川市立総合センターで開催された。

〈秀句〉

母さんの愛はまるくてあたたかい　大内　朝子

疎ましくうれしくもあり母のこと　岩佐ダン吉

屋台では軽い話が似合いそう　冨山ルイ子

○第14回天領倉敷川柳大会は、11月3日倉敷美術館で開催された。当日の秀句。

わたくしが実るあなたのてのひらで　池　森子

○第57回市川市文化祭川柳大会は、11月20日89名の参加者により市川市民会館で開催された。当日の天位。

零年を語る石狩鍋囲む　根岸　方子

子を救う臓器へ母は迷わない　播本　充子

○第47回豊中市民川柳大会は、11月23日133名の参加により豊中市立中央公民館で開催された。当日の天位。

柄になく悟った日から只の木偶　高田美代子

○尼崎ザ川柳は11月26日、尼崎市総合文化センターで開会された。当日の天位。

少子化の闇を切り裂く呱々の声　田辺　鹿太

愛のない笑顔は偽証罪になる　太田扶美代

胸の疵癒えれば恋し都会の灯　西出　楓楽

▽出　版△

○中澤伽羅さんの遺句集を、長女の難波りんごさんが上梓。『その笑顔』A5判96頁。

○福島万年氏（同人・広島県）は、句集『百花園』を発刊。B6判変型128頁。句集紹介114頁。

○正畑半覚氏（同人・竹原市）は、句集『父の一言』を発刊。A5判204頁。句集紹介次号の予定。

○藤井則彦氏（同人・豊中市）は『心に響く最期のことば～古今東西二〇〇人の生きざま～』を出版。故薫風名誉主幹の辞世の句も掲載されている。現代図書・B6判204頁　価格1500円＋税

▽同人動向△

○12月4日の第25回川柳塔鹿野みか月川柳大会出席のため、天笑主幹・みつ子副主幹、楓楽副理事長外7名鳥取市鹿野町行。

○播本充子さん（理事・八王子市）は、2月から「川柳塔八王子支部」を立ち上げる。連絡先電話0426―65―3172

☆時の川柳社では、小松原爽介氏が25年間務めた主幹を1月から、平山繁夫氏に委譲される。

新同人紹介

中村（なかむら）　れんげ

―天笑・岳人・みつ子・恭昌推薦

米田（よねだ）　水昇（すいしょう）

―天笑・岳人・みつ子・恭昌推薦

▽訂正お詫び△

11月号＝114頁下段10行目、心地良き→心地良さ

12月号＝87頁上段25行目、撤兵→徴兵　P92頁中段15行目、軸丸勝巳→平田実男

◎本欄続きは128頁中段

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 まつえ	14日(土)午後2時締め切り ペット・改・七草・生きる	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9—23—22　三島淞丘
川柳塔 みちのく	14日(土)午後4時から 雑煮・呑む・いよいよ	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-0161 青森県南津軽郡平賀町杉館字宮元53-1 小寺花峯
川柳 ねやがわ	15日(日)　正午から スタート・犬・期待	寝屋川市民会館 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9　高田博泉
川柳 藤井寺	15日(日)午後12時半締め切り **(新年句会します)**	**新年句会＝和楽心（11：30）** 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	15日(日)午後1時半締め切り 香水・誓い・縄のれん	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川柳会	16日(月)午後1時から 入れる・大事・なぜか・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2—8—4　江見見清
高槻川柳 サークル 卯の花	19日(木)午後1時半締め切り 初対面・夢中・やっぱり 探す・自由吟	高槻現代劇場306号室　阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1118 高槻市奥天神町1-26-17 瀧本きよし
岸和田 川柳会	21日(土)午後1時半から 挨拶・威厳・迂回・絵葉書	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-307 長谷川呂万
はびきの 市民 川柳会	22日(日)午後1時から いろいろ・ビジネス 医者・「骨」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11　塩満　敏
川柳 ふうもん 吟社	22日(日)午後1時から 一発・カリスマ・吉と凶	JR鳥取駅構内　シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3—102—2　植田一京
南大阪 川柳会	24日(火)午後6時半締め切り ホープ・太る・丸い・器	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
東大阪市 川柳 同好会	28日(土)午後6時から 狙う・夢・かたち・薮入り	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3—3—21　片岡湖風
川柳クラブ わたの花	27日(金)午後9時半から 躾・後悔・埋める・やれやれ	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
京都 塔の会	30日(月)午後2時締め切り 昔・重い・電話	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6629-6914）へご連絡ください。

1 月 各 地 句 会 案 内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
尼崎 いくしま	6日(金)午後2時締め切り 拝む・福・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	7日(土)午後1時から 今・たっぷり・自由吟	富田林中央公民館 （近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m） 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉吉 川柳会	7日(土)午後1時から 愛・波・練(ね)る	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
城北 川柳会	7日(土)午後1時半締め切り 未来・押す・メモ・自由吟	**新年句会＝神徳会館（12：30から）** 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川柳塔 みぞくち	8日(日)午前10時半から 犬(戌)・初夢・雑詠	神奈備会館 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
八尾市民 川柳会	8日(日)午後1時から ブレーキ・雪・拝む・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室（近鉄山本駅） 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川柳塔 わかやま	8日(日)午後1時から 日の丸・絆・アルバム いつ（何時）	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111—2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	9日(月)午後1時から 儲ける・一途・開く・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2—82—308 西口いわゑ
川柳塔 唐津	9日(月)午後1時半から 芽・燦々・駆ける	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517—13 宗 水笑
尼崎 尾浜 川柳会	10日(火)午後1時から 絵筆・吠える・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5—2—47 田辺鹿太
ほたる 川柳 同好会	10日(火)午後1時から 旗・頑張る・ふっくら	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール 蛍池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曽根2—4—1 水野黒兎
川柳塔 な ら	12日(木)午後1時から ささやく・錦・体裁	奈良市立中央公民館4F（近鉄奈良④出口歩5分） 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62—6 渡辺富子
堺川柳会	14日(土)午後1時から 犬(共選)・嬉しい あ・ず・さ(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町2—16—3 河内天笑
川柳塔 打吹	14日(土)午後1時から 策・酒・開く	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637—3 牧野芳光

編集後記

☆明けましておめでとうございます。『川柳塔』を今年もよろしくお願いします。

☆今年の干支の戌は、方角で言えば西北西、時刻なら午後8時頃。この時間は一日の仕事を終えて、一家団欒の充実した時間に当る。これに因んだ穏やかな一年であるよう祈念したい。

☆表紙裏に記載の要項で、誌上川柳大会を催します。当誌としては800号記念誌上大会以来です。4月号まで応募用紙を同封しますので、ふるって応募下さるようお願いします。

☆12月某日、京都南座の顔見世を観た。今年は人間国宝中村鴈治郎の坂田藤十郎襲名披露で、前評判も大変高い。

☆上方和事の創始者で元禄時代に京坂で活躍した藤十郎の名跡は、三代目で途絶え231年が経っていた。近年衰退している上方歌舞伎の再興こそ真の歌舞伎の繁栄に繋がる、と強い思い入れを持っての73歳の藤十郎襲名である。政治、経済、文化等の東京一極集中化が著るしい今、この襲名は関西に元気を与えてもらえるであろう。

☆藤十郎丈の八重垣姫（本朝廿四孝）は、所作、容姿共にとても73歳と思えぬ素晴しい芸であった。医者と縁がないという健康と、芸への情熱の賜に違いない。

☆折りから歌舞伎がユネスコの「人類の無形文化遺産」に選ばれたとの発表があった。能楽、人形浄瑠璃、文楽に続き日本の伝統芸能が注目を受けたことは大変喜ばしい。暗い事件の多い中の清涼剤であった。（ふ）

ひとこと

川柳駆け出し

川柳との出合いは、平成十一年夏、心臓病で緊急入院。退屈な入院生活に辟易していた矢先、新聞の川柳欄が目に止まり、駄目もとで投句したところ思いがけず掲載され、活字になった喜びを味わったのが切っ掛けである。

以来、新聞数社に投句、時たまの掲載に勇気づけられ、カルチャー教室や三幸川柳教室に入会、川柳の基礎や経験もおぼつかぬまま、十七音字にもがき、貧しい己の言葉に愕然とし凹んだ日も……。

昨年六月、川柳塔同人の承認証を授与された時、川柳をやっていて良かった…としみじみ感じた。

折しも『川柳しませんか』が発行され、川柳の基礎を自分のものとして確立し、ぶれのない句が作れるようになるまで熟読したい。

川柳をはじめて嬉しかったこと。①第13回和歌山県大会で和歌山市長賞②初出席の本社句会で「天」を貰ったことである。　喜田　准一

★初光ここに人間陶冶の詩　　薫風

★作家・開高健の記念館を訪れた。（神奈川県茅ヶ崎市東海岸南6―6―64）海の好きだった作家らしく、湘南海岸の近くに建てられた邸宅が没後、記念館に解放されたものである。

★門柱の表札には夫人の牧羊子（詩人）と故人の名刺。往時そのままの書斎には、専用の原稿用紙、万年筆、眼鏡に亡き人の面影が色濃く漂う。

★世界中を釣りした記念の戦利品の数々の展示品に混じって、二メートルは優にあろうかと思われる蛇の抜け殻にギョッ！ギョッ！

★一九六一年、イスラエルでナチスのアイヒマン裁判を傍聴をしたり、一九六四年には新聞社の臨時特派員としてベトナム戦争へ出発。ベトコンに包囲され危機一髪、死地を脱出したことも。

★記念館の庭には開高健の言葉が書かれた板碑がある。「朝露の一滴にも天と地が映っている」「明日、世界が滅びるとしても今日、あなたはリンゴの木を植える」「悠々として急げ」開高の人生観に多くを教えられた。

★「遠い道をゆっくりと、けれど休まずに歩いていく人がある」と開高も書いている。さて今年はゆるりと参ろうぞ。（朱）

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

種目「　　」発表（3月号）地名

都道府県市　姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友　マルで囲んでください。

投句先　〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町2-10-16 ウエムラ第2ビル202

檸　檬　抄　投　句　用　紙

「ソフト」　（１月15日締切）

３月号発表

藤田　泰子　選 ――共選―― 仁部　四郎　選

B　A

地名

市都
県道府

姓
雅号

切らないで下さい

B　A

地名

市都
県道府

姓
雅号

左右に同じ句を書いて下さい

本社1月句会

とき　1月7日㈯ 午後1時開場・2時締切り
―開催時間、締切り時間に御注意下さい。

ところ　アウィーナ大阪　4階　金剛
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441

おはなし　河内天笑

兼題「いよいよ」　吉村一風選
「生　む」　平松かすみ選
「来　る」　岩佐ダン吉選
「タイミング」　西出楓楽選
「　玉　」　板尾岳人選

席題　1題　当日発表（各題2句以内）

会費　1000円　投句料　500円

本社2月句会　7日(火) 午後1時から

兼題「におい」「捻子」「招く」
「エリート」「豆」

作品募集

3月号発表（1月15日締切）

川柳塔（8句）　河内天笑選
水煙抄（8句）　板尾岳人選
愛染帖（3句）　新家完司選
檸檬抄（「ソフト」（2句））　（仁部四郎共選）
一路集（3句）　藤田泰子共選
「芽」　飛永ふりこ選
「燦々」　山岡冨美子選
「駆ける」　深田倶久選
初歩教室「三」（3句）　三宅保州担当

4月号

檸檬抄「机」
一路集「希」「ともだち」「花びら」
初歩教室「揺れる」

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。

(2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。

(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

(4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

第24年度　夜市川柳募集

第8回「奪　う」　藤田泰子選
ハガキに3句　**1月末**締切

投句先　〒593-8305　堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方　**堺川柳会**

定価　八百円（送料92円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）

二〇〇六年（平成十八年）一月一日発行
編集兼発行人　河内權治
印刷所　美研アート
発行所　**川柳塔社**
〒545-0005　大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六　ウエムラ第2ビル202号室
電話（〇六）六六二九―六九一四番
振替　〇〇九八〇―五―三三三六八番

ホームページアドレス　http://www.senryutou.join-us.jp/

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成十八年一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻九四四号 ● 川柳塔 一月号 ● 定価 八百円（送料 九十二円）

全日本川柳誌上大会のご案内（平成柳多留第11集）

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」（平成柳多留第11集）を開催します。日川協年次大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ㈳全日本川柳協会の権威ある三大年間行事ですので、こぞってご参加ください。

課題と共選者（各題2句・連記）

「宇宙」　丸山しげる ― 田頭　良子　共選
「川」　横村　華乱 ― 牛尾　緑良　共選
「反対」　あきたじゅん ― 安永　理石　共選
「哲学」　中澤　恵生 ― 小梶　忠雄　共選
「穴」　佐藤　正 ― 天根　夢草　共選

第二次選者　板尾　岳人　近江あきら　斎藤　大雄
酒井　路也　塩見　草映

参加費　2000円（投句料・『平成柳多留』第11集代金含む）

賞　平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞・㈳日本青少年育成協会会長賞・㈳全日本川柳協会会長賞
全日本川柳誌上大会賞・秀作賞（予定）

締切　**平成18年1月31日（火）（当日消印有効）**

発表・表彰　第30回全日本川柳岩手大会（平成18年6月）

参加方法　参加用紙（雑詠1句）と出句用紙（2通1組）に記入し、参加費2000円（振替又は小為替）とともに左記へご送付ください。

〒530-0041　大阪市北区天神橋二丁目北1―11―905
社団法人　全日本川柳協会
電話（06）6352―2210
FAX（06）6352―2433

医療法人社団
湯川胃腸病院
・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得
健康保健取扱　看護2A・緩和ケア病棟
・消化器科・内科・外科
・放射線科・ホスピス
・デイサービスセンター
診療時間
月～金　8:30～16:00
土　8:30～11:00
JR桃谷駅徒歩3分
http://www.yukawa.or.jp
電話 大阪(06) 6771-4861(代)

雑誌 05703―1